

柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第67集

# 関町

—新潟県柏崎市関町・関町造跡発掘調査報告書—

2012

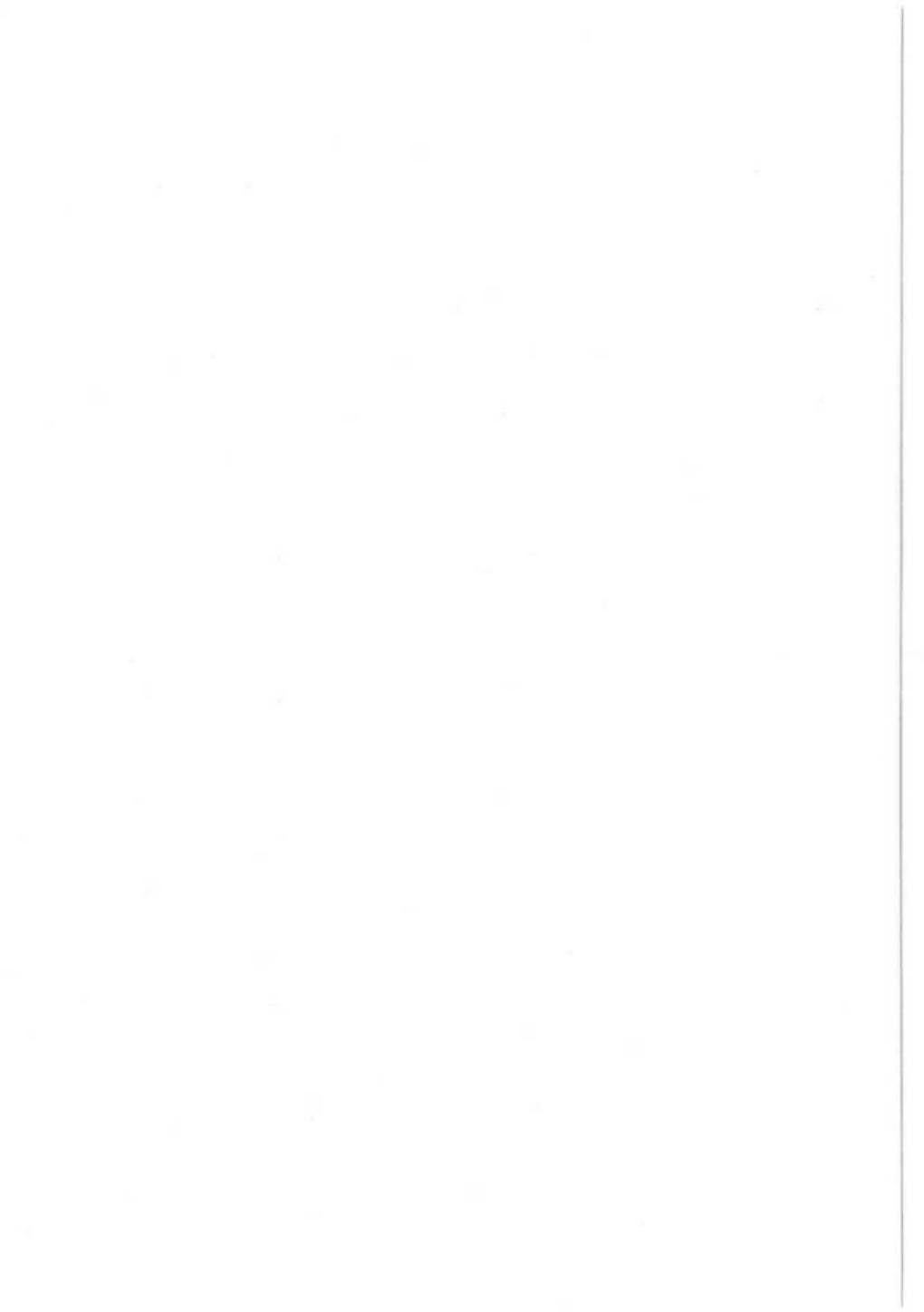
柏崎市教育委員会

# 関町

—新潟県柏崎市関町・関町遺跡発掘調査報告書—

2012

柏崎市教育委員会



# 序

柏崎市立枇杷島小学校の周辺では開発が進み、国道8号を中心に宅地や商業地が広がっています。このため、現在では過去の歴史や環境をうかがい知ることは難しくなっています。そうした中、平成21年6月から平成23年2月にかけて枇杷島小学校の改築が行われました。

柏崎市教育委員会では、この改築工事に合わせて関町遺跡の発掘調査を行いました。関町遺跡の存在は既に知られていましたが、いつ、どのような人々がこの地で生活をしてきたのかは、ほとんどわかつていませんでした。今回の調査で、鎌倉時代や江戸時代における人々の生活の様子がわかり、しかもこれらの人々が、現代につながる開発を担った人たちだったということもわかつてきました。

まず、鎌倉時代に、鏡が沖を中心に広がっていた大きな湿地のほとりに集落が成立しました。というのもこの周辺から建物や井戸、溝などが見つかっているからです。また、遺跡の東には大きな湿地が広がっていたこともわかり、ここでも多くの遺物が出土しています。ある井戸から出土した護符には「蘇民将来」と書かれており、湿地からは舟の形代も出土しました。これは、この地で生活を始めた人たちが、多くの不安を振り払うために、無病息災の祈りを形として表していたものと考えられます。

次に、江戸時代にも、現在の鏡が沖中学校周辺で、新田開発が活発に行われたと伝わっており、この時期にも再び集落が成立しています。当時の人々は東側に広がっていた湿地も農地に姿を変えている様子で、現代の私たちが見ている鏡が沖は、この時代の人々によって作られてきたものといえます。

このように発掘調査の成果は、地域の歴史の一端を明らかにしてくれます。この成果が、市民の郷土に対する愛着や新たな歴史理解へつながればこれ以上の喜びはありません。

最後に、今回の発掘調査に格別なるご助力とご配慮をいただいた柏崎市立枇杷島小学校、新潟県教育委員会、植木・東北特定共同企業体、そして発掘調査に参加された（社）柏崎市シルバーパートナーズセンターの会員の皆様に対し、深く感謝し、御礼申し上げます。

平成24年3月

柏崎市教育委員会

教育長 大倉政洋

## 例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市関町地内に所在する関町遺跡の発掘調査記録である。
2. 本事業は、柏崎市立枇杷島小学校の改築工事に伴い柏崎市教育委員会が主体となって発掘調査を実施したものである。調査と整理の体制は第Ⅰ章に記した。
3. 発掘調査に関わる経費は、柏崎市が負担した。
4. 発掘調査事業は平成21年度から平成23年度にかけて行った。発掘調査の現場作業は平成21年度に実施し、その後の期間は出土遺物や記録類の整理作業、発掘調査報告書の執筆・作成業務を行った。
5. 発掘調査の現場作業は、柏崎市教育委員会職員が調査担当として、(社)柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施した。整理・報告書作成作業は、柏崎市遺跡考古館において整理担当職員を中心に、柏崎市遺跡考古館スタッフが行った。
6. 発掘調査によって出土した遺物の注記は、遺跡名を略号で記し、グリッド名や遺構名及び層序などを併記した。
7. 本事業で出土した遺物並びに発掘調査や整理過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会(柏崎市遺跡考古館)が保管・管理している。
8. 本報告書の執筆及び編集は、整理担当の中島が行った。なお、中・近世の陶磁器については、相羽重徳氏と伊藤啓進のご教示を得た。
9. 本書掲載の図面類の方位は全て真北である。
10. 発掘調査から本報告書作成に至るまで、事業主体者および関係者等から様々なご協力とご理解を賜った。記して、厚く御礼を申し上げる次第である。

相澤 央　相羽重徳　浅井勝利　高橋一樹　前嶋 敏　柏崎市立枇杷島小学校  
新潟県教育庁文化行政課　新潟県立歴史博物館　植木・東北特定共同企業体

# 目 次

I 調査に至る経緯と経過 .....	1
1 発掘調査に至る経緯 .....	1
2 発掘調査業務の概要と調査体制 .....	2
1) 本発掘調査の経過 / 1    2) 整理・報告書作成 / 2    3) 調査体制 / 2	
II 関町遺跡をめぐる環境 .....	3
1 関町遺跡の位置と地理的環境 .....	3
2 歴史的環境 .....	3
III 調査の概要 .....	7
1 調査区と調査方法 .....	7
1) 調査区とグリッドの設定 / 7    2) 発掘調査の方法 / 7	
3) 遺構の分類と整理作業 / 7	
2 基本層序 .....	8
IV 遺構 .....	9
1 概要 .....	9
2 遺構各説 .....	9
1) 掘立柱建物・櫛 / 9    2) 溝 / 11    3) 井戸 / 11	
4) 土坑 / 13    5) 濡地性堆積 / 14	
V 出土遺物 .....	15
1 遺物概観 .....	15
2 器種分類 .....	15
3 遺物各説 .....	16
VI まとめ .....	22
1 中世前期の遺物 .....	22
1) はじめ / 22    2) 中世前期の土器・陶磁器の概要 / 22	
3) 出出土器の変遷 / 22	
2 中世前期の遺構 .....	24
3 中世前期集落の位置付け .....	26
4 その他の時代の関町遺跡 .....	27

引用参考文献

別表

調査報告書抄録

## 挿図目次

第1図 柏崎平野の地形分類と関町遺跡の位置 (縮尺 1:100,000)	/ 4
第2図 関町遺跡と周辺の古代・中世の遺跡 (縮尺 1:75,000)	/ 6
第3図 掘立柱建物・柵配置図 (縮尺 1:500)	/ 10
第4図 土器皿・小皿器形分類図 (縮尺 1:4)	/ 16
第5図 S E65出土木簡赤外線写真 (新潟県立歴史博物館撮影)	/ 17
第6図 S X 1 遺物出土散布図	/ 19
第7図 関町遺跡試掘・本発掘調査構造概略図 (縮尺 1:500)	/ 25

## 別表目次

別表1 関町遺跡遺構一覧表	/ 30
別表2 関町遺跡掘立柱建物・柵一覧表	/ 34
別表3 関町遺跡遺物観察表	/ 35

## 図版目次

図版1 グリッドの配置と基本層位図 (1:400)	図版21 出土遺物実測図 5 SX1 (100~142)
図版2 遺構配置図 1 (1:250)	図版22 出土遺物実測図 6 SX1 (143~163)
図版3 遺構配置図 2 (1:250)	図版23 出土遺物実測図 7 SK73、SD266、 SK249、SE282、SK237、 SK228a (164~188)
図版4 遺構配置図 3 (1:100)	図版24 出土遺物実測図 8 包含層 (189~218)
図版5 遺構配置図 4 (1:100)	図版25 出土遺物実測図 9 包含層 (219~241)
図版6 遺構配置図 5 (1:100)	図版26 遺構写真 1
図版7 遺構配置図 6 (1:100)	図版27 遺構写真 2
図版8 遺構配置図 7 (1:100)	図版28 遺構写真 3
図版9 遺構配置図 8 (1:100)	図版29 遺構写真 4
図版10 遺構配置図 9 (1:100)	図版30 遺構写真 5
図版11 遺構個別図 1	図版31 遺構写真 6
図版12 遺構個別図 2	図版32 遺構写真 7
図版13 遺構個別図 3	図版33 遺構写真 8
図版14 遺構個別図 4	図版34 遺構写真 9
図版15 遺構個別図 5	図版35 遺物写真 1
図版16 遺構個別図 6	図版36 遺物写真 2
図版17 出土遺物実測図 1 SD57グリッドFO-P、 SD57グリッドI-J-K (1~39)	図版37 遺物写真 3
図版18 出土遺物実測図 2 SD57グリッドFI-J-K (40~65)	図版38 遺物写真 4
図版19 出土遺物実測図 3 SD57グリッドFD~H1、 SD277、SE77、SE65 (66~84)	図版39 遺物写真 5
図版20 出土遺物実測図 4 SE122、SE210、 SD38、SK52、SK64、SK79、SK96、 SK20、SK158 (85~99)	図版40 遺物写真 6
	図版41 遺物写真 7

# I 調査に至る経緯

## 1. 発掘調査に至る経緯

明治7年に創立した枇杷島小学校は柏崎市関町に所在し、現在は300名余りの児童が在籍している。昭和45年に建設された旧校舎は老朽化が進行しているとともに、旧耐震基準で建設されていることから、早期の改修が望まれていた。新校舎の建設にあたっては移転して新築する案も出されたが、枇杷島小新校舎建設委員会は現在地での改築を望む要望書を柏崎市教育委員会（以下、「市教委」）に提出し、このことは柏崎市議会にも報告された。これを受け、新校舎は現在の学校敷地内の校庭に建設することが決定した。新校舎建設のスケジュールは、基本設計を平成19年度に行い、実際の建設工事は平成21年度から開始されることとなった。

ところで、関町遺跡は昭和62年に刊行された『柏崎市史資料集 考古篇 1』で初めて紹介された遺跡であるが、枇杷島小学校前の民家の建築に際して発見されたと記してあるだけで、発見された遺構や遺物などは明らかにされていなかった。また、一般国道8号線の沿線であるこの地域では市街地化が進行しており、新たに遺物が採集されることもなく、関町遺跡はその様相が不明瞭なまま、市史の記述に基づいて新潟県遺跡台帳に記載された。この段階で確認されていた遺跡範囲には今回の校舎建設予定地は含まれていなかった。しかし、建設工事中に埋蔵文化財が発見された場合には、工事の進行に多大な影響を与えることとなるため、事前に埋蔵文化財包蔵地の有無を確認することとなった。

第1次調査は平成21年6月20日～24日に実施した。校舎棟と体育館棟が建設される敷地の約5,300m<sup>2</sup>に15ヶ所のトレンチを設定して調査を行った結果、中世を主体とする集落跡が発見された。枇杷島小学校の改築はそこで学ぶ児童を始め、地域住民の強い要望であることから、校舎建設などで破壊される遺跡部分は記録保存することとなった。そのため、発掘調査範囲を明確にするため、また、本発掘調査の積算資料を得ることを目的として第2次調査を実施した。この調査は平成21年8月5日～6日に行い、7ヶ所のトレンチで遺構や遺物の分布状況を確認した。

試掘調査の結果を基に、記録保存のための本発掘調査を行うこととなったが、建設工事は着工時期が迫っており、調査は速やかに行う必要があった。工事担当者や施工業者と調整を行い、発掘調査は基礎工事で遺跡が破壊される部分に限定して行うこととなった。柏崎市長は、平成21年7月9日付けで教総第554号で文化財保護法第94条に基づく通知を新潟県教育長を行った。また、柏崎市教育長は平成21年10月7日付け教総第584号で文化財保護法第99条に基づき、発掘調査に着手する旨の通知を行い、調査を開始した。

## 2 発掘調査業務の概要と調査体制

### 1) 本発掘調査の経過

発掘調査は体育館棟予定地と校舎棟予定地の2ヶ所に分けて行うこととし、北側の体育館棟部分から着手した。体育館棟部分の調査は平成21年10月8日から11月4日に、校舎棟部分の調査は同年11月16日から11月27日まで行った。

## 2) 整理・報告書作成

平成21年度は出土遺物の洗浄、注記、接合を主に、発掘調査終了後に継続して行った。漆器や木筒、木製品などが出土したことから、劣化防止のための保存処理を行った。また、製鉄関連遺物も出土しており、化学分析も同年度中に行なった。これらはいずれも専門の業者に委託して行った。

平成22年度から、報告書作成のための本格的な整理作業を開始した。報告書に掲載する遺物の選定を行い、実測図の作成を開始した。また、現場で作成した平面図やセクション図などの整理も行い、デジタルトレースによる図版の作成も行った。

平成23年度は報告書の作成を本格的に開始し、原稿の執筆、遺物写真の撮影、残された図版の作成などを行なった。

## 3) 調査体制

発掘調査は、柏崎市教育委員会が主体となり、教育総務課遺跡考古館埋蔵文化財係が担当した。整理作業も引き続いて行い、一部の作業は業務委託により行なった。発掘調査及び整理作業の体制は以下の通りである。

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 小林和徳（～平成23年10月28日）

大倉政洋（平成23年10月29日～）

総括 遠山和博（教育総務課長）（～平成22年3月）

　　本間敏博（　　〃　　）（平成22年4月～平成23年3月）

　　猪俣哲夫（　　〃　　）（平成23年4月～）

管理 品田高志（教育総務課埋蔵文化財係長）

調査担当 中野 純（埋蔵文化財係主任）

調査員 伊藤啓雄（埋蔵文化財係主査）

　　中島義人（埋蔵文化財係主査）

　　石橋夏樹（埋蔵文化財係準職員）

　　室星尚史（　　〃　　）

調査補助員 池田文江（柏崎市遺跡考古館）

　　西谷良子（　　〃　　）

　　山岸サチ子（　　〃　　）

整理作業員 柏崎市教育委員会臨時職員（柏崎市遺跡考古館）

発掘作業スタッフ 社團法人柏崎市シルバー人材センター会員

## II 関町遺跡をめぐる環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

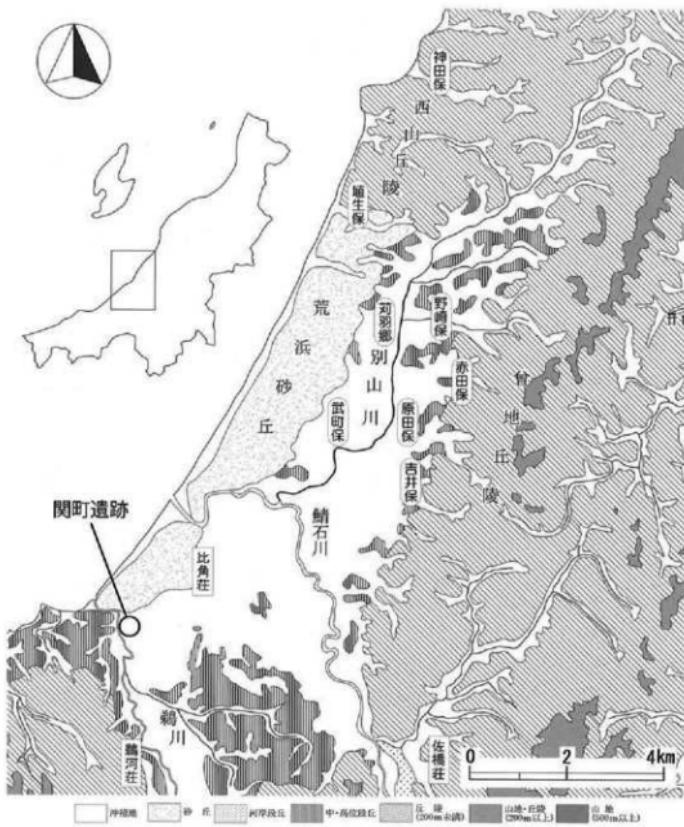
柏崎市は新潟県中越地方の最西部に位置し、約42kmの海岸線を有する。市域は柏崎平野とこれを取り巻く山塊や丘陵の大部分を占め、広ぼうは東西27.4km、南北40.2km、面積442.70km<sup>2</sup>である。山地は西側から米山・黒姫山・八石山を頂とする刈羽三山とこれに連なる丘陵からなり、東頸城丘陵の一部に相当する。平野南西部の米山丘陵は強い傾斜の山裾が断崖を形成して海岸線に至り、頸城平野と地形的に隔絶する。また、八石山やその北東方向に続く曾地丘陵は、信濃川流域に発達した新潟平野と区画しており、柏崎平野は独立した水系により形成された平野となっている。

この柏崎平野を形成する主要河川は鶴川と鯖石川がある。東頸城丘陵から流れだし、平野を三分するよう西へ向かい、日本海に至る。関町遺跡は、柏崎平野南部を流れる鶴川の下流域に位置する。鶴川は黒姫山付近の尾神岳を源として、田屋川、上条芋川、横山川などの小支流を合わせながら、柏崎市街地を抜けて日本海に至る。流域面積は108.7km<sup>2</sup>、流路延長は24.6kmの二級河川である。現在は河川改修が進んでおり、中・下流域では直線的な流れの部分が多いが、旧来は点在する段丘などの地形的障壁に支配され、大きく蛇行を繰り返していた。さらに、河口付近には柏崎砂丘と荒浜砂丘が海岸線に沿って伸びており、沖積地からの排水を阻んでいる。このため、鶴川だけではなく鯖石川でも川の流れが妨げられ、後背地となる低地は湿地性が高いものとなっている。

関町遺跡は、柏崎市関町に位置する。関町遺跡の立地は、鶴川下流域の右岸に広がる三角州の南西端付近となっている。北側には被覆砂丘である柏崎砂丘が東西に広がり、南側は谷底平野となっている。この三角州から谷底平野にかけての広い範囲が鏡ヶヶと呼ばれている。過去には鑑湖と呼ばれる広大な沼が広がっていたが、江戸時代になって埋め立てが進んで現在の姿になったとされる。また、枇杷島の地名はこの沼に浮かぶ島状の地形に由来するともいわれる(下中1986)。関町遺跡は鶴川と鑑湖と呼ばれた沼地帯に挟まれた地域に立地していたことが想定される。遺跡範囲は枇杷島小学校の敷地を中心に、その周辺に及ぶと見られる。遺跡周辺の現況は、北側を東西に走る国道8号線と西側を南北に走る国道353号線の沿線を中心に商業地や住宅地として開発が進んでいる。このため、現在は遺跡が営まれた時代の景観を窺い知ることは困難となっている。

### 2 歴史的環境

9世紀初頭頃、古志郡から三嶋・高家・多岐の三郷が分かれて三嶋郡が成立した。この三嶋郡の範囲は、現在の柏崎市と刈羽村を合わせた地域に概ね相当すると考えられる。関町遺跡が所在する鶴川流域は三嶋郷に含まれると想定される。三嶋郷には郡の中核部である郡衙や、北陸道の駅家である三嶋駅が設置された。古代において関町遺跡の周辺が政治・交通の重要な地域であったことが想定される。また、三嶋郷域と考えられる地域には、軽井川南遺跡群や藤橋東遺跡群といった製鉄遺跡や、須恵器窯の雨池古窯跡が所在しており、奈良・平安時代には手工業生産においても重要な位置を占めていたと考えられる。



第1図 柏崎平野の地形分類と関町遺跡の位置（縮尺 1:100,000）

中世になると三島郡や各郷の名称はほとんど用いられなくなる。「吾妻鏡」文治2年（1186）3月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎市域に所在した莊園として「宇川（鶴川）莊」「佐橋（鯖石）莊」「比角莊」が記載される。宇川莊は鶴川流域を中心に安田付近まで及び、鏡ヶ沖の湖沼に隔離されることにより鶴川河口付近にまでは至らず、南部丘陵までを含むと想定されている。比角莊は、現在でも比角の地名が残っていること、觀応元年（1350）の「室町將軍家足利義詮御教書」の「越後國比角莊袋条地頭職者可為女子東御方分」に記載された袋条が元城町字袋田に比定されている（村山1990）ことから、現柏崎市街地を中心とする範囲と考えられる。佐橋莊は鯖石川に因る名称と考えられ、史料に長鳥條の名が残されていることから、鯖石川中流域から長鳥川流域などを莊域としていたと考えられる。これらの想定によれば、関町遺跡は比角莊の莊域に存在していたこととなる。

また、「吾妻鏡」によれば、文治2年（1186）当時の比角莊は穀倉院領であり（柏崎市史編さん委員会1987b）、中原家と清原家が別当を家職化していたとされる。先に挙げた「室町將軍家足利義詮御教書」の

記載により、14世紀中葉段階には荘内に地頭職を分割していたとしている。また、「御守記」貞治3年(1364)6月18日条においても穀倉院領であることが記載されており、14世紀中葉までは中原家によって知行されていたことがわかる。これ以降、比角荘の名称は史料では確認されなくなる。南北朝の動乱以降、地頭等の在地勢力が台頭し、荘園領主が衰退していったのであろう。

室町時代から戦国時代には在地の支配者が勢力を伸張していったと考えられる。柏崎平野の主な勢力には、佐橋荘と宇川荘安田条を本貫地とする毛利氏、宇川荘上条の上条氏、宇川荘下条とみられる琵琶島城の宇佐美氏、刈羽の赤田城を拠点する斎藤氏などが挙げられる。毛利氏は、数多くの要害で領域を守り、当地域では最大の勢力を誇っていた。宇佐美氏は、南北朝期の始めに上杉氏に従って越後に入部したとされる。上条氏は、上杉氏の一門が上条に配置されたのが始まりとされ、守護上杉氏に最も近い一門として重要な位置を担ったとされる。

鶴川流域の中世の遺跡は下流域から中流域で多く見つかっており、上流域ではやや少なくなる。近年、多くの遺跡で発掘調査が行われている。鶴川下流域の主な遺跡では、下沖北遺跡、千古作遺跡、香積寺沢遺跡、琵琶島城跡が挙げられる。下沖北遺跡は、13世紀から14世紀にかけての遺跡で、溝に区画された内部で多くの建物などが検出された。また、土器を一括廃棄したと考えられる土坑や、土器を埋納したピットなども検出されている。千古作遺跡は13世紀後半から15世紀が主体の遺跡である。農耕に関連する祭祀と見られる遺構も検出されている。香積寺沢遺跡は13世紀後半～16世紀前葉を主体とする。琵琶島城跡は、鶴川の自然堤防上に位置する平城で、鶴川や横山川を天然の堀とする。一部で発掘調査を行っており、幅3mを超える溝から15世紀を主体とする遺物が出土している。鶴川中流域では上条城跡、黒滝城の他に、周辺の自然堤防上や丘陵間に多くの遺跡が点在する。

鯖石川流域では、下流域の東原町遺跡や角田遺跡などで調査が行われている。東原町遺跡は13世紀後半から14世紀を主体とする遺跡で、銭貨埋納遺構や土器皿類を一括廃棄したと見られる遺構も検出されている。角田遺跡は13世紀後半を主体とする。鯖石川と別山川の合流点を拠点とした水上交通に関わる小領主の存在が想定されている。また、上流域では、佐橋荘の中核に位置するとされる馬場・天神腰遺跡がある。12世紀から16世紀初頭に至る集落遺跡で、側溝を備えた道路などに区画整理された、都市的性格を帯びた集落の様相が明らかになった。



1 場塲	17 東原町	33 天満日	49 馬場・天神殿	55 赤木	81 直瀬
2 戸口	18 春日陣屋	34 天満1	50 龜ノ倉	66 秋里	82 新星敷
3 吉井水上1	19 桜木町	35 下津北	51 小瀬	83 山王前	83 古町
4 吉井番	20 藤井坂	36 芦原	52 南条城	84 深町	84 古町城
5 矢田城	21 前田	37 下沖	53 六角	85 田島城	85 上条城
6 江ノ下	22 不退寺	38 鳴尾數	54 加納下川原	86 北村	86 たんこうけ
7 山潤城	23 小峯	39 鶴巻田	55 山谷	87 山室鎌谷	87 佐木
8 八方口城	24 柏原町	40 早山	56 住吉	88 吉田	88 織姫城
9 畑尾城	25 柏原宿	41 谷田	57 加納城	89 前勝9	89 濱野
10 下才見	26 大久保東	42 安新田	58 山王おばたけ	90 堂ノ前	90 伏見山城
11 下才見	27 關町	43 安田城	59 小畠城	91 麻入城	91 木沢城
12 岩野城	28 芙輪	44 堂の瀬	60 善根冬城	92 木沢城	
13 角田	29 京田	45 北条城	61 上加納		
14 總下川原	30 總見島城	46 北条城	62 八石城		
15 檜川原	31 朝野下	47 音無城	63 鴨田		
16 上原	32 戎山	48 清瀬城	64 谷内田		

第2図 関門遺跡と周辺の古代・中世の遺跡 (縮尺 1:75,000)

### III 調査の概要

#### 1 調査区と調査方法

##### 1) 調査区とグリッドの設定

関町遺跡の発掘調査の対象範囲は、枇杷島小学校改築工事で新たに建設される校舎棟及び体育館棟、これを接続する渡り廊下の部分である。調査は、基礎工事により掘削される部分について行うこととして、掘削を免れる範囲については現状保存することとなった。調査区の大部分は井桁状を呈する。この調査区の形状を考慮して、グリッドは正方眼に設定せず、基礎工事の柱列ごとに設定することとした。グリッドの表記は、南北列のアルファベットと、東西列の算用数字を組み合わせ、V-25などとした。グリッドの南北列は真北より西へ4.6度傾く。最北西端にあたるV-21グリッドの西北角の世界測地系座標はX=150,899.392、Y=4,750.037である。このグリッドを用いて、表土層や遺物包含層、広範囲にわたる遺構から出土した遺物の取上を行った。

##### 2) 発掘調査の方法

グラウンドの整地層と基礎層、自然堆積層の除去に重機(0.25m級バックホウ)を用いて、遺物包含層の上面を検出した。この段階で遺物の出土状況を把握し、遺物が稀薄な部分ではさらに重機による掘り下げを行った。遺物が一定量確認されたところからは人力による包含層の掘り下げを行い、遺構面を検出した。遺構の検出は包含層掘削の進捗に合わせて随時行い、検出状況の概略図を作成して遺構番号を付した。遺構番号は全て連番として、遺構種別を表す略号を付けた。遺構検出後は、一定の範囲毎に検出状況の写真撮影を行い、その後に掘削に取りかかった。井戸・土坑・ピット類は半裁を基本とし、溝は土層観察用のベルトを適宜設定して掘削し、覆土の堆積状況や遺物の出土層位を確認した。遺構内から出土した遺物は出土層位などを確認し、必要に応じて出土状況の図面や写真の記録を作成した。またトータルステーションで地点を記録してから回収したものもある。土層観察用の壁面やベルトを残して掘削を行った遺構では、土層断面図や写真撮影後に完掘を行った。完掘後はそれぞれの写真を撮影とともに、グリッドの列毎に全景写真も撮影した。調査区が狭小なため、調査区全体の完掘写真の撮影は行わなかった。調査の記録写真は35mm判のカラーネガフィルムとカラーリバーサルフィルムを用いて撮影し、補助的にデジタルカメラも使用した。

遺構全体図は、トータルステーションで観測したデータをキャドで編集して作成した。

##### 3) 遺構の分類と整理作業

現場で付された遺構番号や遺構種別は整理作業の段階で再検討を行った。調査区壁などにより分断され別別の番号が付けられた遺構は、一連の遺構と捉えられるものを抽出して最も若い番号に統一した。これにより使用しなくなった番号や、遺構以外の落ち込みと判断したものの番号は欠番としている。掘立柱建物や柵列の遺構番号は、新たに1番から通し番号を付けた。

遺構種別はアルファベットによる略号を用いて表記している。今回の報告で使用しているものは、SB

(掘立柱建物)、SA(柵列)、SK(土坑)、SE(井戸)、SD(溝)、SP(柱穴・ビット)、SX(特殊遺構・湿地跡)である。出土遺物は全て洗浄し、土器類には遺跡名と出土地点などを注記して、接合資料の検討を行った。木製品や鉄滓は注記せず、ラベルとともに収納した。出土木製品の一部、木簡は委託業務により保存処理を施した。

## 2 基本層序

基本土層は試掘調査において把握されたものを踏襲し、一部を変更した。第Ⅰ層は現表土層で、グラウンドの整地層である。今回の発掘調査では、事前に第Ⅰ層を除去しており、基本的には土層断面図には表されていない。第Ⅱ層・第Ⅲ層は校庭を造成する際の盛土層である。第Ⅱ層は砂質、第Ⅲ層は粘土質のものを主体とする。第Ⅳ'層は黒褐色粘土層で、校庭を造成する以前の水田耕作土と想定される。第Ⅳ層は遺物包含層に相当する。色調の違いから細分した。第Ⅳ a 層はやや明るい灰色を呈するもので、色調の違いによりさらに細分している。第Ⅳ a - 1 層は褐灰色を呈するもので、試掘調査時の第Ⅳ a 層に相当する。第Ⅳ a - 2 層は灰色を呈するもので、試掘調査の第Ⅳ b 層に相当する。第Ⅳ b 層はやや黒みがかった灰色を呈するもので、試掘調査の第Ⅳ c 層に相当する。第Ⅳ c 層は、試掘調査では設定していないものの、第Ⅳ b 層と第Ⅴ層がまだ混じり合う漸移層である。第Ⅴ層は遺構確認面に相当する。試掘調査では色調の違いにより細分しているが、今回は一括した。大部分では緑灰色を呈する粘土層である。

基本土層の分布状況を見ると、第Ⅲ層以上は当然のことながら普遍的に堆積している。第Ⅳ'層もほぼ全域で確認できるが、校庭の造成に際して除去されたとみられ、消失している部分もある。包含層では、第Ⅳ a 層はほぼ全域で確認されるが、第Ⅳ b 層は調査区南側の大部分では確認できない。第Ⅳ c 層が見られない部分は遺構が掘削されている範囲にあたっており、遺構はこの層より上位から掘削されているものが多いと考えられる。第Ⅳ b 層が見られない範囲では第Ⅴ層の標高が高くなっている。このことが、自然の堆積に影響を与えたものか、遺跡の形成時に整地されたことによるものかは明らかにできなかった。

## IV 遺構

### 1 概要

今回の発掘調査区で検出された遺構は、ピット、井戸、土坑、溝、鍛冶関連遺物集中遺構があり、また広い範囲で湿地性堆積の痕跡が認められた。ピットは、第2次確認調査で検出したものを含めると189基である。調査区のほぼ中央にあたるJ・Kグリッドで特に多くなっており、これより北側でも比較的多く分布している。調査区内に未調査部分が多く残されているため、これらのピットを用いて建物や柵列を想定することは困難であった。復原された掘立柱建物は5棟、柵列は8基である。井戸・土坑は40基である。井戸側をもつものはないため、上面直径に比して深度が深いものや、覆土の下層を中心に黒色のしまりが弱い粘土が堆積するものを主に井戸に分類した。井戸の分布も、ピットの分布と同様に調査区中央とその北側で多くなっている。土坑には様々な規模や形態のものがある。特徴的なものとして、平面形が円形で浅く、覆土に地山土のブロックを多く含むものが複数見つかっている。これは、一ヶ所に集中するものではなく、調査区の広い範囲に分布している。溝は未調査部分で途切れるものが多いが、それぞれ一連と捉えられるものをまとめて、10基とした。直線的な溝が多いが、円形に巡るものも検出された。直線的に伸びる溝には、南北方向とこれに直交するもの、これらと明らかに主軸が異なるものがある。円形にめぐる溝は、調査区南端部付近で検出したものである。鍛冶関連遺物集中遺構は、一定の範囲内に小片の鍛冶滓が散布しているものである。これらの他に、自然地形の痕跡と見られる湿地性の堆積を広い範囲で検出した。調査区東部で南北に広がるもので、これにより遺跡の東端が限定されると考えられる。

### 2 遺構各説

#### 1) 掘立柱建物・柵

今回の調査区で建物の様相が概ね把握できたものは1棟である。この他、平行、もしくは直角に位置する2辺以上の柱穴列を把握できたものを建物の一部であると想定した。また、柱穴が柱筋を彫削して並ぶものは柵とした。掘立柱建物は5棟、柵は8基である(別表2)。しかし、今回の調査で検出したピットの総数は189基であり、他にも多くの建物・柵が存在したことが想定できる。建物・柵の分布は、調査区中央部より北側で多く、当然のことながらピットの分布状況と一致する。建物の主軸は、真北から東に數度程度傾くものが3棟、西に傾くものが2棟である。柵も同様で、主軸もしくは直交する軸が東に傾くものと西に傾くものに分けられる。

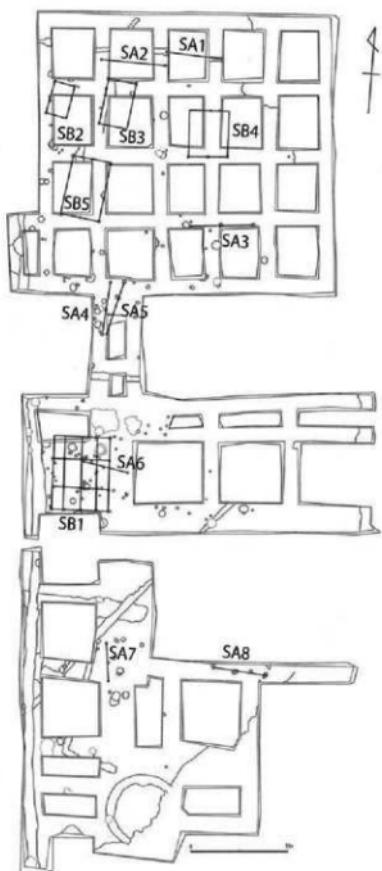
S B 1 (図版11) 調査区中央西寄りに位置する主軸が西へ傾く建物である。建物の西側にはS D 57がある。建物の西辺とS D 57は1mと離れていない。北西角の一部は未調査範囲にかかる。梁行側柱間の間隔の違いから両面廂付きの総柱建物であると想定した。身舎は2間(7.57m)×3間(3.41m)で、桁行き側の柱間は両端が2.3m、中央が3mと異なる。梁行き側は1.7m前後で、桁行きに比べて短い。廂は身舎から約1.3m広がる。柱穴は、直径0.3m以内と小規模で、確認面からの深さも0.3m以下と浅い。覆土は、暗褐色粘土、黒灰色粘土、黒褐色粘土のものが多く、いずれの柱穴でも柱痕は見られない。遺物はS P 149

から土器の小片が出土しただけである。

**S B 2** 調査区北西端付近のT-21に位置する。南東部分は未調査で、2間(3.4m)×1間(2.1m)の建物である。柱穴の直径は0.3m未満で、深さは0.3m前後である。覆土はいずれも黒灰色粘土が主体である。

**S B 3** T-22に位置する3間(4.7m)×1間(2.9m)の建物である。桁側の柱間は1.4m～1.7mと一定しないが、柱筋が通る。柱穴の直径は0.3m以内で、覆土は黒灰色粘土を主体とする。遺物は出土していない。

**S B 4** S-24に位置する建物で、2間の梁と相対する梁の中央の柱穴をもって2間(4.0m)×3間(4.7m)の建物を想定した。柱穴の直径は0.2mのものが多く、覆土は黒灰色粘土が主体となる。



第3図 据立柱建物・柵配置図(縮尺1:500)

**S B 5** Q～R-22に位置する。相対して並行する2間の梁を確認したが、桁行きは未調査部分が多いため柱穴を確認できない。梁行きの柱間はいずれも2m前後と一定で、両梁の間隔は3間分となる6mの距離である。柱穴の直径は0.4m以上から0.2mまでと一定ではないが、覆土は黒灰色粘土が主体となり、全て同様のものである。

柵 SA1・SA2は2基の柱穴しか確認できていない。SA1を構成する柱穴はいずれもSD3を掘り込んだもので、形態、底部標高、覆土の様相などが似ている。SA2はSD3に概ね平行するもので、覆土が類似する柱穴から構成される。SA3は柱間が3mを超えるものである。SP66から木製品の部材が出土した。SA4は柱筋が揃うが、柱間が一定しない。SA5は柱筋が揃い、柱間もほぼ一定である。ただし、SP84の覆土は他のものと異なる。SP106から出土した木製品は柱根と見られる。SA6は柱間が一定でない。SA7の柱間は等間隔であるが、柱筋が若干はずれている。西側に広がる建物の可能性がある。SA8は柱筋が揃うものの柱間に大きな差がある。SP262で近世の陶器が、SP266でクルミが出土した。

以上のように、今回抽出した建物・柵は、不明瞭な部分が多い。特に柵は、未調査部分の状況によって建物跡に発展する可能性を含むものである。

## 2) 溝

**S D 57 (図版12)** 調査区西端で、調査区壁にほぼ平行するようにグリッドD-1からP-20にかけて検出した。延長約67mを確認しており、さらに南北に続いている。ほぼ直線的で、主軸は真北から若干西へ傾く。断面形は北側では丸底で、南側では逆台形となり、一部はテラス状の平坦面をもつ。幅は1.5mから1.0mほどで推移し、深さは約0.3mである。底部の標高は北側がやや低くなっている。調査区の南端と北端との標高差は約0.2mである。覆土は暗灰色粘土と灰色粘土が主体である。明瞭な水流の痕跡は確認できない。他の構造との新旧関係は、S X 73・S K 98・S K 253より新しく、S E 174・S K 228 bより古い。覆土内から多くの遺物が出土した。特にグリッドJ-1より北側で多く、多くは下層覆土の上面付近から出土した。また、覆土上層から出土するものもあるが、床面直上のものは少ない。遺物は中世前期のものが大部分を占める。土器皿が多く、少量の珠洲が混じる。土器皿は大半が破片となったもので、完形に近いものは少ない。珠洲は小片となったものばかりである。古代以前の遺物も出土しており、グリッドH-1より南で多く見られる。いずれも小片である。近世陶器が1点出土している。調査中に混入したものか、上面から掘削された構造が把握できなかったためのものと思われる。

**S D 3 (図版13)** 調査区北端付近を東西に通る溝である。未調査区により4ヶ所に分かれているが、一連のものと捉えると、全長約19mを確認できる。東側はS X 1に向かい、西側は調査区外へ続いている。幅は0.4mから0.8m程度で推移し、若干蛇行する。主軸は真東よりやや南に傾く。第IV c層上面から掘り込まれる。深さは0.2m以下である。覆土は灰色粘土と黒灰色粘土の2層からなる。S A 1を構成するピット2基に切られる。底部の標高は西側で低く、東西の標高差は0.07mである。

**S D 38 (図版13)** グリッドR-21に位置する。南北方向の溝で、両端は未調査部に至る。幅は0.8mで、確認できた延長は1.6mである。第IV c層上面から掘り込まれ、深さは0.1m以下である。土器皿の小片が出土した。

**S D 119 (図版13)** グリッドK-1~3に位置する、東西方向の溝で、中央部が未調査部で途切れるが、一連のものと捉えると、延長5.1mを確認したこととなる。幅は0.7m前後で、第IV c層上面から掘られ、深さは0.3mとなる。断面形は逆台形である。主軸は真北より東へ3°傾く。土器の小片と珠洲の壺、碗形鍛冶溝、炭化物などが出土した。

**S D 277(図版13)** 調査区南端付近のグリッドD 1-3を中心位置する。溝は円形にめぐっており、円周の外側で直径7.6m、内側で6.0mである。南東部はS X 1に埋没する。溝の幅は0.9m前後で概ね一定する。北側の内周側に一部テラス状の平坦部があるが、覆土の状況から他の掘り込みに伴うものと考えられる。底部は概ね平坦で、確認面からの深さは0.2m前後である。底面の標高は西側が若干高く、東側との標高差は0.1m程度である。覆土は、テラス状部分のものを除いて3層に分けられる。いずれも黒灰色粘土と灰色粘土が混ざるもので、混合の状況によって分けられる。第2層以下には地山に似た緑灰色粘土が多く含まれる。最下層の大部分を灰色粘土が占めており、溝が機能していた際の1次的な堆積と見られる。溝の中から、円碟が16点出土した。12cm前後から20cmを超えるものまである。いずれも加工痕や使用痕は認められない。床面よりやや上の第3層上面付近から出土した。2点から5点程度が固まっているが、計画的に配置した様子は認められない。この他に土器皿の小片、須恵器、種子が出土した。

## 3) 井戸

**S E 40 b (図版14)** R-21に位置する。北東部は未調査の範囲にかかる。S K 40 aとS P 40 cに一

部を壊される。平面形は長径0.9mの南北にやや長い楕円形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、底部は丸く凹む。深さは0.7mである。覆土は4層に分かれ、下位の2層は有機質を多く含む黒灰色粘土層である。第3層の下位から、微細な木片が多く出土した。

S E 58 (図版14) P-21に位置する。南側半分は未調査である。直径0.8m前後の円形になると見られる。断面形は底部が半円形で、壁面は垂直に立ち上がる。第IV c層を掘り込み、深さは0.8mである。覆土は5層に分けたが、最上層は埋没後に掘られたものと見られる。下位の2層は腐植物と炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

S E 59 (図版14) P-21に位置する。平面形は直径0.6mの円形である。断面は壁面がわずかに開き気味に立ち上がり、底部は丸く凹む。覆土の堆積状況を見ると、東側から流れ込むように埋没している。5層に分けられ、上層は地山土のブロックを多く含み、下位では炭化物や腐植物はほとんど見られない。覆土中から土器小片や、不定形の鉄滓が出土した。

S E 65 (図版14) P-23に位置する。東側に接するS P 66を壊す。平面は直径0.7mの円形で、断面は底部が平坦で、壁面が垂直気味に立ち上がる箱形を呈する。深さは0.8mである。覆土は4層に分かれ、上位層は灰色が主体となり、下位では黒色に近い粘土層が堆積する。第4層は東側隣に堆積する。土器皿・小皿・珠洲片口鉢・木製品・小型の鍛冶津などといった比較的多くの遺物が出土しており、その多くは第3層から出土したものである。木製品には木簡や下駄がある。

S E 122 (図版14) I-5に位置する。南側の一部をS P 135に壊される。平面は直径0.6mの円形で、やや東西に長い。断面形は、上部の壁面は垂直気味に立ち上がり、下位は袋状となって広がっている。深さは1.1mである。覆土は3層に分かれ、概ね水平に堆積する。覆土は炭化物を多く含むが、腐植物は見られない。土器皿、板状部材、箸が出土した。

S E 98 (図版14) N-23に位置する。北西部の大部分は未調査区にかかる。平面は直径1.0m程度の円形になると見られる。壁面はやや開き気味に立ち上がり、底部は平坦である。深さは1.0mである。覆土は3層にわかれ、黒色に近い第3層が半分以上を占める。第3層の上位から部材や杭などの木製品が出土した。

S E 77 (図版14) N-21に位置する。北西部の一部は未調査区にかかる。平面は直径1.0mの円形で、断面は底部が平坦で壁面が垂直気味に立ち上がる。覆土は3層に分かれ、第2層以下は黒色に近い粘土層である。第2層を中心曲物や折敷の底板が出土した。

S E 124 (図版15) I-5に位置する。平面は直径0.6mの円形で、断面は下半が円筒形、上半は若干開き気味になる。底部は平坦である。覆土は2層に分かれ、上層と下層の境目付近で曲物の側板と見られる板材が出土した。腐朽が著しく軟質なものであった。他に土器の小片が出土した。

S E 174 (図版15) J-1に位置する。S D 57の東に接しており、壁面の堆積の観察からS D 57の埋没後に構築されたことがわかる。北側の半分は調査区外に位置する。平面は直径0.8m程度の円形となり、断面は東側の壁面が垂直気味に立ち上がり、西側は開き気味となる。覆土は大きく4層に分けられる。最下層は地山崩落土と見られる灰色粘土が主体で、西側壁面から崩落したものと見られる。中層には黒色腐植物が多く含まれる。土器の小片や須恵器、棒状部材などが出土した。

S E 210 (図版15) J-1に位置する。平面は直径0.6mの円形で、断面は円筒形である。確認面からの深さは65cmと浅い。覆土は3層に分かれられる。第3層は暗緑灰色粘土を多く含むもので、壁面が崩落したものと見られる。第2層の下位で砾と土器皿が出土した。また、珠洲片口鉢の小片も出土している。

S E 222 (図版15) I-2に位置する。西側の半分は未調査であるとともに、大部分を校舎の基礎杭

に壊されている。平面は直径0.9mの円形で、断面は円筒形である。確認面からの深さは0.9mである。土器小片や須恵器甕の体部片が出土した。

S E 282 D 1-1に位置する。平面は直径0.7mの円形で、断面は円筒形である。確認面からの深さは1.2mで、当遺跡で確認された井戸の中では比較的深いものである。断面図は作成していないが、覆土は上層が灰色粘土を主体とし、下層は黒灰色粘土を主体とする。越中瀬戸などの近世陶器、木製品、粉挽き臼など多くの遺物が出土した。

#### 4) 土坑

S K 27 (図版15) T-23に位置する。平面は直径0.8mの円形で、壁面は垂直に立ち上がる。底部は中央がやや凹み、他は概ね平坦である。深さは0.4mである。覆土は3層に分かれたが、いずれも緑灰色シルトの大型のブロックに黒灰色粘土が混ざるものである。土器の小片、珠洲甕の体部破片、炭化木材が出土した。

S K 52 (図版15) R-23に位置する。平面は直径0.7mの円形で、壁面はやや斜めに直線的に立ち上がり、底部は平坦である。深さは0.5mである。覆土は3層に分かれられる。いずれの層も緑灰色粘土と黒灰色粘土が混じる。第1層は黒灰色粘土がやや多く、第2層以下は大部分を緑灰色粘土が占める。床面より若干浮いた状態で口縁部を一部欠損する土器小皿が出土した。

S K 93 (図版15) P-24に位置する。平面は直径0.9mの円形で、壁面はやや開き気味に立ち上がり、底部は平坦である。深さは0.2mである。覆土は2層に分かれれる。下層は黒灰色粘土が全体に薄く堆積する。上層は緑灰色粘土の大型のブロックが主体となる。

S K 96 (図版15) O-25に位置する。平面は長径0.7m、短径0.6mの南北にやや長い楕円形である。壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。覆土は3層に分かれ、東側から流れ込むように堆積する。第1層は黒灰色粘土からなり、第2層以下は緑灰色粘土のブロックが多い。遺構のほぼ中央、第2層中に大型の円礫があり、これに乗るような状態で西側の壁付近から珠洲甕の破片が出土した。珠洲甕は底部の破片で、全周が残る。第2層上面に位置して内面を上に向いている。

S K 110 (図版15) M-2に位置し、北西側でS P 109を壊す。平面は直径0.6mの円形で壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。覆土は2層に分かれれる。上層は黒灰色粘土で、下層は黒灰色粘土を主体に緑灰色粘土がまだらに混じる。土器の小片が出土した。胎土の様相から古墳時代頃のものと見られる。

S K 158 (図版15) J-1に位置する。平面は直径0.8mの円形で、南東側の一部が若干広がる。壁面は垂直に立ち上がり、底部は平坦である。覆土は大きく2層に分かれ、地山質の暗緑灰色粘土が主体となる。底面上で珠洲甕の底部破片が出土した。

S K 202 (図版15) J-1に位置する。平面は直径0.6mの円形で、断面は浅い碗形を呈する。覆土は2層に分かれ、下層は緑灰色粘土が多く、上層は黒灰色粘土が多い。土器の小片や小型の鉄滓、焼土片が出土した。

S K 6 (図版16) U-21に位置する。東側の一部は未調査である。平面は直径0.6mの円形で、断面は下方に向かって徐々に狭まり、底部は丸底である。覆土は4層に分かれれる。第3層から板状の木製品が出土した。また、土器片も出土している。

S K 64 (図版16) Q-22に位置する。東側の一部は調査区外である。平面は直径0.7mの円形で、断面は上部の壁面は垂直に立ち上がり、底部は丸底となる。覆土は3層に分かれ、北側から流れ込むように堆積する。土器小皿が出土した。

**S K 79** (図版16) N-21に位置する。平面は長径0.8m、短径0.6mの南北に長い椭円形である。断面は半円形である。覆土は大きく4層に分かれ、レンズ状に堆積する。土器小皿、木製品が出土した。

**S K 228・S K 228 a・S K 228 b** (図版12) F-1に位置する。南北は未調査部分に広がる。周辺の遺構を含む前後関係は古い順にS D 57、S K 228 b、S K 228 a、S K 249である。S D 123との前後関係は確認できなかった。S K 228 aは東西3m以上、南北1.7m以上で、深さは北側で14cm、南側で30cm程度である。大型で比較的浅いもので、土坑としたが、南北に続く溝状になることも想定できる。底面には細かい凹凸が点在する。覆土は2層に分かれ、暗灰色、黒灰色の粘土からなる。肥前系陶磁器や砥石などが出土した。S K 228 bは幅0.9mが確認された。底面は比較的平坦である。未調査区やS K 228 aに壊された部分が多く、全形を窺い知ることはできない。S K 228からは肥前・志野・珠洲が、S K 228 aから肥前が、S K 228 bから土器皿の小片が出土した。

**S K 249** (図版12) F-1に位置する。S K 228 aとS D 123を填す。小規模で浅い土坑である。染付の碗、鍛治津が出土した。

**S K 253** (図版16) H-1-1に位置し、S D 57の底面で確認された。断面の観察によりS D 57より古い。東側は未調査区にかかる。平面は直径0.8m前後の円形になると見られる。S D 57底面からの深さは0.5mである。覆土は4層に分けたが、ほぼ同質のものと見られる。覆土中から樹皮が出土した。

**S K 283** (図版16) D-1に位置する。南側の大部分は調査区外である。東西は最大幅2.3m、南北0.8mが確認できる。平面形は隅丸方形を呈すると想定する。断面形は逆台形で、底部は広く平坦である。覆土は6層に分けた。下の2層は水平に堆積し、上位は両側から流れ込んで堆積している。全体的に灰色粘土が多く、緑灰色粘土がまだらに混じる部分もある。土器片、小型の鉄滓が出土した。

**S K 272・S K 273** (図版16) F-2に位置する。S K 272は長径1.0m、短径0.8mの隅丸方形となる。S K 273は直径1.0mの円形になると見られる。深さはいずれも数cm程度と浅い。S K 273から土器片が出土した。器形は把握できないが、胎土の様相から古墳時代のものと見られる。

**S K 275** (図版16) F-2に位置する。平面は直径0.8mの円形で、深さは5cm程度と浅い。覆土から土器の小片が出土した。S K 272同様の質のもので、古墳時代に属するものと見られる。

**S K 73** (図版12) O-0からP-0に位置する。西側は調査区外に続き、東側はS D 57に壊される。北東部でS K 97を壊す。南北の長さは3.2m以上となる大型の落ち込みである。確認面からの深さは0.2m以下と浅い。覆土は暗褐色粘土を主体とする。土器皿、珠洲、白磁、青磁、漆器、土錘が出土した。

## 5) 濡地性堆積

**S X 1** 調査区の東側で全域に広がる緩やかな落ち込みである。覆土は腐植物を多く含む褐色土を主体とするもので、当地域では「カクモ」と呼ばれる。湿地帯の痕跡であると想定されるもので、鏡ヶ沖周辺や地下の水位が高い地域などの試掘調査でもしばしば検出される。この腐植物層の下位で遺構が検出されることはほとんどなく、確認調査でもこの腐植物層を調査しているが、この層の下位から遺構は検出されなかった。このため、今回の本発掘調査では基本的に完掘は行っていない。しかし、V 24~25付近では覆土上面付近で多くの遺物が出土したため、底部まで掘り下げを行った。この部分では多量の土器皿と木製品のほか、珠洲や青磁も出土した。遺物の分布にはある程度のまとまりを認めるこどもでき、落ち込み縁辺の西側に集中する傾向がある。木製品では舟形があり、何らかの祭祀に伴って廃棄されたことが考えられる。

## V 出土遺物

### 1 遺物概観

関町遺跡の発掘調査では、土器・陶磁器類、木製品、製鉄関連遺物、種子、骨など多彩な遺物が出土した。出土遺物は中世前半のものが多数を占めており、古墳時代、古代、近世のものもある。

中世前半の遺物はSX1・SD57で多く出土している。他にも井戸や土坑等からも出土している。種類別では、土器皿・小皿が多く、他に珠洲、青磁、白磁などがある。当遺跡の土壤が粘質で水分を多く含んでいたため多くの木製品も遺存していた。曲物や折敷、用途不明の部材が多く、他に木筒や舟形などの祭祀に関わる遺物も出土した。製鉄関連遺物では輪の羽口や鍛冶津がある。

近世の遺物は中世前期に次いで多い。遺構からまとまって出土したものもあり、土器皿、肥前系などの国産陶磁器、中国産磁器、粉挽き臼などの石製品などがある。古代以前の遺物は包含層や中世以降の遺構に混入したものが多く、遺構の時期を特定するような出土状況のものは見られない。土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

各時期の遺物の分布範囲をみると、中世前期のものは調査区のほぼ全域で出土するものの、調査区南側では少なくなる傾向にある。近世初頭のものは調査区中央から南側で比較的多く見られ、古代以前のものも南側でやや多く出土している。

### 2 器種分類

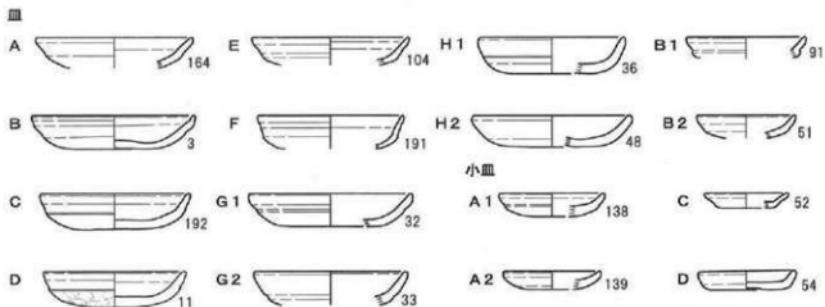
中世前期の土器皿・小皿が多く出土しており、形態には様々なものがあるため、皿を5種に、小皿を4種に分類した。一部はさらに細分をした（第4図）。

#### 皿

- A類 口縁端部外面に面取りを行う。体部は横ナデによる凹みができる、外反気味に広がるもの。
- B類 口縁端部外側を面取りし、口縁部が上方を向く。体部外面には横ナデによる凹みができる。
- C類 口縁部が上方を向くが、口縁端部外面は膨らみ気味となる。体部には横ナデによる凹みができる。
- D類 口縁部と体部に横ナデを行い、凹みが2段できる。口縁部は外側に開く。
- E類 口縁部下位と体部に横ナデを行い、凹みが2段できる。口縁部は外側に開く。
- F類 器壁が薄く、口縁部が直立気味に立ち上がり、身の深い形態を呈する。
- G類 口縁部に凹みができるが、体部にのみ凹みが一段できる。凹みの位置が器高の中位付近のものをG1類、これより低い位置にできるものをG2類にした。
- H類 横ナデの凹みが不明瞭である。口縁部の開きが小さいものをH1類、大きいものをH2類とした。
- X類 中世後期から近世初頭の京都系土器皿である。

#### 小皿

- A類 口縁部外面に面取りを行うもの。体部に凹みができるものをA1類、凹みが無いものをA2類とした。



第4図 土器皿・小皿器形分類図（縮尺1:4）

B類 口縁部下位、もしくは体部に横ナデによる凹みができるもの。凹みが深いものをB1類、浅いものをB2類とした。

C類 口縁部が外反して開くもの。

D類 口縁部が直立気味に立ち上がり、ナデ調整が不明瞭なもの。

X類 中世後期から近世初頭の京都系土器の小皿である。

### 3 遺物各説

**S D 57** (図版17~19) S D 57からは多くの遺物が出土した。長大な遺構のため、未調査区で区切られた範囲毎の出土遺物の様相を概観する。

**A地区 (1~10)** グリッドO~Pから出土したものである。土器皿では、A・B・D・E・H1類がある。残存状況が良好なものは3のみであり、その他は細片となったものばかりである。焼成は3・4・6が軟質で、他のものもそれほど堅緻ではない。実測した個体は全て白色系統で、未実測の細片2点に橙色に発色するものがある。胎土に砂粒を多く含むものは見られず、若干の差違はあるが、概ね類似した胎土のものである。2は口縁部の一部に煤が付着する。土器小皿はB2類の小片が1点ある。珠洲は片口鉢の口縁部と壺R種の体部破片である。片口鉢は注口部付近の破片で歪みが大きいが、口径は25cm程度と見られる。壺の体部は、肩の張りが小さく、肩部と胴部上位の2段に櫛描きによる波状文がめぐる。片口鉢はII期、壺はIII期以前のものと見られる。10は越中瀬戸皿の底部で、調査中に混入した物であろう。

**B地区 (11~65)** グリッドI~Kから出土したものである。対象とする範囲が長いこともあり、出土量が多い。土器皿はD・E・G1・G2・H1・H2類があり、G2類とH2類が多い。遺存状況はいずれも悪く、全形の半分近く残るものが2点ある他は、いずれも小片である。調整は比較的粗雑なものが多く見受けられる。橙色の発色をするものは13・29・31・32・33・39・41で、その他にも若干赤味を帯びるものもある。焼成は軟質のものが多く、堅緻なものは11・18・19・29のみである。G類・H類に胎土の粗いものが多い。煤が付着するものは8点確認できる。土器小皿は4点あり、B2類とC類がそれぞれ1点、D類が2点である。D類の54は完形品である。器形に歪みが大きく、胎土はやや粗い。52は橙色を呈する。珠洲は片口鉢、壺、甕が出土した。片口鉢の口縁部はいずれも端部が外側に傾く。55は黒色の吹き出しが多く、56は海綿骨針を多く含む。56の鉢目は幅の広い原体で深く刻まれる。甕は口縁部が大き

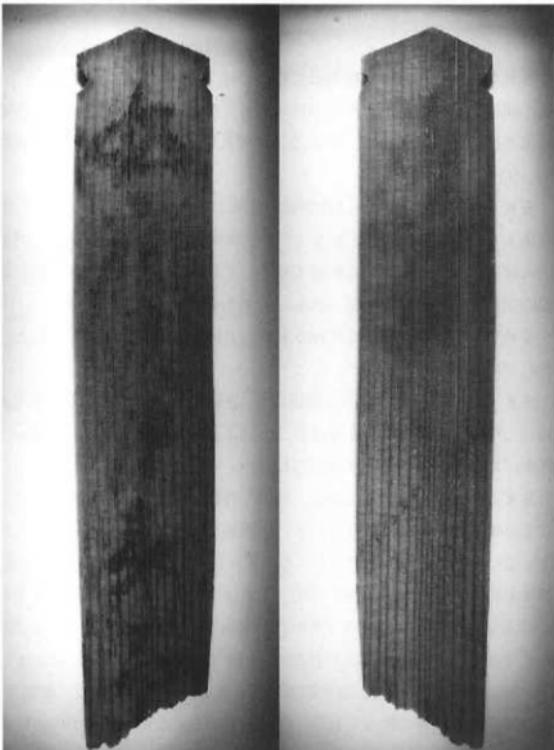
く湾曲して開き、頸部は短く、肩部の開きが小さい。壺は頸部から肩部にかけての小片で、焼成はやや軟質である。壺もしくは壺の体部破片も出土した。白磁は碗皿類の口縁部である。この他に小片であるが、鏡連弁文をもつ青磁碗が2点出土している。

C地区 (66~75) グリッドD~H1から出土したものである。対象とする範囲が長いが、中世の遺物は少ない。土器皿はC・E・G1・H1・H2類がある。70がほぼ全形が残る以外は、いずれも細片である。成形や調整が粗雑なものが多く、ナデによる凹みをもつものも稜が不鮮明である。焼成はいずれも軟質である。69・70は胎土に砂粒を多く含む。珠洲は片口鉢と壺の体部破片がある。片口鉢の73は、口縁端部が外傾し、74は内面に波状の鉄目を施す。II期に属すると見られる。

S D 277 (76) 圖化したものは土器皿G1類の1点である。小片で、摩滅が著しい。溝の底部付近からは16点の礫が出土した。加工痕は認められない円礫で、長径12cmから20cm程度のものである。2点から5点がまとまって出土しているが、配置に規則性は認められず、礫の特徴もまとまり毎の共通点などは見出せない。この他に、古墳時代のものと見られる土器片が多く出土したが、いずれも細片で器形を窺い知ることはできない。

S E 77 (77~79) 土器皿はH2類の小片である。明るい赤褐色を呈し、焼成は軟質である。外面にわずかに被熱の痕跡が見える。木製品は曲物の底板の一部とみられる円形の板状部材と、長方形の板状部材がある。

S E 65 (80~84) 井戸の中層で、まとまって珠洲や木製品、礫が出土した。珠洲は小型の片口鉢である。底部の切り離しは静止糸切りで、内面に鉄目は見られない。体部は膨らみ気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに内屈する。II期の所産と見られる。木製品には下駄・木筒・板状木製品・棒状木製品がある。下駄は身と齒を一体で成形し、鼻緒を取り付ける穴が3ヶ所に開けられる。指などの痕跡と見られる浅い凹みがあり、左足のものであると判断できる。82は木筒である。頭部を山形にし、側部に刻みを入れる。下部は欠損する。長さ16.2cmが残存し、幅



(表) (裏)  
第5図 S E 65出土木筒赤外線写真 (新潟県立歴史博物館撮影)

3.1cm、厚さ3mmである。墨書の内容は赤外線写真の撮影を行い、多くの方から教示を得た。上1字目は「☆」(五芒星)で、統いて「蘇□(民)将来子×」と判読された。裏面に文字はなかった。この他に用途不明の部材もある。

S E 122 (85~87) 土器皿3点である。85は下層から、他は上層から出土した。いずれも口縁部を含む小片で、D類とG1類である。86は内面のほぼ全体に煤が付く。87は外面に広く黒斑が見られる。

S E 210 (88) 土器皿H1類と被焼した礫が出土した。土器皿は全体の半分強が残る。器壁は厚く、調整は粗雑で、胎土はやや粗い。外底面は中央部を除く外周に煤が厚く付く。内面は一部に薄いヨゴレが見られる。

S D 38 (89) 土器皿D類の小片である。横ナデによる凹みは2段残るが、いずれも浅く稜が不鮮明なものである。

S K 52 (90) 土器皿B2類である。遺構中央の底面付近から出土した。一部を欠損するが、ほぼ全形が残る。破損部は若干摩滅する。体部下端を横ナデすることにより凹みができる、底部との境が明瞭となる。内面に薄く墨痕が見られる。

S K 64 (91) 土器皿B1類の口縁部の小片である。体部下半の凹線は深く、下端の稜が鋭い。焼成は良好である。

S K 79 (92~95) 土器皿はC類の口縁部小片である。器壁が薄く、口縁端部はわずかに内屈する。土器小皿はA2・B2・D類に分けられる。93のA2類は口縁部の面取りが広くなっている。94・95も口縁部外面に弱いナデを行っている。いずれの小皿も器壁が薄く、器高が低い点が共通する。胎土は92と94、93と95が類似する。

S K 96 (96~97) 96は珠洲甕の底部から体部下端部分の全周が残る。遺構西側の第3層上面付近から出土し、下位には円礫が接していた。焼成が軟質なこともあり、外面の叩き目痕は少し摩耗している。内底面も摩滅しており、破断面も摩耗して丸みを帯びている。内面には被熱の痕跡が見られる。破損後に他の用途に用いられたと見られる。97は折敷の底板と見られる。

S K 20 (98) 部材と見られる木製品である。遺構底面で出土した。断面は正方形に近く、斜めに穿孔されている。

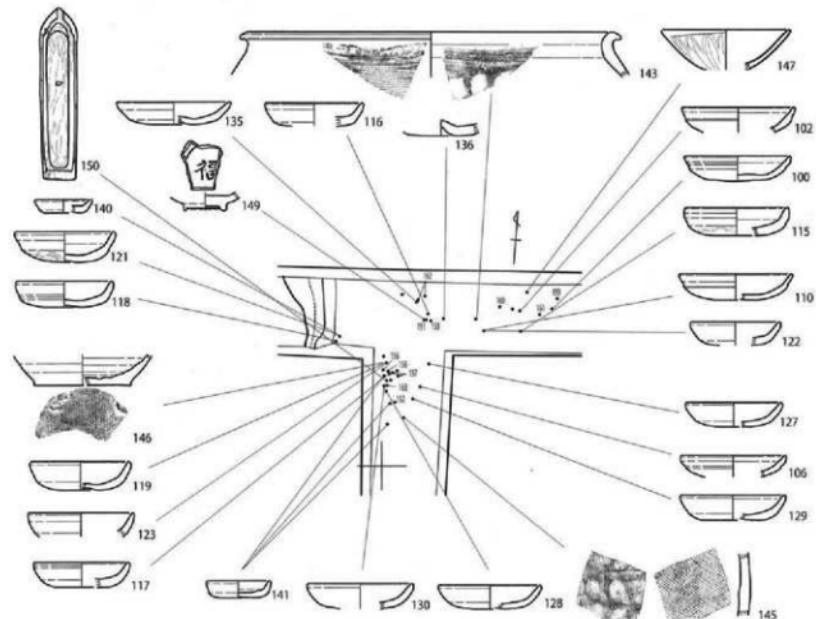
S K 158 (99) 珠洲甕の底部破片で、全周の約半部が残る。遺構の床面付近から出土した。器壁は2cm以上と厚い。内面には火を受けたことによると見られる煤が薄く付いており、器面に細かい亀裂が入る。外面に顯著な被熱の痕跡は認められない。

S X 1 (100~163) 土器皿、珠洲、青磁、木製品などが出土した。その大部分はグリッドV-24・25でまとめて出土したものである。土器皿・小皿が大部分を占めており、図化した以外にも破片が多く出土している。土器皿にはB・C・D・E・G1・G2・H1・H2類がある。100・121はほぼ全形が残る。他は小片のものが多い。100・101・106は口縁部外面の調整に若干の違いがあるが、口縁部下位の横ナデにより生じる凹みと稜のできかたが類似する。また、102と110は口縁部下位の横ナデの下端に細い沈線ができる。これら5点は、小さい白色礫を少量含み、砂粒はほとんど見られない。焼成は良好で堅緻に仕上がり、外底面の指頭圧痕が顯著に残る共通点を有する。また、破損部に摩滅の跡はほとんど見られず、器面の調整痕も顯著に残っており、摩滅が認められない。102・106は橙色を呈し、他は灰白色である。103・108はナデにより生じる稜がやや鈍いが、胎土や焼成、破損部の状況などが先の5点に類似する。これらにはB・C・D・G1類がある。126はH2類であるが、胎土の特徴がこれらに類似する。H2類の128・

135は胎土に黒色の粒子が顕著に見られ、長石が含まれる点で類似する。形態も同様だが、135は底部中央を少し窪ませている。115～117はやや厚手のH1類で、口縁部下位がわずかに凹む。これらと119・122・128は、胎土に長石や少量の雲母が含まれる。111と127は胎土や色調、焼成状況が酷似している。接合関係にはなかったが、歪みが大きい同一個体の可能性が強い。104は他のものに比べて器壁が薄く、焼成は顕著である。形態的にも口縁部が長めとなっており異なる。118は胎土が砂質で、軟質な焼成となる。121は、器壁が厚手で、外底面の指頭圧痕が他のものに比べて深く、工具によるものと見られる痕が深く刻まれる。123は内面に墨痕が見られる。136・137は土器皿の底部破片で、底部中央を外面から凹ませている。下沖北跡などで類例が見られる。

土器小皿はA1とA2類が各一点、D類が3点である。A1類の138は胎土が100などとやや似ており、外底面にも丁寧な指頭圧痕が残る。A2類の139は胎土がやや砂質である。141は胎土に雲母が含まれており、119などに似る。140は明るい橙色呈する。142は内面に墨痕が残る。

珠洲は甕・壺がある。143の甕の口縁部は嘴状を呈する。146は壺Rの底部で、静止糸切りをする。145は叩打を綾衫状に行う。143・145はⅢ期のものと見られる。青磁は3点である。147は龍泉窯Ⅱ類で鏽弁をもつ。148は龍泉窯Ⅰ類で内面に劃花文を施す。149は龍泉窯Ⅰ類もしくはⅡ類で、見込みに「福」の印文を施す。木製品には舟形、曲物、折敷、その他の部材などある。150は舟形で、一部破損しているが



第6図 SX 1 遺物出土散布図

1 cm

完形品である。先端を尖らせ、船尾は平坦である。内面を掘り窪める。154は曲物の底部で、上面は一回り小さく段を形成する。側板を留めたと見られる桿皮が4ヶ所に残る。156・157は折敷の底部である。長辺の長さが等しいことから、同一個体と見られる。157に桿皮が残る。この他に箸、板状や棒状の部材などがある。

S X 1では、V-25付近でまとまって遺物が出土したため、一部のものは地点を記録して取上を行った。これを表したもののが図6である。先に挙げた土器皿の胎土や成型技法の類似性と分布のあり方を見ると、100・102・106・110のグループは造構縁邊から比較的遠くに分布している。長石や雲母を含むものは最も遺物が集中し、舟形を含む木製品も多い範囲に集中している。造構西端付近で3点がまとまって出土している部分では、ナデの痕跡が不明瞭な118・121・141がまとまっている。この3点は明るい橙色を呈する点でも共通している。一部の遺物について地点毎の取上を行ったものであるが、類似するものが集まって散布している傾向は見て取ることができる。

S K 73 (164～172) 土器皿はA類とF類である。A類の164は胎土に砂粒を多く含んでおり、焼成は軟質である。内面に薄くヨゴレが付く。F類の165は器壁が薄く、焼成は堅緻である。器表に気泡のような小さな孔が多くある。外底面に煤が付着する。両形態とも他の造構から出土したものでは見られない形態である。珠洲は片口鉢がある。166は注口部を指一本分程度の幅で外側に挽き出す。口縁端部は薄く、丸く収めている。167の口縁端部は嘴状に内屈し、内面に波状の卸目を施す。卸目の原体は5条である。白磁は2点で、168は口縁部が水平になるIV類、169は玉縁口縁のIV類である。青磁碗は底部の小片で、龍泉窯I類のもので、見込みに片彫りの草花文を施す。171は土鍾、172は漆器である。漆器は、内外面に黒漆を塗る。底部は摩滅しており定かでないが、平底か極低い高台が付くものと見られる。

S D 226 (173～176) 73の土器皿はX類である。口縁部を弱く外側に挽き出し、横ナデにより外面にわずかな凹みができる。胎土に赤色の小粒子を多量に含み、器面もやや赤味を帯びている。174・175は磁器皿である。174は底部外縁に沿って体部を打ち欠いた、加工円板である。174は肥前IV期、175は大皿で瀬戸窯の製品と見られる。176は砥石である。

S D 249 (177) 磁器の皿が出土した。肥前IV期の所産と見られる。

S E 282 (178～181) 陶器、石製品が出土した。178は越中瀬戸の捕鉢で、17世紀中葉の所産と見られる。内面に幅の広い原体による卸目を施す。179は粉挽き白の上白である。180は卵形の円盤の一部が磨り減って窪んでいる。凹みの内面は他の部分に比べて滑らかになっている。また、凹みの対面にはアバタ状の剥離が見られ、やや平滑になっている。

S K 237 (182) 肥前系陶器の捕鉢である。17世紀中葉から後葉の所産と見られる。

S K 228 (183～185) 183は珠洲片口鉢の口縁部である。口縁端部が平坦で、外側に傾く。III期からIV期のものと見られる。184は肥前陶器の鉢で、内面に重ね焼きによる溶着が見られる。また、高台端部は欠損する。肥前II期頃のものと見られる。185は志野の碗で、17世紀前葉のものと見られる。

S K 228 a (186～188) 磁器皿が2点、板状砥石がある。磁器皿はいずれも肥前II～2期のものである。砥石は薄い板状のものである。

包含層出土遺物 (189～240) 中世前期のものでは、土器皿・小皿、珠洲、白磁、青磁がある。土器皿の多くは、S D 57のA地区にあたるグリッドP-20で出土した。192はほぼ全形が残り、体部と底部の境に沈線を刻むが、所々で途切れる。191はS K 73出土の165に胎土が類似する。小皿の200はほぼ全形が残る。口縁端部を面取りするもので、S X 1で出土した138・139に似る。201は京都系の小皿X類で、

口縁部の内外面に煤が付着する。珠洲は片口鉢・壺・甕がある。片口鉢の口縁端部は内側にわずかに突出する。Ⅲ期のものと見られる。206は白磁碗の底部である。高台は削り出しによるもので、外底面から体部下半が露胎である。208は青磁の連弁文碗である。

209～228は近世の陶磁器である。生産地が不明瞭なものもあるが、肥前系陶磁器が多く、他に信楽、越中瀬戸がある。肥前はⅡ期からⅤ期のものがある。212は信楽の灯明器で19世紀代のもの、217は越中瀬戸皿で17世紀代のものである。

229～242は古代以前のものである。これらは多くが細片であり、図化できたものは少ない。包含層以外にも、遺構から出土したものもあるが、いずれも中世以降のものに混入していたものである。229～234は古代に属する。須恵器は無台杯・有台杯・長頸瓶・甕が、土師器は小甕がある。杯類は小泊窯跡群産のものと見られる。9世紀前半頃と見られる。235～238は古墳時代に属する土師器である。高环・甕・壺がある。239は甕の口縁部で、外面に擬回線を巡らせる。238・240は器台か高环の脚裾部である。小片が多く時期を定かにできないが、古墳時代前期のものと見られる。

## VI まとめ

### 1 中世前期の遺物

#### 1) はじめに

関町遺跡の発掘調査では中世前期の土器・陶磁器が最も多く出土した。その中で大部分を占めるのは土器皿・小皿である。当地域の中世前期の土器皿は、京都系土器皿が在地化したものが独自の形態変遷をするものとして、三島・刈羽型の名称が提唱された（品田1997）。口縁部下端に強い横ナデを行い体部との境に凹みが生ずるものを特徴とし、このナデによる痕跡が不明瞭となったものを含む。変遷や年代観について多くの研究がなされている。また、当期の土器については形態とともに法量の変化についても検討が行われている（水澤2005）。しかし、柏崎平野の当期の遺跡では良好な一括資料が少なく、その変遷過程や年代観には不明瞭な部分が多く残されている。関町遺跡の当期の遺物も、これらを解明できるような良好な出土状況のものは少ない。ここでは、関町遺跡で出土した陶磁器類などの年代観と先行研究を参考に、土器の変遷を検討し、中世集落としての関町遺跡の特徴を確認する。

#### 2) 中世前期の土器・陶磁器の概要

当期の土器・陶磁器の中で土器類が占める割合は、図化したものでは76.8%となる。未実測の資料の計量は行っていないが、これらには珠洲や輸入陶磁器より多くの土器があり、実際にはこれ以上の比率を占めると思われる。土器皿の中ではG類とH類が多く、両者で土器皿の70%近くを占める。

珠洲は土器に次いで出土量が多い。器種には甕、壺、片口鉢がある。甕の口縁部で図化し得たものは3点で、口縁部が嘴状(60・143)のものが2点ある。II期からIII期に比定した。壺は櫛描き波状文を施す体部破片(8)、綾衫状に叩打を施す体部破片(145)があり、III期以前のものとした。片口鉢は、波状など装飾的な鉗目を施すもの(74・167)、口縁端部を内屈するもの(80・167)があり、これらはII期に位置付けた。口縁部が方形で、端部が外傾するものは(56・202)はIII期からIV期とした。

輸入陶磁器には白磁と青磁があるが、出土量は少ない。白磁はIV類の168が11世紀後半から12世紀前半に位置付けられて最も古く、IX類の65は13世紀後半以降のものである。青磁は12世紀後半から13世紀後半までのものが見られる。

以上のように、関町遺跡で出土した中世前期の珠洲はII期の13世紀前半からIII期の13世紀後半のものが主体で、一部はIV期のものが含まれる。輸入陶磁器は12世紀後半から13世紀後半以降のものが見られる。これらから見た、関町遺跡中世前期の年代は13世紀前半から13世紀後半まで、もしくは13世紀末から14世紀初頭頃までを主体とすると考えられる。

#### 3) 出土土器の変遷

関町遺跡で、土器皿・小皿が珠洲や輸入陶磁器を伴って出土した遺構はS D 57・S X 1・S K 73がある。しかし、S D 57・S X 1では多様な形態の皿・小皿が出土しており、珠洲や輸入陶磁器は時期幅を有している。

S K 73 は S D 57 に壊される浅い土坑で、土器皿 A 類・F 類と珠洲、白磁、青磁がまとめて出土した。珠洲はⅡ期に、白磁と青磁は12世紀代を主体とする。これより新しいものは含まれていないため、13世紀中葉頃には廃絶した遺構と考えられる。土器皿 A 類は、京都系手づくね土器に相当するもので、下沖北遺跡の S D 301 から出土した B I a 類に相当する。S D 301 は長期間機能していたと見られる区画溝である。珠洲はⅡ期以降、Ⅳ期までのものが確認できる。S D 301 の中で古相に位置付けることができるすれば、13世紀前半から中葉頃とできる。他地域でも、同様の形態の土器皿は13世紀中葉頃までに位置付けられており、関町遺跡 S K 73 の珠洲の年代と一致する。皿 F 類は他遺跡での類例を確認できていないが、同じく下沖北遺跡 S D 301 で出土している 30 のように、口縁部が直立気味で深身の土器皿が似た例と考える。皿 F 類は、関町遺跡でも他に包含層出土のものが 1 点あるだけである。京都系土器皿が在地化していく過程の一形態と考える。

S K 79 の皿 (92) は皿 C 類としたが、口縁端部の外側にはわずかに凹みが認められる。小片のため判じがたいが、A 類と C 類の中間的な形態と見ることもできる。共伴する小皿は A 2 (93)・B 2 (94)・D (95) 類がある。93 の口縁端部にはナデによる幅の広い面が生じている。93 と 95 の胎土は砂粒がやや粗く、細かな気泡を含んでいる点で似ている。また、いずれの小皿も器高が低く、身が浅い点で共通している。

S E 122 では皿 D 類が 2 点、G 1 類が 1 点出土した。ただし、D 類は上層から、G 1 類は下層から出土している。いずれも小片である。胎土は比較的似ているが、ナデによる凹みの形態や沈線の有無など相違点が多い。

以上が、関町遺跡で出土した土器皿・小皿の中で、時期的なまとまりをある程度認めるができる遺構一括遺物である。陶磁器類から時期を想定できるものは S K 73 の資料で、13世紀中葉頃までのものに位置づけた。皿 A 類と F 類は、その他の遺構からは出土していないものであり、当期の中では最も古相に位置付けられよう。また、S K 79 の皿 C 類が形態的に A 類に近いものとすれば、口縁端部を面取りする小皿や、身が浅い小皿も S K 73 に近い時期のものと考えられる。

S X 1 では、調査区北側のグリッド V-25 周辺で遺物がまとめて出土しており、土器皿・小皿も多く含まれる。陶磁器の年代は珠洲がⅡ期、青磁は12世紀後半から13世紀後半までのものがあり、時期幅を考慮する必要がある。ただし、前章第6図のような出土地点、胎土の様相、調整技法の特徴、破損の状況からある程度のまとまりを抽出することができる。100・102 は出土地点が近く、胎土・焼成が類似する。また、106 は地点がやや離れるが 100 に類似しており、地点の記録をとっていない 101・103・108 も同様である。これらは、B・C・D・G 1 類である。また、H 2 類の 126 も胎土がこれらと類似する。その他の共通点として、器面に使用による摩耗やヨゴレ、付着物が見られないこと、破損面にも摩耗が見られないことが挙げられる。また、これに類する土器は S D 57 などの他の遺構では出土していないという特徴もある。S X 1 で出土した陶磁器類の年代は12世紀後半から13世紀後半までのものがあり、時期を特定することが困難である。土器の使用痕や破損状況から、ほとんど使用せずにあえて破損させて廃棄したことが想定される。その場合、土器皿のみを単独で廃棄したことと考えられる。

また、S X 1 の西側遺構縁辺付近にまとまる土器群は皿 G 類と H 類、小皿 D 類からなっている。これらは、器面が摩耗するものや墨痕が付くもの、破損面も摩耗して丸みを帯びるもののが目立っている。また、地点を記録していない他の土器も摩耗しているものが大部分であり、先に挙げたものと使用や廃棄の状況に明確な差を見て取ることができる。

以上のように、遺構からの出土状況のみから土器皿・小皿の形態変遷を追うことができないため、柏崎

平野の同時期の遺跡の様相を参考にして、形態的な特徴からその変遷を検討する。

角田遺跡では、比較的多くの土器皿・小皿が出土したが、多くは包含層からのもので、良好な一括資料は少なかった。ここでは、形態的特徴からその変遷が検討されている。皿では、口縁部下段の強いナデ調整により体部との境が有段状となるものを基準とし、体部との境界が幅広な沈線状になるものや、有段の部分が不明瞭になるものが後続する形態としている。また、口縁部がやや長く、赤味が強いなどの他と相違点が顕著なものについては古相になる可能性を指摘している。年代は、最も古い段階を13世紀中葉から後半、主体となる時期を13世紀後半、新しい段階のものは13世紀後半から末頃を想定し、一部は14世紀代に及ぶ可能性を指摘している。下沖北遺跡でも、口縁部と体部の境の稜が明瞭なものから不明瞭なものへの変遷を想定している。ただし、これらを年代的に区分することは困難であるとし、両者を13世紀後半から14世紀前半のものとしている。東原町遺跡では、稜が鮮明なものを主体とする下層を13世紀後半以降、不鮮明なものが主体となる中層を14世紀前半以降としており、下沖北遺跡と概ね一致するとしている。

関町遺跡の土器皿では、口縁部と体部との境に生じる稜のほかに、口縁端部直下のナデにも注目して形態分類を行った。口縁端部外側のナデが面取り状になるものがB類、面取りは行わないが口縁部が上を向くものをC類とした。口縁端部下位にナデを行うが口縁部が外側を向くD類、上段のナデの位置が下がるE類は、B類の面取りが形骸化したものと想定した。これに後続するものは、上段のナデの痕跡が不明瞭となるG類で、下段のナデによる凹みも消失するH類に統くと考えた。前出の3遺跡では、明確にB類・C類とできるものは見られず、D類以降のものを確認することができる。

角田遺跡と東原町遺跡は珠洲Ⅲ期以降が主体となっており、珠洲Ⅱ期のものを多く含む関町遺跡と年代的に若干の差がある。この差が皿B・C類の有無に関わると見ることもできる。しかし、関町遺跡に最も近い下沖北遺跡ではⅡ期の珠洲も比較的多く出土しており、皿A類も出土している。ここで皿B・C類が見られないことから、形態の変遷についてはさらに検討が必要である。

ここでは、京都系手づくね土器のA類が最も古く、類例の少ないF類がこれに近い時期のものと見る。B・C・D類にはそれほど時期差はなく、一部は同一時期の個体差による形態の違いであると考える。これらはA類に統く時期のものと想定する。ナデによる稜が不明瞭なG類やH類は、これに後続するものと考えられるが、時期的に前者と分離できるものではなく、同一時期にできるものもあるであろう。ただし、時期が下るにつれてG類・H類が大部分を占めるようになっていくものと見られる。

土器皿・小皿の変遷は、法量の変化にも表れるとしている。関町遺跡で出土した土器皿・小皿は、遺存率が低いものが多く、法量を明確にしがたいものが多い。ただし、土器小皿では、口縁部に面取りを行うものを含むS E 122のものは器高が低く、S X 1 西縁やS D 57のD類には器高がやや高いものが多い。また、口径はA・B類が9cm前後、D類は8cm前後が主体となっている。皿についても、S X 1ではB類からG 1類は口径13cmを超えるが、H類は13cmを下回る。S D 57では全ての形態で13cm以下のものが大多数を占めている。皿においては、口径が縮小していくと考えられる。

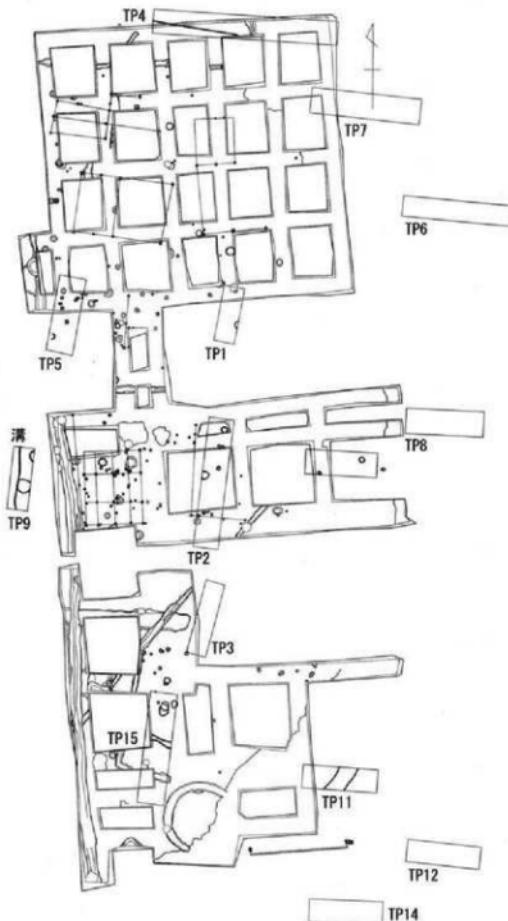
## 2 中世前期の遺構

関町遺跡の発掘調査では、ピット・土坑・井戸・溝のほかに広範囲の湿地性堆積が検出された。その多くは中世前期に属するものと見られる。湿地性堆積は調査区東側の全域に広がるものである。鏡ヶ沖の南側に位置する城東地区で行った試掘調査では、ほぼ全域で湿地性堆積の痕跡と見られる植物腐植物層が検

出された（柏崎市教委2009・2010）。また、鏡ヶ沖の東側に位置する箕輪遺跡の調査では、調査区の西側に向かって標高が低くなっている、検出される遺構・遺物が稀薄になっている。下沖北遺跡に伴う試掘調査や本発掘調査では腐植物層は検出されていないが、鏡ヶ沖方面に向かって標高が下っていることが確認されている。当地には鑑湖と呼ばれる湖沼があり、近世以降に埋め立てが行われたとされている。関町遺跡で検出された湿地性堆積も鑑湖、もしくはその周囲の湿地帯に関するものと想定される。

調査区の西側には、南北に通る溝が検出された。直線的なもので、幅は0.7 mから1.3 mほどで推移する。SK 73の埋没後に掘削され、SK 253よりも新しいものである。覆土からは、17世紀の越中瀬戸1点が出土しているが、主体となる遺物は中世前期のもので、珠洲はⅢ期頃、白磁は13世紀後半までのものが含まれている。越中瀬戸が何らかの要因による混入品とすれば、SD 57は、SK 73が廃絶した後の13世紀中葉以降に構築され、14世紀初頭頃まで機能していたものと想定される。

第7図は、今回の調査で作成した遺構図に第1次試掘調査のトレント図を合成したものである。第1次試掘調査では、トレント位置及び遺構位置の測量は簡易的な方法を用いたため、位置などにある程度の誤差を含んでいる。遺構の分布や概ねの位置を把握することはできる。ここで注目するのはTP 9の西壁付近で検出された南北に長いSD 19である。土坑、もしくは井戸と見られるSK 20を壊している。SD 57とは約4~5 m離れており、完全に並行ではないが、概ね方位を同じにするものである。試掘トレント内の遺構がどのように展開していくかは不明なため断定はできないが、この両溝が道路を挟む側溝である可能性がある。道路の側溝とはならなくとも、SD 57が区画溝として集落域を規制していることは想定できる。そし



第7図 関町遺跡試掘・本発掘調査遺構概略図（縮尺 1:500）

て、関町遺跡の中世前期集落が成立したしばらく後に、この溝が構築されて集落域を規制するように再編成がなされていたと考えられる。また、SD 57に直交するSD 3・SD 119なども、集落内の区画溝の可能性がある。SB 1などの建物や井戸・土坑が集中する範囲では、SD 57とSX 1との距離は、広いところでも30m程度しかないことになる。

その他の遺構の分布を見ると調査区西側に遺構が多く、SX 1に近い側では少なくなっている。住居など、生活に関する遺構が湿地帯から離れたところに構築されることは自然のことと考えられる。しかし、SE 65やSK 96などの明らかに中世前期に属する遺構がSX 1に近い位置にも存在している。周囲にはピットも点在しており、復原された建物は少ないが、何らかの生活空間であったと想定することができる。調査区南側では湿地性堆積が西側に広がってきており、中世前期の遺構・遺物は少なくなっている。この範囲では、円形に巡る特殊な溝であるSD 277が検出されている。また、グリッドF-1付近では鍛冶津が多く出土している。南側の範囲は掘立柱建物が少なく、この時期の井戸なども見られないことから、居住城とは別の生産などに関する区域であったと考えられる。

遺構に伴う遺物が少ないと見られ、集落の詳細な変遷を追うことは困難である。ここでは、簡単に中世前期における関町遺跡の集落の変遷を想定したい。当期の集落の成立は、珠洲の年代から13世紀前半から中葉頃と見られる。湿地帯の縁辺ではあるが、比較的広い範囲に遺構が分布している。この時期の遺構には、SK 73の他にⅡ期の珠洲片口鉢が出土したSE 65が該当し、口縁端部を面取りした土器小皿があるSK 79もこの時期に近いものとみられる。また、SD 57に壊されるSK 253や、試掘トレーニングTP-9のSK 20なども当期のものと想定される。その後、溝もしくは道が構築されることによって居住域は再編成される。この時期の遺構は、SD 57のほかには、土器ⅢG類やH類、小皿D類が主体となるSE 77、SE 122、SE 210などが該当すると想定される。なお、建物や柵については柱穴内から出土した遺物がほとんどないことから時期を把握しがたい。SA 8は柱穴から近世当期の小片が出土しているため、この時期からは除外される。最も大型のSB 1は、SD 57に近接する南北方向の建物である。しかし、SD 57とは若干方位を異にしていることから、時期を違えている可能性がある。

当遺跡では、14世紀以降の遺物はほとんど出土していない。中世前期の集落は、遅くとも14世紀初頭頃には廃絶したものと考える。

### 3 中世前期集落の位置付け

関町遺跡に近い鶴川中・下流域の13世紀代の遺跡で発掘調査が行われたものは、下沖北遺跡、香積寺沢遺跡がある。やや離れているが、鯖石川流域では東原町遺跡、角田遺跡、馬場・天神腰遺跡などがある。馬場・天神腰遺跡は正式報告がなされておらず、詳細は明らかでない。12世紀代に成立した集落において、13世紀代に基本区画をなす幹線道路が整備されたとしている（品田1997）。

下沖北遺跡は、関町遺跡の上流約1kmに所在する。中世前期では13世紀から14世紀の遺構・遺物が確認されている。遺跡の中心部は断面箱型の溝で囲まれ、この内部では建物や井戸など多くの遺構が検出されている。南北方向の溝の東側には道が通っていたとされ、対面側の側溝と見られる溝も検出された。道路側溝を兼ねる区画溝は、途中で南側へ拡張されたとしている。区画溝からは土器ⅢA類と同形態のものや、Ⅱ期からⅢ期を主体とする珠洲、12世紀代の白磁などが出土している。また、対面の側溝では、関町遺跡でH類とした土器Ⅲや13世紀末以降の青磁が出土している。また、集落域の160mほど東では同時期

のものと見られる水田も検出されている。大型の溝に囲まれた範囲に、建物や井戸、竪穴状造構などが密集していること、輸入陶磁器の出土量は多くないが、施紋を施した漆器が出土していることなどから、比較的格上の集落であったと見られる。

東原町遺跡は、鯖石川と別山川の合流点から約1km下流の左岸に位置する。中世前期の造構は下層と中層で検出された。下層では、自然流路とそれに直交する溝がある。この溝の北側で多くの造構が見つかっており、居住城であったとされる。また、鍛冶工房なども見つかっている。珠洲はⅢ期を主体としており、13世紀後半以降に位置付けられる。中層では主に東西方向の溝と盛土で集落域と生産域が区画されている。集落域では土器皿や小皿を大量に廃棄したと見られる土器溜まりが検出されている。饗宴などで用いたものを一括廃棄したものと見ている。また、埋納に関わると見られる珠洲壺を埋めた造構が3基見つかっている。うちSK090では、珠洲IV-1期の壺の中に10,674枚の錢貨が納められていた。錢貨で最新のものは初鋳が1341年の紹豊元寶である。大勢が集まる饗宴を催し、大量の錢貨を所有する、鯖石川流域で中心的な役割を果たした集落と見られている。

角田遺跡は鯖石川と別山川の合流点付近に位置する。調査面積は狭いものの、1,100基を超えるビットが検出されている。建物は四面廂をもつものなどが想定されて、同一ヶ所で数度の建て替えも行われている。居住城の東には大型の溝も掘られている。出土遺物には土器皿・小皿、珠洲、白磁、青白磁、漆器などがあり、13世紀後半を主体とする。食膳具のほぼ全てを土器が占めること、青白磁の壺が出土していることから、鯖石川などの河川交通の要衝を押さえる在地小領主の存在が想定されている。

以上、関町遺跡に近い柏崎平野中心部に所在する中世前期の遺跡の様相を見てきた。いずれも、造構や出土遺物の内容から地域の中核的な集落の存在が想定される。これらの遺跡の共通点として、造構では掘立柱建物が密集する区域があり、建物が数度にわたって建て替えられる居住城が一ヶ所にまとまっていること、その付近には比較的大型の溝が設けられていることが挙げられる。出土遺物では、食膳具に占める土器皿・小皿の比率が高く、出土量も多いこと、他に青磁や白磁などの輸入陶磁器や漆器があることが挙げられる。関町遺跡で検出された溝は、他の遺跡に比べて小規模なものである点でこれらの遺跡とは異なっている。遺物では食膳具の大部分は土器皿・小皿に占められ、これに白磁、青磁、漆器が占めている点で共通している。しかし、土器の出土量はそれほど多量とはいはず、大量の土器を一括で廃棄した例も明確には認められない。また、下沖北遺跡では青磁盤や赤色漆で文様が描かれる漆器が出土しており、東原町遺跡でも青磁盤や瓦器浅鉢などが出土している。角田遺跡では青白磁の壺があり、土器以外のもので比較的格上と想定されるものが出土している点も関町遺跡とは異なる。関町遺跡はこれらの遺跡と時期的に差違があるため、土器や陶磁器の比率に差が生じることも考えられる。ここでは、関町遺跡の中世前期集落は、鶴川下流域の中世における開発の初期を担った集落と位置付けておきたい。

#### 4 その他の時代の関町遺跡

関町遺跡は中世前期を主体とする遺跡であったが、これ以外の時期の遺物も出土している。古いものでは古墳時代前期や古代のものがあり、新しいものでは近世初頭のものがある。ここでは、これらの時代について簡単にまとめる。

古墳時代のものはいずれも土師器で、高杯・器台・甕が見られる。口縁部に擬凹線を巡らせる甕や、器部が有段となる高杯もしくは器台の破片などがあり、古墳時代前期を主体とすると見られる。柏崎平野中

央部では当期の遺跡の調査例は少ない。箕輪遺跡では弥生時代中期の遺構・遺物が検出され、玉作に関わる資料も出土している。既に弥生時代中期には当地の開発は始まっていたと見られ、その後の古墳時代につながっていくのである。関町遺跡では古墳時代のものとできる遺構は確認できなかった。また、出土した土器も少ないものであり、その多くは調査区の南側で出土している。下沖北遺跡でも古墳時代前期の土器が出土しており、琵琶島城跡でも古墳時代の遺物が出土している。関町遺跡周辺の鶴川下流域における開発が古墳時代前期に遡ることを示している。この時期の開発を担った中核的な集落が周辺に存在していたのである。

古代の遺物も出土量が少なく、明確な遺構は確認できなかった。須恵器杯類や壺、甕、土師器甕などが見られ、9世紀前半ころに位置付けられる。下沖北遺跡では比較的多くの古代の遺物が下層から出土している。竈を有する竪穴住居も検出されている。8世紀後葉から9世紀初頭を中心としている。9世紀初頭に古志郡から三嶋郡が分立し、箕輪遺跡周辺に郡衙や三嶋駅が設置されたとされる。古代北陸道の沿線ともなったこの地域では、活発な開発が行われていたことが想定される。関町遺跡でこの時期の遺構を把握することはできなかったが、当期の開発の対象にはなっていたことが想定でき、この時期の集落が関町遺跡の周辺に存在したのである。

14世紀中頃に越後守護上杉氏の被官である宇佐美氏が越後に入部したとされる。琵琶島城を居城とした時期は明らかでないが、発掘調査では堀跡から15世紀代の遺物が出土している。以後、16世紀にかけて琵琶島城は宇佐美氏の居城となったとされる。関町遺跡の中世前期集落と入れ替わるように琵琶島城が築かれ、関町遺跡では遺構・遺物が確認できない時期が長く続くこととなる。再びこの地で生活の痕跡を認められるようになるのは、琵琶島城が廃絶した後とされる17世紀代に入ってからのことである。肥前二期に相当する17世紀前半の遺物が溝や土坑などから出土している。この頃の溝は、中世前期のものとは主軸が明らかに異なっている。その後、19世紀代に至るまでの遺構・遺物が検出されている。鏡ヶ池に存在した湖沼は江戸時代頃に埋め立てが行われたとされている。江戸時代には新田開発が活発に進められ、越後では紫雲寺渦新田が開発されたことが有名である。関町遺跡で17世紀以降、遺物の出土が増加していくことは、この新田開発の流れの中で新たな耕地を求めた人が集まってきた結果と考える。その後の関町は、周辺の農地化が進むとともに、幹線道路の沿線は宅地化も進み、柏崎市街地の一角落として現代に至っている。

## 《引用参考文献》

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付瓶、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 柏崎市教育委員会 1999 『角田』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集)
- 柏崎市教育委員会 2001 『柏崎町』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集)
- 柏崎市教育委員会 2010 『柏崎市の遺跡XIX』-柏崎市内遺跡第XV期発掘調査報告書- (柏崎市埋蔵文化財調査報告書第62集)
- 柏崎市教育委員会 2011 『柏崎市の遺跡XX』-柏崎市内遺跡第XX期発掘調査報告書- (柏崎市埋蔵文化財調査報告書第65集)
- 柏崎市史編さん委員会 1987a 『柏崎市史資料集 考古篇 1』
- 柏崎市史編さん委員会 1987b 『柏崎市史資料集古代中世篇』
- 柏崎市史編さん委員会 1990 『柏崎市史上巻』柏崎市
- 春日寅実 1999 「第2節 土器断年と地城性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 金子拓男 1990 「第五節 交通と交通路」『柏崎市史上巻』柏崎市
- 川村浩司 1999 「2 須恵器の様相」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』九州陶磁学会10周年記念
- 品田高志 1999b 「3 角田遺跡出土中世土器群の時期と変遷」『角田』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集)
- 下中邦彦 1986 『日本歴史地名大系第一五巻 新潟県の地名』平凡社
- 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』真福社
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川県考古学研究会 1993 『味津大島塚』富山大学考古学研究報告第6号
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2003 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書II下沖北遺跡1』新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2005 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書II東原町遺跡・下沖北遺跡II』新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2011 『一般国道8号柏崎バイパス関係発掘調査報告書IV千古作遺跡・香積寺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第214集
- 新潟県考古学会 1999 『新潟県の考古学』古志書院
- 新潟県考古学会 2005 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』
- 福岡市教育委員会 1984 『博多出土貿易当時分類表 福岡市高速鉄道開通保蔵文化財調査報告IV』
- 北陸中世考古学研究会 2006 『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』第19回北陸中世考古学研究会資料集
- 北陸中世考古学研究会 2007 『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・輸入陶器・瀬戸美濃製品』第20回北陸中世考古学研究会資料集
- 北陸中世土器研究会編 1997 『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』桂書房
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古第16号』新潟県考古学会
- 村山歌二 1990 『中世における柏崎市域』『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん室
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 山本信夫 2005 『貿易陶磁中世前半(11～14世紀前半)編年』『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨』
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

別表1 開町跡遺構一覧表

遺構番号	位置	建物	平面形	長径	短径	深度	覆土	出土遺物	備考
SX1	調査区東側全域		不正形				廃棄物削り跡	土器皿、珠頭器、青磁器、片口器等	
S92	V-22	溝	130	50		8	黒灰色粘土 地山△		南北方向の浅い溝
S93	V-21・24	溝	1908	88		18	1. 黒灰色粘土 2. 緑灰色粘土 3. 黑灰色粘土 地山△		東西方向の溝
S98	E-21	円形	64	56	58			土器皿、板状木製品・細骨	
S99	T-21	S92	円形	22	20	29	1. 黒灰色粘土 2. 黑灰色粘土+緑灰色粘土 地山○		灰窓か
S99	T-21		不定形	60	60	35	1. 黑灰色粘土 本段△ 地山○ 2 a. 黑灰色粘土 (柱頭) 2 b. 黑灰色粘土 本段△		柱頭
SP10	T-21	S92	円形	28	28	27	1. 黑灰色粘土 地山△ 2. 緑灰色粘土 地山○		建物柱穴
SP11	T-21		円形	16	16	9	1. 黑灰色粘土+緑灰色粘土 地山○		
SP13	T-22	溝		48		3	1. 黑灰色粘土 本段○ 地山○		南北方向の溝
SP14	T-22	柱内形	62	48	14	1. 緑灰色粘土 地山○ 2. 灰色粘土 地山△			
SP15	T-22	S93	円形	20	20	8	1. 黑灰色粘土 地山△ 2. 緑灰色粘土 地山○		建物柱穴
SP16	T-22		円形	30	28	11	1. 細灰色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土 地山△		
SP17	T-23		円形	21	22	5	1. 黑灰色粘土 地山△		
SP18	E-22	S92	円形	20	18	12	1. 黑灰色粘土 地山○		建物穴
SP19	V-23	S91	柱内形	64	42	18	1. 黑灰色粘土 本段△・地山○ 2. 緑灰色粘土 地山○		建物穴 SD3→SP19
SP20	V-23	S92	円形	24	24	18	1. 黑灰色粘土+緑灰色粘土 地山○ 2. 綠灰色粘土 地山○ 3. 黑灰色粘土		建物穴
SP21	T-21	S92	柱内形	28	24	32	1. 黑灰色粘土 地山△ 2. 緑灰色粘土 地山○		建物柱穴 柱頭
SP22	T-21		柱内形	16	12	5	1. 黑灰色粘土		
SP23	T-21	S92	円形	22	20	15	1. 黑灰色粘土 (柱頭) 2 a. 黑灰色粘土 地山○ 2 b. 2と同質 地山○		建物柱穴 柱頭
SP24	S-21		円形	26	24	26	1. 黑灰色粘土 (柱頭部分) 2. 灰色粘土 地山○		柱頭
SP27	T-23		円形	28	26	41	地山ブロック主柱	土器小片、珠頭器、泥化陶片 (小)	
SP28	T-5-22	溝	2500			8	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○ 2. 黑灰色粘土 本段○ 3. 1段上 瓦質 本段○ 地山○		南北方向の溝
SP29	E-24	S91	円形	34	34	32	1. 黑灰色粘土 地山○		建物穴 SD3→SP20
SP31	S-22	S93	柱内形	26	22	32	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○ (埋積) 2. 灰色粘土 地山○		建物柱穴 柱頭
SP33	T-22		円形	24	20	11	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○		S P34→S P33
SP34	T-22		円形	17	12	23	1. 黑灰色粘土		S P34→S P32
SP35	R-21		円形	20	16	5	1. 黑灰色粘土 地山○		
SP36	R-21		円形	20	18	4	1. 黑灰色粘土 地山△		
SP37	R-21	S95	円形	40	39	13	1. 黑灰色粘土+緑灰色粘土 地山○		
SP38	R-21		唐	158	13	129	13		建物柱穴 窓
SP40a	R-21		椭円形	120	92	10			南北方向の窓
SP40b	R-21		椭円形	68	73				SP40 c → SP40 b → SP40 a
SP40c	R-21		円形	32	28	19			SP40 c → SP40 b → SP40 a
SP41	R-21		円形	56	59	19	1. 黑灰色粘土 本段△		SP42→SP41
SP42	R-21		椭円形	76	59	21	1. 黑灰色粘土 本段△ 地山△		SP43→SP41
SP43	T-24	S94	椭円形	26	14	10	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○		
SP44	T-24		円形	16	16	10	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○		建物柱穴
SP45	R-24	S94	円形	30	28	15	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○ 2. 黑灰色粘土 本段○		建物柱穴
SP48	R-23	S94	円形	20	18	9	1. 黑灰色粘土 本段○		建物柱穴 SP49→SP48
SP49	R-23		円形	14	14	5	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○		SP49→SP48
SP50	R-23		円形	18	18	7	1. 黑灰色粘土 本段○		
SP51	R-21	S94	円形	22	22	3	1. 黑灰色粘土		
SP52	R-23		椭円形	54	69	47	地山ブロック主柱		
SP53	T-23		(円形)	26	24	25	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○		
SP55	R-21		円形	19	17	11	1. 青灰色粘土+灰白色粘土の上面 木炭△		
SP57	P-N-20		溝	6717	116	6,261		土器皿、珠頭器又副器、片口	SP57→SP73→SP57→SP174-
	X-1-1								SP57→SP22b
SP58	P-21		椭円形	80	64	59			
SP59	P-21		円形	63	66	64			土器小便器 完形・片口
SP60	R-21		溝		32	7	1. 黑灰色粘土		土器小片、不定形鉢
SP61	P-21	S95	円形	46	44	22	1. 黑灰色粘土 本段△ 2. 黑灰色粘土+緑灰色粘土 地山○		東西方向の溝
SP62	P-21	S95	円形	21	18	21	1. 黑灰色粘土 地山△		建物柱穴
SP64	Q-22	S94	椭円形	90	68	50			土器小便器
SP65	I-23		不定形	70	62	85			土器皿、小便器、珠頭器片口、小 SP66→SP65
SP66	P-23	S93	椭円形	32	24	16			空器鉢、本頭、下駄、角材
SP67	P-23		円形	16	14	11	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 本段○ 地山○		
SP68	I-23		円形	20	20	7	1. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○		
SP69	B-23		柱内形	30	23	12	1. 黑灰色粘土 地山○ 2. 绿灰色粘土 地山○		建物柱穴

遺構名	位置	遺物	平面形	長径	短径	深度	面土	出土遺物	備考
SP76	P-21		円形	23	20	6	1. 黒灰色粘土 2. 晴緑灰色粘土 地山○		
SP71	P-21		円形	18	17	3	1. 黒灰色粘土+晴緑灰色粘土 地山○		
SK72	O-21		円形	84	48	40	1. 黒灰色粘土 木炭△ 地山○ 2 a. 緑灰色粘土 地山○ 2 b. 晴緑灰色粘土 地山○		
SK73	P-0-20		不規則	329	116	22		土器底、残瓦器底部、瓦片、SK97-SK73-5567 白磁玉瓶、青磁、漆器底、土	
SP74	P-21	SAS	円形	34	30	18	1. 黒灰色粘土 木炭△ 2. 晴緑灰色粘土 木炭○ 地山○ 3. 黒灰色粘土+灰色粘土 地山○ 4. 3層と同質 地山○		繩文六
SP75	O-22		楕円形	30	24	23	1. 黒灰色粘土	繩	粗石△
SK76	O-22		楕円形	60	43	12	1. 黒灰色粘土 木炭△ 地山△	板状鉛溶滓、瓦口	
SK77	N-21-22		不定形	164	76	120	1. 灰色粘土+壤土 木炭△ 地山○ 2. 晴緑灰色粘土 地山△ 3. 黒灰色粘土 地山△	土器底、小片、動物骨 (大)、折敷底	
SP78	N-21		楕円形	28	20	16	1. 黒灰色粘土 地山○		
SK79	N-21		楕円形	82	64	59	1. 成色粘土 木炭△ 地山△ 2 a. 黒灰色粘土 地山○ 2 b. 晴緑灰色粘土 地山○ 3. 黒灰色粘土 4. 晴緑灰色粘土 地山○	土器小底、木製品小舟	
SP80	N-21		円形	25	22	26	1. 晴緑色粘土 木炭△ 地山△ 2. 黒灰色粘土 地山△		
SP81	N-21		円形	20	16	13	1. 晴緑色粘土 木炭△ 地山△ 2. 黒灰色粘土 地山△		
SP83	N-22	SAS	楕円形	32	22	18	1. 黒灰色粘土+晴緑灰色粘土 地山○		繩文六
SP84	N-22	SAS	楕円形	44	36	31	1. 晴緑色粘土		繩文六
SP85	N-22		楕円形	26	21	34	1. 晴緑色		
SP86	N-22		楕円形	40	33	35	1. 晴緑色		
SK87	P-23		円形	104		71	1. 黒灰色粘土+灰色粘土 木炭○ 2. 黒灰色粘土+黑色粘土 木炭○ 地山○ 3. 1層と同質 木炭○ 4. 黒灰色粘土+灰色粘土 木炭○ 5. 黒灰色粘土+灰色粘土 木炭○ 6 a. 黒灰色粘土+灰白色粘土 地山○ 6 b. 6 a +同質 地山○		
SP88	P-23		円形	20	20	10	1. 成色粘土+黒灰色粘土 地山○ 2. 灰色粘土+黒灰色粘土 地山○		
SP89	N-21		楕円形	25	19	17	1. 黑色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土		
SP90	N-21		円形	19	17	10	1. 黑灰色粘土		
SP91	N-23		楕円形	42	30	33	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山○		
SP92	P-24		楕円形	94	87	20	地山口+ロッタ土堆		
SP94	O-24		楕円形	22	17	16	1. 黑灰色+灰色 2. 灰色+灰白色		
SP95	O-21		楕円形	40	22	23	1. 晴緑色粘土		
SP96	O-25		楕円形	71	63	28	地山口+ロッタ土堆	垂T底、板	
SP97	P-0-20		楕円形	194	142	24	1. 晴緑色粘土 地山○		SK97-SK73
SP98	N-23		楕円形	96	78	103	1. 黑灰色粘土+灰色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○	部材(板)、板	SP99-SI98
SP99	O-24		楕円形	34	26	24	1. 黑灰色粘土+灰色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○		SP99-SI98
SP100	N-2		円形	35	35	19	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△ 2. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△ 3. 黑灰色粘土+灰白色粘土 地山○		柱底
SP101	N-2	SAS	円形	26	26	28	1 a. 黑褐色粘土 1 b. 黑褐色粘土	柱	繩文六 SP102-SP101
SP102	N-2		椭円形	42	35	28	2. 黑褐色粘土 木炭△ 地山○		SP102-SP101
SK103	N-2		椭円形	54	44	3	黑褐色粘土 地山△		
SP104	N-2		円形	20	20	12	1. 黑褐色粘土 2. 晴緑色粘土 地山○		
SP105	N-2		椭円形	26	20	9	1. 黑褐色粘土 木炭△		
SP106	N-2	SAS	円形	28	26	34	1. 黑褐色粘土 地山△ 2. 晴緑色粘土 地山○	加材	繩文六
SP107	N-2		円形	26	26	20	1. 黑褐色粘土 地山△ 2. 晴緑色粘土 地山○		柱底
SP108	N-2	SAS	椭円形	28	24	13	1 a. 黑褐色粘土 地山△ 1 b. 黑褐色粘土 地山△ 2. 晴緑色粘土 地山○		繩文六
SP109	N-2		椭円形	30	22	18	3. 晴緑色粘土 木炭△ 地山○		SP109-SP110
SK110	N-2		椭円形	68	51	24	1. 黑褐色粘土 木炭△ 地山△ 2. 晴緑色粘土+绿灰色粘土 木炭△ 地山○ 地山口+ロッタ土堆	古墳土壤	SP109-SP110
SP111	N-3		椭円形	36	28	33	1. 黑褐色粘土 木炭△ 2. 黑褐色粘土+黑灰色粘土 地山○ 3. 黑灰色粘土		
SP112	N-2		円形	28	21	20	1. 黑褐色粘土+绿灰色粘土 地山○		
SK113	N-2		円形	74	50	22	1. 黑褐色粘土+绿灰色粘土 地山○	古墳土壤	
SP114	N-2		円形	29	16	9	1. 黑褐色粘土		
SP115	N-2	SAS	円形	34	28	32	1. 黑褐色粘土		繩文六
SP116	N-2	SAS	椭円形	23	16	36	1. 晴緑色粘土 木炭△ 地山○ 2. 黑褐色粘土		繩文六

遺物No.	位置	建物	平面形	長径	短径	深度	層土	出土遺物	備考	
SP117 L-2			(円形)	69	35	48	1. 灰褐色土上 本段△ 地山○ 2. 線状灰色粘土 本段△ 地山○ 3. 線状灰褐色粘土 本段△ 地山○ 4. 黑灰色粘土 本段△ 地山○			
SP118 B-3			円形	28	25	29	1. 灰黑色粘土 本段△ 地山△			
SP119 L-2	溝			80	30	30	1. 黑灰色粘土 本段△ 地山○ 2. 線状灰褐色粘土 本段△ 地山○	土器小片、珠網彫小片、領道 東西南方向の溝		
SP120 I-5-7			円形	20	18	14	1. 灰褐色粘土 本段△ 2 a. 灰色粘土+灰褐色粘土 地山○ 2 b. 2 aと同質 地山○	筒形(往復か)	柱痕	
SP122 I-5			円形	60	54	110		土器軸・小片、板・着	SP122→SP135	
SP123 I-5	溝			3062	60	12	1. 灰黑色粘土+灰褐色粘土 本段○ 地山○		南北方向の溝	
SP124 I-3			円形	66	65	89			土器小片、面物	
SP125 J-5			円形	18	15	9	1. 灰黄色土			
SP126 I-5			円形	14	14	8	1. 灰黄色土			
SP131 I-4			円形	28	28	23	1. 黑灰色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2 a. 灰色粘土+灰褐色粘土 地山○ 2 b. 2 aと同質 地山○ 3. 灰色粘土+黑色粘土 地山○		柱痕	
SP132 I-5			(円形)	21	19	15	1. 黑灰色粘土			
SP133 I-3			円形	30	28	29	1. 灰色粘土+黑灰色粘土 本段○ 地山○			
SP134 I-3			円形	27	27	13	1. 黑灰色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2 a. 灰色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2 b. 2 aと同質 本段○ 地山○			
SP135 I-5			(円形)	22	22	15			SP122→SP135	
SP136 I-4			楕円形	34	29	9	1. 灰色粘土+黑灰色粘土 本段○ 地山○			
SP137 E-3			円形	22	20	20	14	1. 線状灰褐色粘土 本段○ 地山○ 2. 灰色粘土+暗褐色粘土 地山○		
SP138 E-3			円形	18	18	5	1. 線状灰褐色粘土 本段○ 地山○			
SP139 E-3			円形	28	26	22	1. 黑灰褐色粘土 地山△ 2. 線状灰褐色粘土 地山△		柱痕	
SP142 E-3			円形	24	22	29	1. 線状灰褐色粘土 本段△ 地山△ 2. 線状灰褐色粘土 本段○ 地山△			
SP143 E-3			円形	19	18	29	1. 線状灰褐色粘土 地山△			
SP144 E-3			円形	31	20	15	1. 細灰褐色粘土 2. 黑灰褐色粘土			
SP145 E-3			円形	32	28	29	1. 灰色粘土 地山○ 2. 黑灰褐色粘土 地山○			
SP146 E-2			円形	26	26	26	1. 線状灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2. 線状灰褐色粘土 本段○ 地山○			
SP147 E-2			円形	26	24	7	1. 灰灰褐色粘土 本段○ 地山○			
SP148 E-2	SBI		円形	39	30	29	1. 線状灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2. 黑灰褐色粘土 本段○ 3. 黑灰褐色粘土 地山○			
SP149 E-2	SBI		円形	30	29	32	1. 線状灰褐色粘土 本段○ 2. 線状灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○	土器小片		
SP150 E-2			円形	26	26	7	1. 線状灰褐色粘土 本段○ 2. 灰色粘土 地山○			
SP151 E-1			楕円形	32	24	19	1. 灰褐色粘土 本段○ 2 a. 灰褐色粘土 本段○ 2 b. 2 aと同質 本段○ 地山○			
SP152 E-1			円形	32	30	29	1. 細灰褐色粘土 本段○ 2. 細灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 3. 2 aと同質 本段○ 地山○	柱痕		
SP153 J-2			円形	29	20	5	1. 黑灰褐色粘土 2. 線状灰褐色粘土 地山△			
SP156 E-1			円形	22	21	12	1. 線状灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2. 灰色粘土 本段○ 地山○			
SP157 J-1			(円形)			25	1. 黑灰褐色粘土			
SP158 J-1			楕円形	92	78	28	地山△+柱状土	土器小片、珠網彫瓶底		
SP159 J-1			円形	28	24	7	1. 灰褐色粘土 地山△			
SP160 J-1	SBI		楕円形	32	28	23	1. 細灰褐色粘土+黑色粘土 本段○ 地山○ 2. 細灰褐色粘土 本段○	建物柱穴	建物柱穴	
SP161 J-1			円形	28	22	11	1. 細灰褐色粘土+黑色粘土 地山○			
SP162 J-1			円形	28	18	16	1. 細灰褐色粘土 本段○			
SP163 J-1			楕円形	24	18	6	1. 灰褐色粘土 地山△			
SP164 J-1			円形	16	16	22	1. 細灰褐色粘土 本段△			
SP165 J-1	SBI		円形	29	20	5	1. 灰灰褐色粘土 地山△			
SP166 J-1	SBI		楕円形	29	14	2	1. 細灰褐色粘土 地山△			
SP167 J-1			円形	30	28	15	1. 灰褐色土(柱頭) 2. 細灰褐色土(柱頭)			
SP168 J-1			楕円形	20	16	17	1. 灰褐色粘土 2. 細灰褐色粘土 地山○			
SP169 J-1	SBI		楕円形	24	19	17	1. 灰褐色粘土 本段△ 地山△		建物柱穴	
SP170 J-1			円形	18	16	17	1. 灰褐色粘土			
SP171 J-1	SBI		楕円形	32	26	31	1. 細灰褐色粘土 本段△		建物柱穴	
SP172 J-1			(円形)	80	56	100		土器小片、乳頭彫長颈瓶、傳 SP175-S3077→SP174	柱木製品	
SP175 J-1			円形	30	30	21	1. 細灰褐色粘土 本段○ 2 a. 細灰褐色粘土+黑色粘土 地山○ 2 b. 2 aと同質 地山○	土器小片	柱頭 SP175→SP607	
SP178 J-1			円形	32	26	10	1. 灰色粘土 地山△			
SP179 J-1			円形	25	24	11	1. 灰褐色粘土 本段△ 地山△ 2. 細灰褐色粘土 地山○		柱痕	
SP180 J-1			円形	18	16	4	1. 灰褐色粘土 地山△ 2. 細灰褐色粘土 地山○		柱痕	

遺構名	位置	種類	平面形	長径	短径	深度	覆土	出土遺物	備考
SP181 J-1			円形	24	22	19	1. 黒灰色粘土 木炭△ 地山○ 2. 黒灰色粘土 地山△		
SP182 J-1			円形	22	19	11	1. 單色粘土 木炭△ 地山△		
SP183 J-1			円形	22	20	9	1. 黑灰色粘土+青灰色粘土 地山○		
SP184 J-1	SAB		円形	24	23	4	1. 黑灰色粘土 木炭△ 2. 緑灰色粘土 地山○	■柱穴	
SP185 J-1			円形	24	18	18	1. 黑灰色粘土 地山○ 2. 單色粘土 地山○		
SP186 J-1	SAB		円形	23	23	8	1. 黑灰色粘土	建物柱穴	
SP188 K-2	SAB		円形	24	19	11	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△	建物柱穴	
SP189 J-2	SAB		円形	24	19	10	1. 黑灰色粘土 2. 緑灰色粘土 地山○ 3. 黑灰色粘土	■柱穴	
SP190 J-2			円形	26	24	14	1. 黑灰色粘土 木炭△	土器小片	
SP191 J-2			円形	22	20	13	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山○ 2. 單色粘土 地山○		
SP192 J-2	SAB	楕円形	38	26	9	1.a. 黑灰色粘土 地山○ 1.b. 黑灰色粘土 地山△	建物柱穴		
SP193 J-1			円形	26	26	4	1. 黑灰色粘土 地山△		
SP194 J-2			円形	24	24	11	1. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 地山○		
SP195 J-2			円形	22	22	10	1. 黑灰色粘土 地山○		
SP196 J-2	圓丸方形		24	24	31	1. 單色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土 木炭△ 3. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 地山○	土器小片		
SP197 J-2	SAB	円形	29	24	14	1. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 木炭△ 地山○ 2. 黑灰色粘土 地山△	建物柱穴		
SP198 J-2			円形	20	18	6	1. 黑灰色粘土 地山○		
SP199 J-2	SAB	楕円形	38	22	11	1. 單色粘土 地山○ 2. 黑灰色粘土 木炭△	建物柱穴		
SP201 J-1-2			楕円形	23	18	19	1. 黑灰色粘土 地山△ 2. 緑灰色粘土 地山○ 3. 黑灰色粘土 木炭△	土器小片	
SK202 J-1-2			円形	66	60	24	1. a. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 木炭△ 地山○ 1.b. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 木炭△ 地山○ 地山△ ッタク主体	土器小片、小型鉢・施土小 片	
SP203 J-1			円形	14	12	16	1. 黑灰色粘土	土器小片	
SP204 J-1			円形	22	18	7	1. 黑灰色粘土 地山○		
SP205 J-1			円形	26	26	15	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山○ 2. 黑灰色粘土 地山○ 3. 黑灰色粘土 地山○		
SP206 J-1	SAB	円形	30	28	17	1.a. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△ 1.b. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△	建物柱穴		
SP207 J-1			円形	20	17	20	1. 黑灰色粘土+綠灰色粘土 地山○		
SP208 J-1			円形	26	26	10	1. 單色粘土 地山○		
SP209 J-1			円形	28	24	11	1. 黑灰色粘土 地山△ 2. 緑灰色粘土 地山○ 3. 緑灰色粘土 木炭△		
SE210 J-1			円形	58	56	65		土器組、珠串片口小片	
SP211 J-2			円形	26	20	20	1. 單色粘土 地山○ 2. 單色粘土		
SP212 J-2			円形	20	16	9	1. 黑灰色粘土 地山△	SP213~SP212	
SP213 J-3	SAB	椭円形	36	24	10	2. 單色粘土 木炭△ 地山○	■柱穴 SP213~SP212		
SP214 J-2			円形	24	22	10	2. 黑灰色粘土 木炭△ 地山○		
SP216 J-2			円形	15	14	9	1. 單色粘土 木炭△ 2. 單色粘土 地山○		
SP217 J-1	SAB	円形	24	22	23	1. 黑灰色粘土 木炭△ 2. 單色粘土 木炭△	柱組 建物柱穴		
SP218 J-1	(不正確)			87		62	1. 單色粘土 木炭△ 2.a. 灰色粘土 木炭△ 2.b. 灰色粘土 木炭△ 3. 黑灰色粘土 木炭△	縄	
SP219 J-2			円形	16	13	6	1. 灰黃褐色粘土 地山△		
SP220 J-2	SAB	円形	26	24	23	1. 灰黃褐色粘土 地山○	建物柱穴		
SP221 J-2	SAB	円形	24	20	14	1. 灰黃褐色粘土 木炭△	建物柱穴		
SE222 I-2	(円形)			92		7.1. 灰黃褐色粘土 地山△ 2. 單色粘土 地山△ 3. 單色粘土+青灰色粘土 地山○ 4. 單色粘土 地山○ 5. 單色粘土 地山○	土器小片、珠串片口		
SP223 III-5			円形	22	17	9	1. 灰色粘土 地山○	土器組小片・小片、珠串片口 VII件、油壺、五瓣罐器、小型 鉢等、少々	
SD226		漆	1228	185					
SK228a F-1		手形	242		5		土器組小片、片口 IV、近世、漆村	SK228a-b~SK228a-b SK228	
SK228b F-1		手形			11			SK228~SK228a-b~SK228a	
SD236 F-1		漆	1769	58	19	1. 灰色粘土 地山△ 2. 黑灰色粘土 木炭○ 地山△ 3. 單色粘土 地山○	土器組、小片	SD237~SK236	
SD236 G-2								土器小片、小型鉢洋、誤化部 材	
SP237 G-2		椭円形	53	49	39	1. 黑灰色粘土 木炭△ 2. 單色粘土 木炭△ 3. 單色粘土+綠灰色粘土 地山○	近世陶器等	SP237~SD236	
SP238 G-2		円形	25	23	10	1. 黑灰色粘土 地山△			
SP239 G-2	SAT	円形	24	21	17	1. 黑灰色粘土		■柱穴	
SP241 G-2		円形	34	38	18	2. 黑灰色粘土 木炭△ 地山△		SP241~SP242	
SP242 G-2		椭円形	48	30	31	1. 黑灰色粘土 木炭△ 地山○		SP241~SP242	

番号	位置	建物	平面形	長径	短径	深度	墳土	出土遺物	備考
SP243	E-2		円形	44	13	29	1. 黒褐色粘土 2. 緑褐色粘土 木炭△ 地山○		柱頭
SP244	B-2		円形	38	38	29	1. 黒褐色粘土		
SP245	B-2		円形	36	32	36	1. 黒褐色粘土 2. 緑褐色粘土 木炭△ 地山○		柱頭
SP246	B-2	547	円形	26	22	16	1. 黒褐色粘土		埴柱穴
SP247	F-2		楕円形	59	23	41	1. 黒褐色粘土 木炭△ 地山△		
SP248	F-2		楕円形	72	60	61	1. 緑褐色粘土 木炭○ 地山○		
SP249	F-1		不定形	90	60	15		陶片、小型鉢浮	
SP253	B1-1		(円形)	112	80	51		樹皮	
SP255	F-1		楕円形	58	33	21	1. 緑褐色粘土		SK253→SP267 SK51→SP255
SP257	F-1		(円形)	29	18	9	1. 黑褐色粘土+青灰色粘土 地山△		
SP260	F-5	548	楕円形	34	28	28	1. 黑褐色粘土		埴柱穴 SP260→SP261
SP261	F-5		楕円形	28	20	29	1. 黑褐色粘土 (柱頭) 2. 緑褐色粘土+青灰色粘土 地山△		SP260→SP261
SP262	F-5	548	円形	40	38	18	1. 黑褐色粘土+青灰色粘土 地山○	近世陶器小片	埴柱穴 SK263→SK262
SP263	F-5		円形	32	26	29	1. 黑褐色粘土		SK263→SK262
SP264	F-5		円形	28	26	18	1. 黑褐色粘土+地山△ (柱頭) 2. 緑褐色粘土+青灰色粘土 地山○		
SP265	F-5		椭	30	29	3	1. 黑褐色粘土		
SP266	F-5	548	円形	32	29	13	1. 黑褐色粘土 地山△	クルミ	埴柱穴 SP267→SP266
SP267	F-5		椭	67	38	41	1. 黑褐色粘土		SP267→SP266
SP268	F-5		椭	50	44	41	1. 黑褐色粘土		
SP272	F-2		楕円形	94	78	11	1. 黑褐色粘土 2. 灰色粘土 地山△	土師器	SK223→SK272
SP273	F-2		楕円形	114	90	51	1. 黑褐色粘土 地山△		SK273→SK272
SP275	F-2		楕円形	76	65	41	1. 黑褐色粘土 木炭△ 地山△	土器小片	
SP276	F-4		円形	26	24	15	1. 緑褐色粘土 2. 喧嘩色粘土+青灰色粘土 地山△		
SP277	E-9 3-4		円形洞	100	35			土器底・小片、埴輪器、種子	SK1→SK277
SP279	F-2	547	円形	16	16	12	1. 黑褐色粘土		埴柱穴
SP280	F-2		円形	26	26	24	1. 細粒状粘土 木炭△ 2. 部分焼粘土 木炭△ 地山○		
SP282	B1-1		円形	74	68	116	1. 黑褐色粘土 木炭△ 2. 部分焼粘土 木炭○ 地山○	埴内窓円井、近世甕、 1. 品目、柱、移設口、圓 石、砾石、鐵、錫み物	
SK283	D-1	(溝九方剖)		45				上面器、小型鉢浮	
SK284	D1-1	不規形		6			6 通耕面の帯間通路を南北に区 隔する、施肥跡	施肥追跡網 建物柱穴	
SP281		SB3		10					
SP282				3					
SP283		SB3		14					
SP284		SB5		16					
SP285		SB5		5					
SP286		SB3		3					
SP287				11					
SP288				9					
SP289		SB5		17					
SP290				10					
SP291				11					
SP292				15					
SP293				19					
SP294				11					
SP295				11					
SP296				11					
SP297				11					
SP298				10					
SP299				10					
SP300				23					
SP301				21					
SP302				23					
SP303				13					
SP304				K3					
SP305				34					
SP306				31					
SP307				-					
SP308				43					
SP309				-					
SP310				-					
SP311				4					
SP312				70					
SP313				4.698					
SP314				2.936					
SP315				-					
SP316				-					
SP317				-					
SP318				-					
SP319				-					
SP320				-					
SP321				-					
SP322				-					
SP323				-					
SP324				-					
SP325				-					
SP326				-					
SP327				-					
SP328				-					
SP329				-					
SP330				-					
SP331				-					
SP332				-					
SP333				-					
SP334				-					
SP335				-					
SP336				-					
SP337				-					
SP338				-					
SP339				-					
SP340				-					
SP341				-					
SP342				-					
SP343				-					
SP344				-					
SP345				-					
SP346				-					
SP347				-					
SP348				-					
SP349				-					
SP350				-					
SP351				-					
SP352				-					
SP353				-					
SP354				-					
SP355				-					
SP356				-					
SP357				-					
SP358				-					
SP359				-					
SP360				-					
SP361				-					
SP362				-					
SP363				-					
SP364				-					
SP365				-					
SP366				-					
SP367				-					
SP368				-					
SP369				-					
SP370				-					
SP371				-					
SP372				-					
SP373				-					
SP374				-					
SP375				-					
SP376				-					
SP377				-					
SP378				-					
SP379				-					
SP380				-					
SP381				-					
SP382				-					
SP383				-					
SP384				-					
SP385				-					
SP386				-					
SP387				-					
SP388				-					
SP389				-					
SP390				-					
SP391				-					
SP392				-					
SP393				-					
SP394				-					
SP395				-					
SP396				-					
SP397				-					
SP398				-					
SP399				-					
SP400				-					
SP401				-					
SP402				-					
SP403				-					
SP404				-					
SP405				-					
SP406				-					
SP407				-					
SP408				-					
SP409				-					
SP410				-					
SP411				-					
SP412				-					
SP413				-					
SP414				-					
SP415				-					
SP416				-					
SP417				-					
SP418				-					
SP419				-					
SP420				-					
SP421				-					
SP422				-					
SP423				-					
SP424				-					
SP425				-					
SP426				-					
SP427				-					
SP428				-					
SP429				-					
SP430				-					
SP431				-					
SP432				-					
SP433				-					
SP434				-					
SP435				-					
SP436				-					
SP437				-					
SP438				-					
SP439				-					
SP440				-					
SP441				-					
SP442				-					
SP443				-					
SP444				-					
SP445				-					
SP446				-					
SP447				-					
SP448				-					
SP449				-					
SP450				-					
SP451				-					
SP452				-					
SP453				-					
SP454				-					
SP455				-					
SP456				-					
SP457				-					
SP458				-					
SP459				-					
SP460				-					
SP461				-					
SP462				-					
SP463				-					
SP464				-					
SP465				-					
SP466				-					
SP467				-					

別表3 開拓造林地の被覆表

No.	種類	品種	面積ha	地点	口徑	底高	残高	色調	助土	株式	備考
1	土器	皿B	S067	I-1	10.8	-	-	3/36 浅黄	稚良・苗	苗	口跡既小片。圓錐丁字。
2	土器	皿B	S067	I-1	12.2	-	-	8/36 浅黄	小苗や多	やや軟	口跡既内外部の凹削溝。
3	土器	皿B	S067	I-1	13.4	7.2	2.6	25/36 浅黄	小苗多・やや粗	やや軟	ほり穴既。圓錐草既。付着物なし。
4	土器	皿D	S067	II-1	12.4	-	-	4/36 灰白	やや大さみの脚、 莎穂縫合	やや軟	口跡既小片。底板既小片。器面塵汚。
5	土器	皿D	S067	II-1	10.8	-	2.8	2/36 浅黄	赤穂・三	良	口跡既から底板小片。器面塵汚既。
6	土器	皿E	S067	II-1	12.0	-	2.7	2/36 灰白	赤穂	やや軟	口跡既から底板小片。器面塵汚既。
7	土器	皿E	S067	II-1	10.8	-	-	5/36 浅黄	稚良	普通	口跡既から底板小片。器面塵汚少。
8	陶器	片口鉢	S067	II-1	-	-	-	灰灰	やや粗い・骨・真	薄・硬	注口既脇の小片。焼きが甘く、外層のみ焼される。
9	陶器	盤	S067	II-1	-	-	-	暗灰	骨・亮・四・薄	薄・硬	萬葉と体現。既燒痕既文。下開口明目あり。
10	陶器	皿	S067	II-1	-	5.4	-	小赤色/暗褐色	負	底入水か、越中廻戸。17世紀。圓錐丸切り。	
11	土器	皿D	S067	J-1	11.8	-	3.0	14/36 浅黄	大きめの脚・骨・ やや粗	良	全形の凹削溝存。調整既良好に存す。外底面に堆 蜜状の底。
12	土器	皿D	S067	E-1	10.4	-	2.7	3/36 黄度	稚良・チャ・赤穂	やや軟	口跡既から底板小片。内底黒色のヨゴレ。
13	土器	皿D	S067	E-1	10.6	-	-	にぶい・暗	赤穂	やや軟	口跡既から底板小片。明るい褐色。
14	土器	皿E	S067	J-1	11.4	-	-	2/36 浅黄	粗	やや軟	口跡既小片。器面塵汚。内底に黒色のヨゴレ付す。
15	土器	皿E	S067	E-1	12.0	-	-	にぶい・暗	粗・赤少・少	やや軟	口跡既から底板小片。器面塵汚既。底色。
16	土器	皿E	S067	J-1	11.0	-	2.7	4/36 浅黄	赤穂や個あるが少 量	やや軟	口跡既から底板既。内底に黒色のヨゴレ。外底 やや塵汚。
17	土器	皿E	S067	J-1	11.4	-	-	5/36 にぶい・暗	赤色絆多い	欽賞	1/2程度保存。内外面塵汚。薄い褐色。赤色多 い。
18	土器	皿E	S067	J-1	11.4	-	-	3/36 灰白	稚良	口跡既小片。	
19	土器	皿E	S067	E-1	13.0	-	-	1/36 浅黄	細多・粗	良	口跡既小片。底面大いに凹、脚立つ。
20	土器	皿E	S067	J-1	13.0	-	-	5/36 にぶい・黄度	粗共	やや軟	口跡既既。外底に薄く底。
21	土器	皿G1	S067	J-1	11.6	-	-	3/36 浅黄	粘質・精良	やや軟	口跡既小片。口跡既部内底厚くヨゴレ。器面塵汚。
22	土器	皿G1	S067	J-1	12.0	-	-	1/36 浅黄	複合多・細	良	口跡既から底板小片。内底全面に深。外底塵汚。
23	土器	皿G1	S067	E-1	11.6	-	-	2/36 浅黄	脚多・少	欽賞	口跡既既。内底塵汚既。口跡既部外底厚。
24	土器	皿G1	S067	E-1	12.2	-	-	2/36 にぶい・暗	複合多	やや軟	口跡既既。内底塵汚既。褐色。
25	土器	皿G1	S067	J-1	12.0	-	-	1/36 浅黄	粗	欽賞	口跡既から底板既。内底塵汚既。底色。
26	土器	皿G1	S067	J-1	11.4	-	-	5/36 浅黄	軟質粗	やや軟	口跡既小片。内底塵汚既。
27	土器	皿G1	S067	J-1	12.4	-	-	4/36 灰白	欽賞	口跡既既。口跡既部下位の沈没跡。	
28	土器	皿G1	S067	I-1	12.2	-	2.4	3/36 灰白	粗	やや軟	口跡既既。口跡既部下位の沈没既。口跡部塵汚。
29	土器	皿G1	S067	E-1	11.6	-	-	2/36 灰白	赤穂	良	口跡既小片。褐色。内外面塵汚。
30	土器	皿G1	S067	J-1	13.0	-	-	4/36 にぶい・暗	欽賞	口跡既小片。内外面塵汚既。口跡既部外底厚。	
31	土器	皿G1	S067	J-1	12.6	-	-	5/36 にぶい・暗	負	口跡既既。内底塵汚既。褐色。	
32	土器	皿G1	S067	J-1	11.4	9.0	2.7	9/36 にぶい・暗	赤穂・粗	やや軟	口跡既既。口跡既部底に薄く底。褐色。
33	土器	皿G2	S067	I-1	11.8	-	-	6/36 にぶい・暗	やや軟	口跡既既。西外面塵汚。内底にヨゴレ。褐 色。	
34	土器	皿G2	S067	I-1	12.0	-	-	2/36 浅黄	稚・英	やや軟	口跡既小片。内外面塵汚既。
35	土器	皿G2	S067	J-1	12.0	7.0	3.1	1/36 浅黄	赤穂・やや粗	やや軟	口跡既から底板既。
36	土器	皿G2	S067	J-1	11.6	-	-	4/36 にぶい・黄度	粗・稚・英	やや軟	口跡既既。内底面壁既。外底薄く底。
37	土器	皿G2	S067	I-1	12.0	5.8	2.8	3/36 にぶい・黄度	チャ	やや軟	口跡既既。外底既既。内底ヨゴレ。
38	土器	皿G2	S067	J-1	12.4	5.8	-	2/36 にぶい・黄度	赤穂・粗	欽賞	口跡既既。西外面塵汚。内底面壁既。褐色。
39	土器	皿H1	S067	J-1	13.0	9.2	3.4	12/36 にぶい・暗	赤粒・粗・チ・粗	欽賞	1/2程度保存。内外面塵汚既。薄い褐色。内一面被 膜。
40	土器	皿H1	S067	I-1	11.6	9.2	3.0	3/36 灰白	稚	欽賞	口跡既から底板既。内外面塵汚既。薄い褐色。
41	土器	皿H2	S067	J-1	11.8	5.9	3.4	8/36 灰白	赤粒	欽賞	1/2程度保存。内外面塵汚既。褐色。
42	土器	皿H2	S067	I-1	11.0	-	2.4	11/36 にぶい・暗	稚	欽賞	1/2強保存。内外面塵汚既。薄い褐色。
43	土器	皿H2	S067	J-1	11.8	-	-	4/36 にぶい・黄度	英	良	口跡既小片。内底面壁既。ヨリヨリ褐色。
44	土器	皿H2	S067	J-1	12.2	-	-	3/36 灰白	稚	良	口跡既小片。底膜なし。褐色。
45	土器	皿H2	S067	I-1	12.4	-	-	2/36 にぶい・黄度	赤粒	やや軟	口跡既小片。内底塵汚既。
46	土器	皿H2	S067	I-1	12.0	-	2.5	3/36 にぶい・黄度	やや軟	口跡既から底板既。内底全面に底。内外面塵汚既。	
47	土器	皿H2	S067	I-1	12.2	-	-	5/36 にぶい・暗	稚	やや軟	口跡既小片。内外面塵汚既。
48	土器	皿H2	S067	I-1	13.2	-	2.6	3/36 にぶい・黄度	チヤ	良	口跡既から底板既。内外面塵汚既。
49	土器	皿H2	S067	J-1	12.6	-	-	4/36 浅黄	稚	口跡既既。内外面塵汚既。	
50	土器	皿H2	S067	I-1	12.2	-	2.9	4/36 にぶい・黄度	赤粒	欽賞	口跡既から底板既。内底面壁既。内底ヨゴレ。
51	土器	皿H2	S067	J-1	8.6	-	-	1/36 にぶい・暗	赤粒	欽賞	口跡既から底板既。内底面壁既。
52	土器	皿H2	S067	J-1	8.2	4.8	1.2	4/36 灰白	赤粒	良	口跡既小片。褐色。
53	土器	皿H2	S067	J-1	7.8	4.2	1.7	12/36 にぶい・暗	稚	1/2強作。	
54	土器	皿H2	S067	J-1	8.0	6.6	1.5	36/36 浅黄	稚	光沢、豊み大きい。薄い褐色。内外面塵汚既。	
55	陶器	片口鉢	S067	J-1	24.0	-	-	2/36 灰	ガサ・黒色吹出	薄・硬	幅2.9cm×12.5cmの鉢目を深く刻む。高さ2.5cm。口跡埋没や 吹き出し縮小。
56	陶器	片口鉢	S067	I-1	26.0	-	-	6/36 灰	稚良・骨少・黒色 吹き出し縮小	薄・硬	口跡既小片。内底面壁既。高さ2.5cm。口跡埋没や 吹き出し縮小。
57	陶器	片口鉢	S067	J-1	-	10.4	-	にぶい・黄度	骨・チフ	薄・硬	外底面にハケ状工具既。
58	陶器	片口鉢(底)	S067	I-1	-	11.6	-	灰	ガサ・骨・稚	薄・硬	静止切り。
59	陶器	甕	S067	I-1	46.0	-	-	3/36 灰白	骨	薄・硬	3cmに10日、開通古い叩き目。
60	陶器	甕	S067	J-1	-	-	-	灰	骨既	口径40cm前後。	
61	陶器	甕T	S067	J-1	-	-	-	灰白	ウサ	薄・硬	底板既。器面や内底。
62	陶器	甕既	S067	I-1	-	-	-	灰白	ウサ・骨・稚	薄・硬	3cmに10日、叩き目。
63	陶器	甕既鉢	S067	K-1	-	-	-	灰	チラ・黒色吹出	薄・硬	3cmに12日、叩き目を細密に行う。内面アバゲ状剥 離。
64	陶器	甕既鉢	S067	K-1	-	-	-	灰	黒色吹出	薄・硬	3cmに11日、叩き目。角度深い形状。口は頸型。
65	白磁	碗既	S067	J-1	15.0	-	-	白/白色	稚良	良	13cm長盤。口跡既既。
66	土器	皿C	S067	G-1	11.0	-	-	2/36 浅黄	赤粒	欽賞	口跡既小片。内外面塵汚既。
67	土器	皿E	S067	G-1	12.0	-	-	2/36 灰白	赤	口跡既小片。内外面塵汚既。	

種類	器種	通横N	地名	口径	底径	器高	残存	色調	胎土	構成	備考
68 土器	器G1	SD57	G-1	12.2	-	7/36	にぶい黒	やや赤	やや軟	口縁部破片。内外面墨色。薄い黒色。	
69 土器	器G2	SD57	F-1	10.8	-	2.8	6/36	黒	黄	口縁部破片。内外面墨色。	
70 土器	器H1	SD57	F1-1	12.9	-	3.1	28/36	浅黄褐	やや赤・チャ	やや軟	口縁部破片。内外面墨色。薄い黒色。
71 土器	器H1	SD57	G-1	12.8	-	3.6	3/36	浅黄褐	やや赤	やや軟	口縁部破片。内外面墨色。外表面に傷、外底面に擦れ。
72 土器	器H2	SD57	F-1	11.8	-	2.6	2/36	浅黄褐	良	良	口縁部破片。内外面墨色。
73 土器	片口鉢	SD57	G-1	25.0	-	-	2/36	灰灰	サラ	薄・硬	口縁部小片。薄く自然端。
74 土器	片口鉢	SD57	F-1	-	-	-	-	灰灰	サラ・骨	薄・硬	口縁部破片。6日前日目。
75 瓦器	變形瓦	SD57	G-1	-	-	-	-	灰	サラ・骨・黒色吹出	薄・硬	体部破片。幅3cmに10日前日目。浅い。
76 土器	器G1	SZ277	E-3	11.0	-	-	2/36	浅黄褐	やや赤	やや軟	口縁部から底部破片。内外面墨色。
77 土器	器G2	SZ277	上層	12.6	-	-	6/36	にぶい黒	トロ	やや軟	口縁部から底部破片。内外面墨色。墨色。
78 木製品	曲木造板	SZ277	黑色屋	34.2	6.1	5.6	-	黒	良	良	円筒形板の一筋。複数枚。
79 木製品	板状	SZ277	下層	27.0	8.0	8.8	-	黒	良	良	方形板。
80 陶器	片口鉢	SE65	-	20.2	12.4	9.4	3/36	灰	サラ・骨・黒色吹出	薄・硬	口縁部から底部破片。口縁部内墨。鋸目なし。底部墨色切り。内面墨跡認められない。
81 木製品	下板	SE65	-	23.9	11.9	4.2	-	木	良	良	一通り。
82 木製品	木葉	SE65	-	16.2	3.1	8.3	-	木	良	良	「山賊民終身口」
83 木製品	板状	SE65	-	17.1	3.1	8.4	-	木	良	良	下端丸。表面やや滑らか。
84 木製品	板状	SE65	-	74.0	1.3	2.2	-	木	良	良	所々正方形。
85 土器	器G1	SZ122	下層	11.6	-	2.6	3/36	にぶい黒	やや赤	やや軟	口縁部から底部破片。内外面墨色。
86 土器	器D	SE122	上層	11.6	-	2.3	2/36	浅黄褐	良	良	内面墨色や摩耗。
87 土器	器D	SE122	上層	12.2	-	-	3/36	浅黄褐	骨・霧	良	口縁部から底部破片。外底面に墨色。内外面やや摩耗。
88 土器	器H1	SE210	-	12.2	5.4	3.1	にぶい黒	やや赤・チャ・やや霧質	やや軟	1/3強厚。内面やや暗黒。外造面部に傷け付。内圓周にヨゴレ。	
89 土器	器D	SD58	-	11.6	7.8	3.6	5/36	浅黄褐	良	良	口縁部から底部破片。内外面墨色。外一部に薄くヨゴレ。
90 土器	小皿	SZ52	-	8.2	5.0	1.6	28/36	浅黄褐	霧	良	口縁部一筋欠損。外表面やや強く摩耗。内面墨色少ない。内面に薄く墨色。
91 土器	小器B1	SZ64	-	9.9	-	-	3/36	浅黄褐	良	良	口縁部小片。墨色少ない。
92 土器	器C	SZ79	-	12.2	-	-	-	灰白	噴質	良	口縁部小片。内外面墨色。
93 土器	小皿A2	SZ79	-	8.2	6.8	1.1	10/36	にぶい黒	サラ・骨・霧	やや軟	口縁部から底部破片。内外面墨色。
94 土器	小皿D	SZ79	-	8.4	5.9	1.0	6/36	浅黄褐	やや砂質	良	1/4強厚。内面墨色。
95 土器	小皿B2	SZ79	-	8.6	-	-	8/36	にぶい黒	サラ	良	口縁部から底部破片。内外面墨色。
96 瓦器	甕	SZ96	-	-	10.8	-	-	灰白	やや砂質・長・霧	薄・軟	底面墨色。内外面。内底面。板状端面。内面一部被削し。迷村。
97 木製品	板状	SZ96	-	20.6	9.6	8.3	-	木	良	良	所々剥離。
98 木製品	板状	SZ20	-	11.9	5.6	4.9	-	木	良	良	内面墨色。
99 陶器	甕	SX158	-	-	17.0	-	-	灰白	やや粗・台面溝・霧・規	良	3cmに10日前日目。内面墨色。被削し。内面に細かい亀裂。底部約1.5cm残。
100 土器	器B	SX1	Y-25	13.2	-	3.2	-	浅黄褐	綿・良	良	口縁部および内底部。墨色はなし。被削4点。
101 土器	器C	SX1	-	13.2	-	2.7	7/36	浅黄褐	綿・良	良	口縁部から底部破片。墨色見られず。
102 土器	器D	SX1	Y-25	14.2	-	-	7/36	にぶい黒	綿・良	良	口縁部から底部破片。墨色少ない。薄い黒色。
103 土器	器D	SX1	Y-25	13.4	-	-	4/36	にぶい黒	綿・良	良	口縁部小片。墨色少ない。
104 土器	器E	SX1	Y-25	14.9	-	-	2/36	にぶい黒	綿	良	口縁部小片。墨色少ない。
105 土器	器E	SX1	-	13.0	-	-	1/36	浅黄褐	軟質	良	口縁部小片。内外面墨色。
106 土器	器F1	SX1	Y-25	13.2	-	-	5/36	にぶい黒	良	良	口縁部小片。内外面墨色。
107 土器	器F1	SX1	Y-25	13.2	-	-	2/36	にぶい黒	軟質	良	口縁部小片。内外面墨色。
108 土器	器F1	SX1	Y-25	13.4	-	-	7/36	にぶい黒	良	良	口縁部破片。墨色見られず。厚色。
109 土器	器F1	SX1	Y-25	13.2	-	3.6	9/36	浅黄褐	チャ	良	口縁部から底部破片。内外面やや摩耗。
110 土器	器G1	SX1	Y-25	13.0	-	3.3	4/36	にぶい黒	良	良	口縁部から底部破片。墨色少ない。内外面薄くヨゴレ。
111 土器	器G2	SX1	Y-25	13.2	-	2.8	-	霧	骨・霧	良	口縁部から底部破片。外表面墨色。
112 土器	器G2	SX1	Y-25	13.2	-	-	4/36	浅黄褐	良	良	口縁部小片。外底面に墨色。墨色少ない。
113 土器	器G2	SX1	Y-25	13.2	-	-	3/36	浅黄褐	良	良	口縁部小片。内外面墨色。
114 土器	器G2	SX1	Y-25	13.0	-	2.8	-	灰	良	口縁部から底部破片。墨色少ない。	
115 土器	器H1	SX1	Y-25	13.2	-	3.5	3/36	にぶい黒	綿・チャ・霧	良	口縁部から底部破片。口縫部に墨色。墨色少ない。
116 土器	器H1	SX1	Y-25	12.4	-	2.9	8/36	にぶい黒	良	良	口縁部から底部破片。内外面墨色。
117 土器	器H1	SX1	Y-25	11.8	-	3.1	6/36	浅黄褐	良	良	口縁部から底部破片。内外面墨色。119と同一体。
118 土器	器H1	SX1	Y-25	10.0	10.2	3.3	9/36	霧	赤絆・紗質	被削	1/3強厚。外表面強く摩耗。底部中央凹む。
119 土器	器H1	SX1	Y-25	12.2	-	3.6	5/36	灰灰	黒色吹出	良	1/3強厚。外表面強く摩耗。底部中央凹む。
120 土器	器H1	SX1	Y-25	11.4	-	3.1	7/36	浅黄褐	霧	良	口縁部から底部破片。墨色少ない。
121 土器	器H1	SX1	Y-24	12.2	9.0	3.8	25/36	にぶい黒	霧・チャ	良	口縁部一筋欠損。口縫部に墨色。墨色少ない。指頭部照査。外表面墨色。
122 土器	器H1	SX1	Y-25	11.4	-	2.9	5/36	にぶい黒	良	良	口縁部破片。内外面墨色。
123 土器	器H1	SX1	Y-25	12.6	-	-	7/36	にぶい黒	良	良	口縁部破片。内外面墨色。被削。
124 土器	器H1	SX1	Y-25	12.4	-	3.4	3/36	にぶい黒	良	良	口縁部から底部破片。内外面やや墨色。
125 土器	器H1	SX1	Y-25	12.2	-	-	4/36	にぶい黒	良	良	口縁部小片。墨色少ない。
126 土器	器H2	SX1	Y-25	12.0	-	2.6	9/36	にぶい黒	綿	良	口縁部から底部破片。墨色見られず。薄い黒色。
127 土器	器H2	SX1	Y-25	11.6	-	3.0	9/36	霧	骨・黒色吹出	良	口縁部から底部破片。墨色多く。外表面墨色。絹糸痕有り。111と同一。
128 土器	器H2	SX1	Y-25	12.4	-	3.0	7/36	浅黄	黒色吹出	良	口縁部破片。墨色少ない。被削。
129 土器	器H2	SX1	Y-25	11.8	9.0	3.1	6/36	浅黄褐	良	良	口縁部から底部破片。墨色少ない。
130 土器	器H2	SX1	Y-25	12.2	-	-	4/36	浅黄	霧質	良	口縁部破片。内外面墨色。内面に付着物有り。
131 土器	器H2	SX1	Y-25	13.0	-	-	2/36	にぶい黒	良	口縁部小片。内外面墨色。	
132 土器	器H2	SX1	Y-25	12.2	-	2.3	2/36	灰白	黒色吹出・チャ	やや軟	口縁部から底部小片。内外面墨色。内面に黒い印有り。

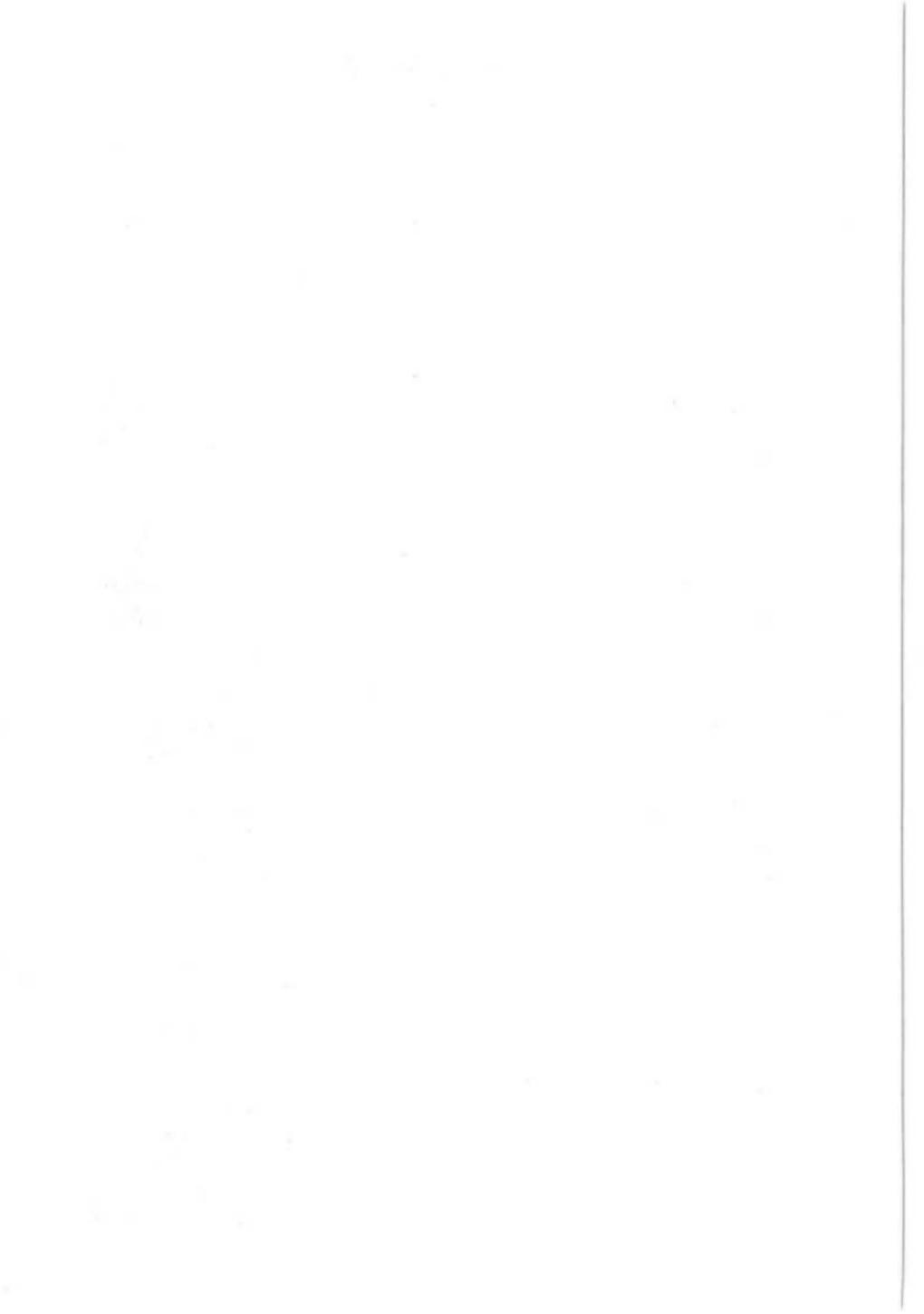
№	種類	器種	造形	地点	口径	底径	高さ	残存	色調	胎土	構成	備考	
133	土器	皿B2	S31	V-25	12.4	-	-	3/36	にない模	良	口縁部小片。摩耗少。		
134	土器	皿B2	S31	V-25	11.9	-	-	-	にない模	良	口縁部小片。薄い褐色。内外面摩耗。		
135	土器	皿B2	S31	V-25	12.2	-	2.9	6/36	にない質	良	口縁部から底部破片。内外面摩耗。透明白色肉厚。		
136	土器	皿のみ底	S31	V-25	-	-	-	-	にない模	黒色吹出	底部破片。外内面や下掌托。薄い褐色。		
137	土器	皿のみ底	S31	V-25	-	-	-	-	にない模	良	底部破片。摩耗少。		
138	土器	小皿A1	S31	V-25	9.2	-	1.9	6/36	にない模	良	口縁部から底部破片。外面部面から表面に傷。摩耗少。		
139	土器	小皿A2	S31	V-25	8.6	-	2.5	7/36	にない模	砂やや粗・チャ 赤粒やや多	良	口縁部から底部破片。内外面摩耗。	
140	土器	小皿B	S31	V-24	7.8	-	1.6	痕	赤粒	良	口縁部から底部破片。内外面摩耗。褐色。		
141	土器	小皿B	S31	V-25	7.8	-	2.1	25/36	にない模	良	口縁部一部欠損。破片3点の接着。内外面摩耗。褐色。		
142	土器	小皿B	S31	V-25	7.4	-	1.8	にない模	赤粒	良	口縁部小片。内面に傷。		
143	灰陶	甌	S31	V-25	6.0	-	-	4/36	灰白	塵・トロ	塵・塵	2cmに亘る目立つきと、圓い、内面アバタ状凹凸少。	
144	灰陶	甌	S31	V-25	-	-	-	-	灰白/外表面	トロ	塵・塵	3cmに亘る目立つきと、圓い、143と同一。	
145	灰陶	甌	S31	V-25	-	-	-	-	灰	塵	3cmに亘る目立つきと、圓い。		
146	灰陶	片口鉢	S31	V-25	-	12.0	-	灰	黒色吹出・歪	塵・塵	静かに切り落。底部破片や分残存。外表面中央に強く傷。		
147	青磁	瓶	S31	V-25	16.0	-	-	5/36	灰暗/オーリーブ灰	歪	口縁部破片。瓶乳頭直幅。縫合部。13世紀後半。内面有り物有り。		
148	青磁	瓶	S31	V-25	-	-	-	-	灰暗/オーリーブ灰	歪	口縁部破片。瓶乳頭直幅。縫合部。13世紀後半~14世紀前半。内面有り物有り。		
149	青磁	瓶	S31	V-25	-	5.2	-	灰オーリーブ/暗灰	歪	良	底部破片。瓶乳頭直幅。印文「福」。外底面に墨。		
150	木製品	舟形	S31	-	-	-	-	-	-	-	-		
151	木製品	舟形	S31	-	11.9	6.0	1.8	-	-	-	-	丸大状の板。半盤。	
152	木製品	舟形	S31	V-25	8.3	5.4	3.6	-	-	-	-		
153	木製品	舟形	S31	-	5.3	2.7	0.3	-	-	-	-	竹け札下端か	
154	木製品	舟形底座	S31	-	16.4	-	0.8	-	-	-	-	折成残る	
155	木製品	筆	S31	下層	9.4	0.8	0.4	-	-	-	-		
156	木製品	所敷底座	S31	-	31.5	2.1	0.5	-	-	-	-		
157	木製品	所敷底座	S31	底面層	21.5	2.1	0.5	-	-	-	5.22と同一。		
158	木製品	脚村	S31	V-25	14.6	2.9	1.2	-	-	-	-		
159	木製品	脚村	S31	-	30.7	2.7	0.5	-	-	-	-		
160	木製品	脚村	S31	上層	25.6	3.8	0.5	-	-	-	-	脚部一方尖る。	
161	木製品	脚村	S31	-	31.7	1.7	0.6	-	-	-	-	脚部尖り気味。	
162	木製品	脚村	S31	-	38.1	1.7	1.3	-	-	-	-	脚部脚底に彎曲。	
163	木製品	脚村	S31	-	40.3	4.6	0.9	-	-	-	-	5.22と同一。	
164	土器	皿A	SK73	0-21	13.2	-	-	4/36	にない質	繊・紗質	やや軟	口縁部小片。内外面面脚激しい。内面に薄くヨゴレ。	
165	土器	皿B	SK73	0-21	13.6	-	3.5	5/36	にない模	英・気泡	やや軟	口縁部から底部破片。内面表面に気泡多い。内面や外壁有り。外底面直付型。	
166	陶器	片口鉢	SK73	0-21	24.0	-	-	培泥	白陶・透	透・透	透・透	丘原部小片(420g)。薄手。底部尖り気味。	
167	陶器	片口鉢	SK73	0-21	32.0	-	-	培泥	骨	透・透	透・透	口縁部から体部上半。5.0の底部切口。口縫細胞内包。塑性はなし。	
168	白磁	瓶	SK73	0-21	14.4	-	-	3/36	白/無色	歪	良	口縁部小片。押模。11世紀後半~12世紀前半以降。口縫細胞半に外包。手掘削下限開始。	
169	白磁	瓶	SK73	0-21	16.4	-	-	白/無色	歪	良	口縁部小片。押模。11世紀後半以降。		
170	青磁	瓶	SK73	0-21	-	-	-	灰白/淡綠	歪	良	底部小片。瓶底直幅1張。片影草花文。12世紀後半。外底面難観。		
171	土製品	土器	SK73	0-21	5.4	3.1	1.5	傾	骨・微少量	良	外径37mm。内径30mm。復原。		
172	滑石	皿	SK73	0-21	9.0	5.8	1.6	-	-	-	-		
173	土器	皿X	SK226	-	14.0	7.4	2.0	12/36	灰黒	赤粒・骨・長	良	口縁部から底部1/3程度残存。器形褐色。赤色粒子多い。	
174	陶器	皿	SK226	G-2	-	4.8	-	-	-	-	-	3.24円周。紀元前IV期。	
175	陶器	皿	SK226	G-2	20.0	-	-	-	2/36	-	-	13世紀前葉~12世紀後葉。	
176	石製品	砕石	SK226	G-2	6.8	2.6	2.1	-	-	-	-	再利用。	
177	陶器	皿	SK249	-	-	10.0	-	-	-	-	-	紀元前IV期。	
178	陶器	圓錐	SK228	27.0	-	-	-	4/36	にない模/暗青燒	織多	良	3.2~24.15日の効目。越中瀬戸。17世紀中。口縫細胞開放。口縫細胞アバタ状剥離。	
179	陶器	上臼	SE282	-	-	-	-	-	-	-	-	骨の櫛痕らしい。	
180	石製品	砕石	SE282	-	16.9	13.4	0.5	-	-	-	-	32.4円周。17世紀後葉。	
181	石製品	砕石	SE282	-	5.0	3.3	2.0	-	-	-	-	再利用。	
182	陶器	圓錐	SE282	-	24.0	-	-	-	-	-	-	17世紀後葉~後漢。	
183	珠形	片口鉢	SK228	26.0	-	-	-	灰	青少・白色織紋 子・骨	透・透	透・透	口縫部小片。基・IV周。	
184	陶器	瓶	SK228	-	4.8	-	-	-	-	-	-	内部直筒状。肥厚。(1~) II周。	
185	陶器	瓶	SK228	-	10.2	-	-	-	-	-	-	32.4円周。17世紀後葉。	
186	銀器	皿	SK228a	13.2	5.2	4.0	2/36	-	-	-	-	17世紀中葉~後漢。II~周。初期伊万里。	
187	銀器	皿	SK228a	13.4	-	-	2/36	-	-	-	-	17世紀中葉~後漢。II~周。初期伊万里。	
188	石製品	砕石	SK228a	3.6	2.1	0.4	-	-	-	-	-	灰褐色石	
189	土器	皿A	P-20	12.6	6.2	3.0	3/36	浅黄褐	軟質	口縫部破片。内外面摩耗。外底薄く。			
190	土器	皿D	P-21	11.6	-	-	4/36	浅黄褐	軟質	口縫部破片。内外面摩耗。			
191	土器	皿F	P-20	11.0	-	-	6/36	灰白	軟質	口縫部破片。兎足多く。内底面摩耗。			
192	土器	皿G1	匂合層	P-20	12.4	-	3.0	31/36	灰白	砂質	やや軟	口縫部から底部1/3程度残存。器形褐色。黒色。	
193	土器	皿G1	匂合層	P-20	13.2	-	-	2/36	灰白	砂質	やや軟	口縫部短い。内外面摩耗。	
194	土器	皿G1	P-20	13.0	-	-	8/36	灰白	砂質	口縫部	口縫部短い。内外面摩耗。		
195	土器	皿G1	V-21	13.0	-	-	-	4/36	浅黄褐	織多	良	口縫部短い。内外面摩耗。褐色。	
196	土器	皿G1	V-20	12.2	-	2.9	4/36	にない模	赤粒少	軟質	口縫部短い。兎足多く。内底面摩耗。薄い褐色。		
197	土器	皿G1	匂合層	P-20	14.0	-	2.7	8/36	にない模	赤粒少	やや軟	口縫部短い。内外面摩耗。	
198	土器	皿H1	匂合層	F-1	11.6	-	-	4/36	にない模	赤粒少・質	やや軟	口縫部から底部破片。内外面摩耗。褐色。	
199	土器	皿H1	匂合層	D-1	12.4	-	-	2/36	模	軟質	口縫部から底部破片。内外面摩耗。褐色。		

地名	種類	器種	遺跡名	地点	口径	底径	高さ	残存	色調	胎土	焼成	備考	
200 土器	小皿	包合層	V-24	8.4	-	1.7	28/36	に古い黄鐵	赤褐色	やや軟	口縁部一部欠損。内面外壁摩擦。内面に付着物有り。	開口埋器	
201 烧器	小皿	包合層	U-23	8.2	4.4	1.1	8/36	に古い黄鐵	赤	硬	口縁部小片。口縁部附近に匣窯灰付着。	口縁部小片。	
202 烧器	口esson	包合層	F-29	20.0	-	-	-	灰	灰	硬	口縫部小片。口縁部附近に匣窯灰付着。	口縫部小片。	
203 烧器	盒	包合層	F-29	-	8.8	-	-	灰	灰	長	底部破片。静止切り目。	底部破片。	
204 烧器	碟	包合層	E-4	-	-	-	-	灰	灰	硬	口縫部小片。口縁部附近に匣窯灰付着。	口縫部小片。	
205 烧器系	深鉢	包合層	E-21	-	-	-	-	灰	灰	硬	底部破片。外側自然端。	底部破片。	
206 白陶	碗	陶	-	-	4.2	-	底	白/無色	白	硬	底部破片。引けだし窓。外表面滑。	底部破片。	
207 烧器	盤	土	D-1	-	4.4	-	-	白/洁白色	白	硬	底部破片。肥厚。見込みに墨斑。	底部破片。	
208 青磁	瓶	土	S-21	17.8	-	-	-	灰青/明オリーブ	緑	硬	口縫部小片。外表面滑有り。	外表面滑有り	
209 烧器	碗	包合層	G-3	-	5.0	-	-	-	-	-	底部、肥前中期窓。器表手取み。	底部、肥前中期窓。	
210 烧器	碗	包合層	K-1	-	4.8	-	-	-	-	-	紀前Ⅱ期。	紀前Ⅱ期。	
211 烧器	酥油灯	包合層	D1-3	-	-	-	-	-	-	-	紀前。	紀前。	
212 烧器	打明器	盛土	Q-21	-	-	-	-	-	-	-	唐宋。10世紀。	唐宋。10世紀。	
213 烧器	豆	包合層	E-4	12.0	-	-	2/36	-	-	-	肥前初期。	肥前初期。	
214 烧器	豆	包合層	D-2	-	4.2	-	-	-	-	-	肥前中期。肥前Ⅱ期。	肥前中期。肥前Ⅱ期。	
215 烧器	豆	包合層	G-3	-	5.4	-	-	-	-	-	肥前中期。	肥前中期。	
216 烧器	碟	土	N-29	-	-	-	-	-	-	-	生産地不明。	生産地不明。	
217 烧器	豆	包合層	I-2	-	4.0	-	-	-	-	-	越中廻戻戸。17世紀。	越中廻戻戸。17世紀。	
218 烧器	広口豆	土	9.0	x	-	-	9/36	褐灰色/暗褐色	やや粗	良	口縫部に付着物有り。IT記録裏面(～18世紀前半)。	口縫部に付着物有り。IT記録裏面(～18世紀前半)。	
219 烧器	豆	包合層	D-4	17.8	-	-	2/36	-	-	-	生産地不明。肥前V期以降。	生産地不明。肥前V期以降。	
220 烧器	豆	包合層	D-4	-	8.0	-	-	-	-	-	肥前廻戻戸。	肥前廻戻戸。	
221 烧器	碗	包合層	I-2	12.0	-	-	2/36	-	-	-	-	-	-
222 烧器	碗	包合層	D1-3	-	4.0	-	-	-	-	-	紀前IV期前半。加工円板。	紀前IV期前半。加工円板。	
223 烧器	灰入小豆	包合層	R-28	9.4	-	-	-	-	-	-	肥前V期。18世紀前半。	肥前V期。18世紀前半。	
224 烧器	豆	包合層	G-1	-	5.2	-	-	-	-	-	紀前II期。肥前Ⅱ期。	紀前II期。肥前Ⅱ期。	
225 烧器	碗	包合層	D-3	-	4.0	-	-	-	-	-	紀前V期。	紀前V期。	
226 烧器	碗	包合層	D-2	-	4.0	-	-	-	-	-	紀前前半。	紀前前半。	
227 烧器	碗	包合層	P-1	-	4.2	-	-	-	-	-	紀前II期後半。	紀前II期後半。	
228 烧器	小杯	包合層	J-1	7.0	2.9	3.4	19/36	-	-	-	「成化斗笠」。肥前V期窓。	「成化斗笠」。肥前V期窓。	
229 烧器系	熊耳杯	SBG7	D-1	13.3	-	-	2/36	灰	赤	硬	口縫部片。小口。肥前茎葉窓。	口縫部片。小口。肥前茎葉窓。	
230 烧器系	有合子杯	SBG7	P-1	-	5.8	-	-	灰	長	硬	底部小片。内縫端地。	底部小片。内縫端地。	
231 烧器系	共同器	SBG7	H-174	中層	24.0	-	1/36	灰	長	硬	口縫部片。	口縫部片。	
232 土器系	碟	土	S31	-	12.6	-	3/36	に古い褐	食	黃	良	ロクロ式成形。	ロクロ式成形。
233 破瓦器	體器部	SBG7	J-1	-	-	-	-	灰	長	少	小口。外表面叩き目。内面同心円凹凸具。	小口。外表面叩き目。内面同心円凹凸具。	
234 破瓦器	横幅小	SBG7	J-1	-	-	-	-	灰	黑色吹出少量	澤	硬	外表面叩き目。内面同心円凹凸具。	外表面叩き目。内面同心円凹凸具。
235 古墳	高円	SBG7	F-1	18.0	-	-	-	-	-	-	口縫部小片。	口縫部小片。	
236 古墳	高円仰杯	白合層	F-2	-	-	-	-	に古い褐	赤	硬	中実窓。	中実窓。	
237 古墳	高円仰杯	白合層	D-2	-	-	-	-	に古い褐	長	軟質	軽細織紋の小片。	軽細織紋の小片。	
238 古墳	高円	SBG7	F-1	-	16.0	-	小片	に古い褐	短	繊多	輕細織紋の小片。	輕細織紋の小片。	
239 古墳	碟	包合層	D-6	19.0	-	-	-	に古い褐	小縦多・赤粒	硬	肥厚端。	肥厚端。	
240 古墳	盤	SBG7	F-1	21.0	-	-	-	短	短	硬	斜削端。	斜削端。	

注量の単位はml、残存の分數は、口器部の残存率を表す。

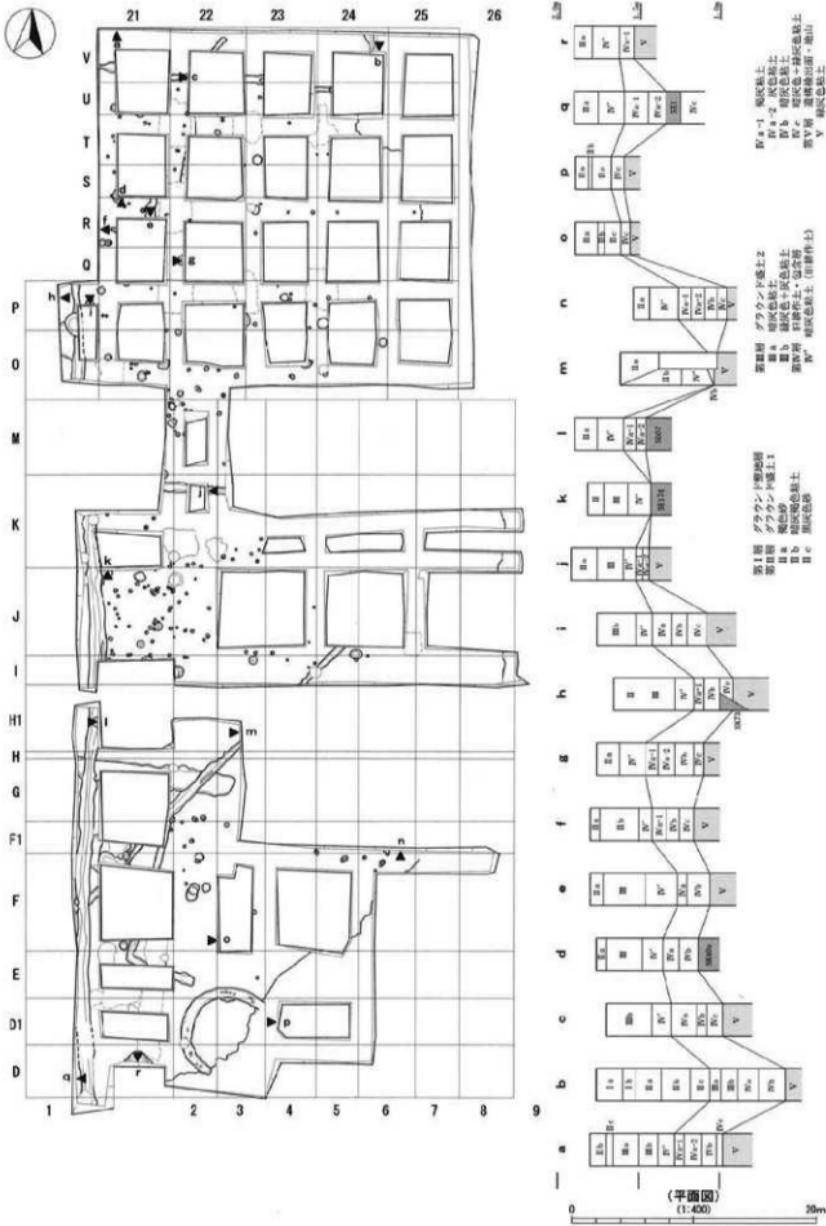
## 図 版

1. ここには、遺跡全体及び遺構・遺物に関する実測図と写真を納める。図版番号は図面図版・写真図版の通し番号となっている。
2. 図面図版には方位と縮尺を付した。方位は全て真北である。
3. 遺構写真的撮影方向は、遺構に対する概ねの方位である。
4. 写真図版のうち、出土遺物の縮尺は統一していない。



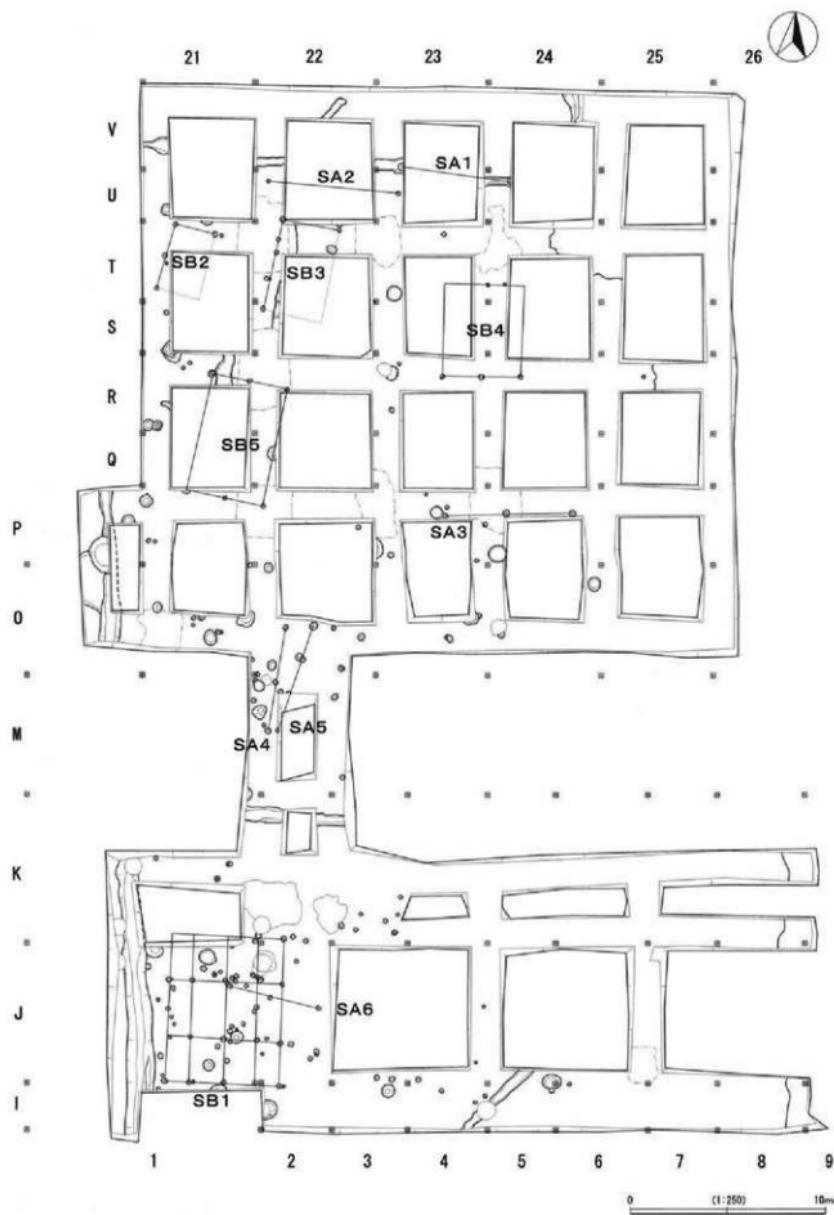
## グリッドの配置と基本土層

図版 1



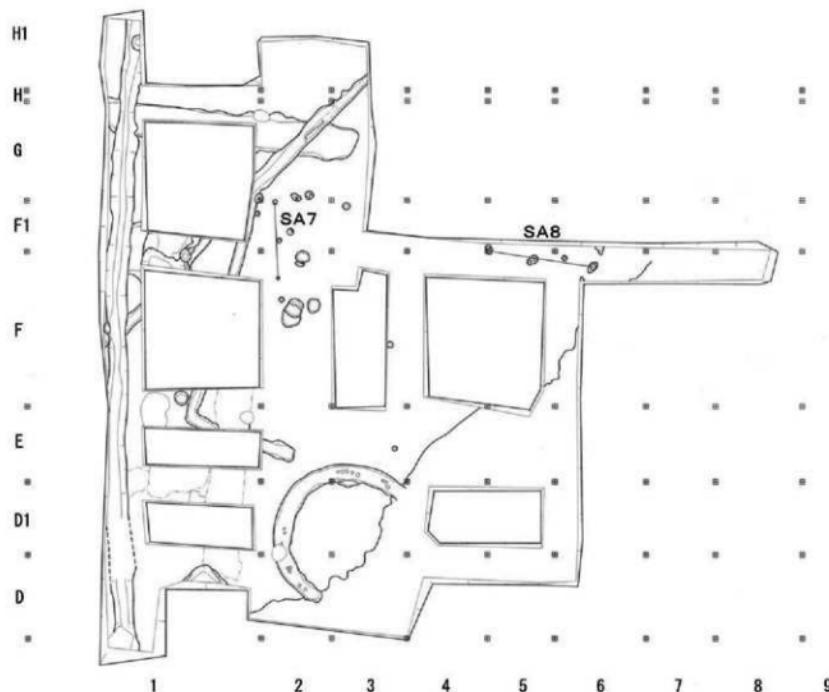
図版 2

遺構全体図 1



遺構全体図 2

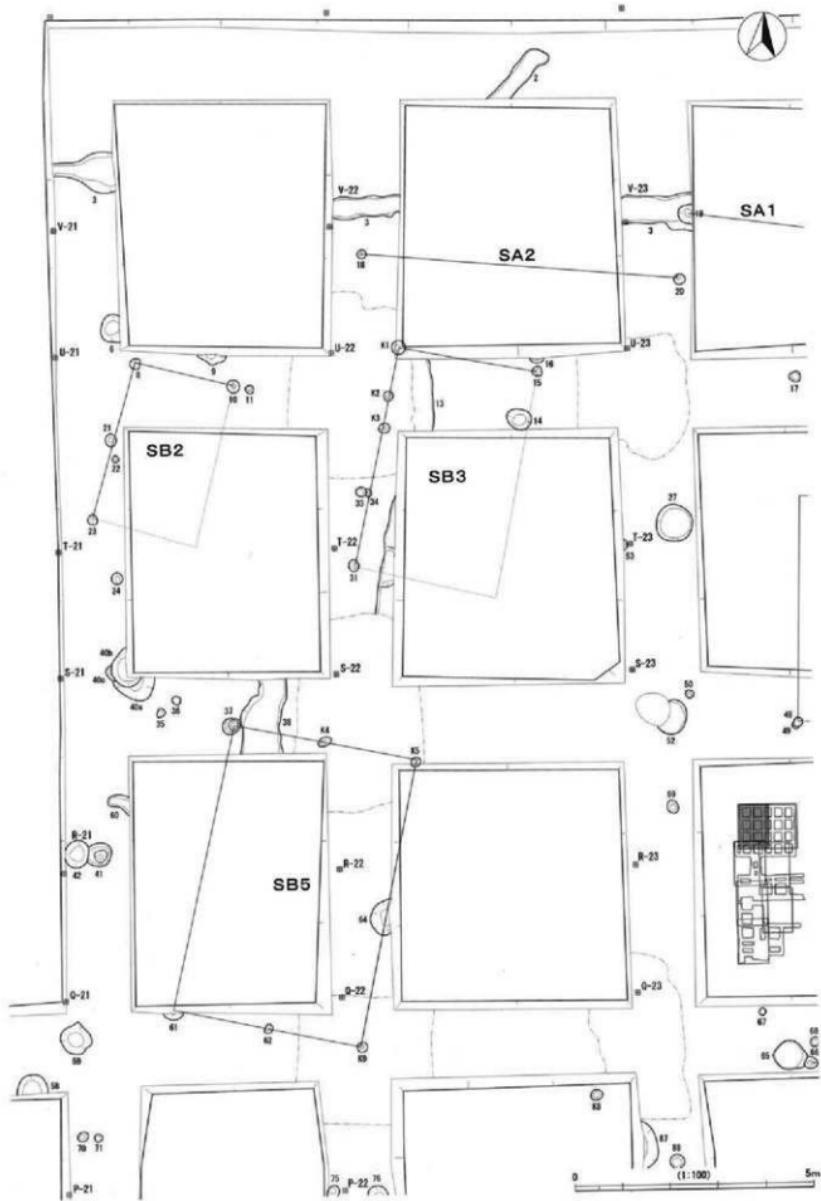
図版 3



0 (1:250) 10m

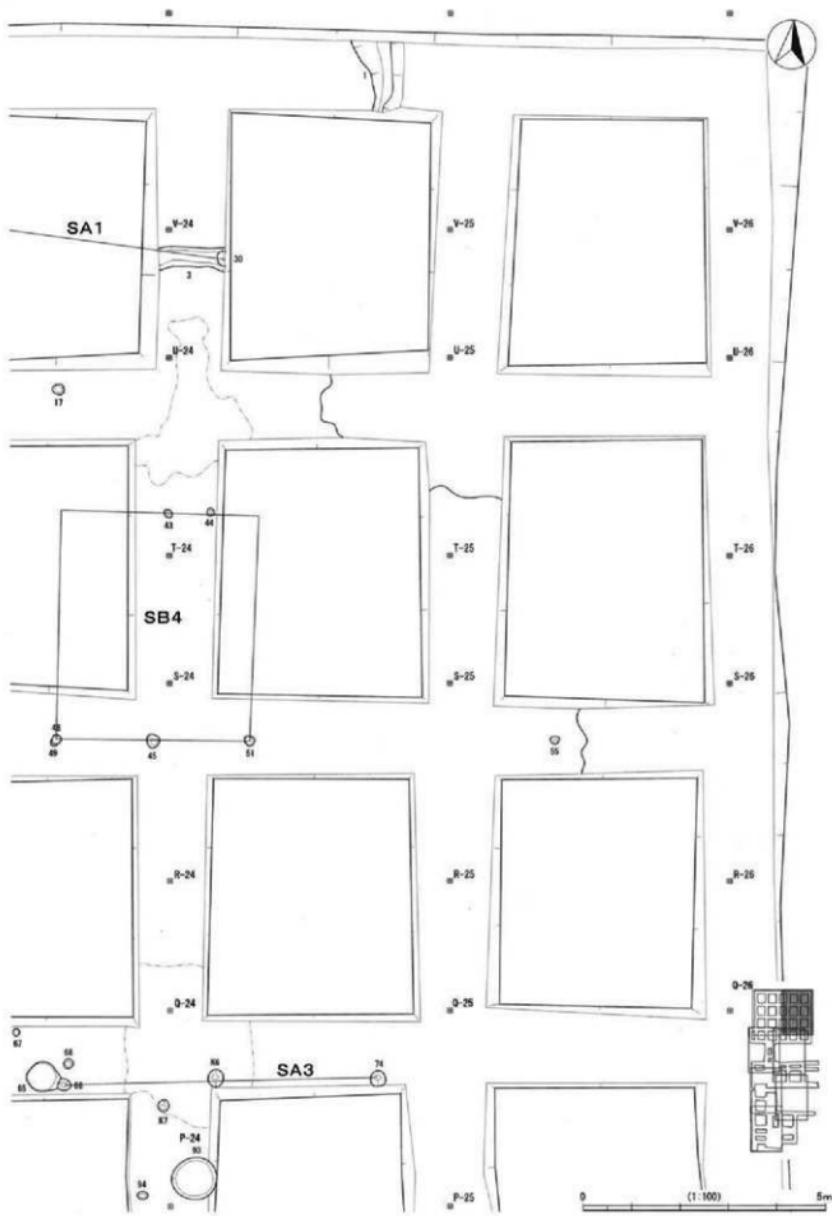
図版 4

造構全体図 3



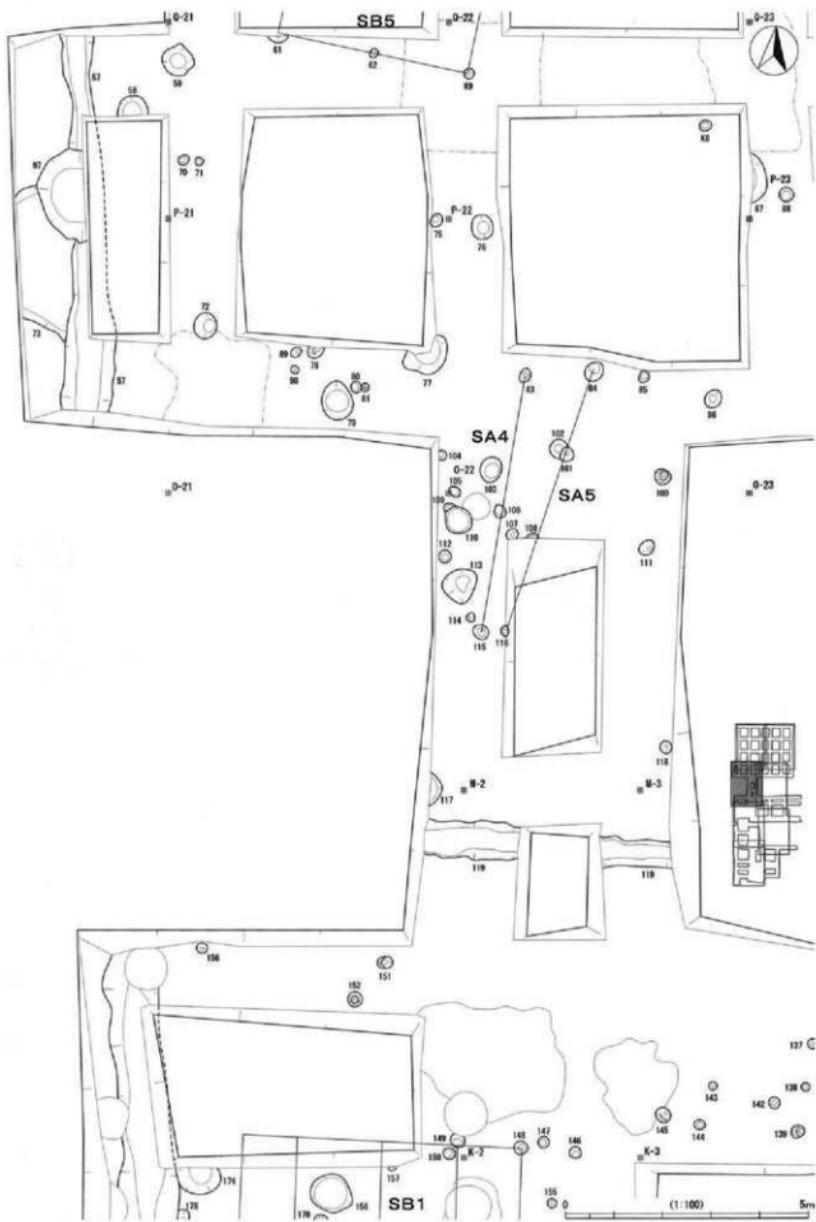
遺構全体図 4

図版 5

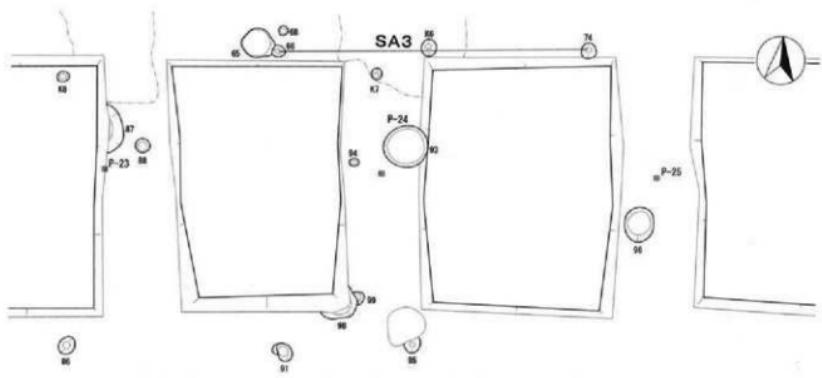


図版 6

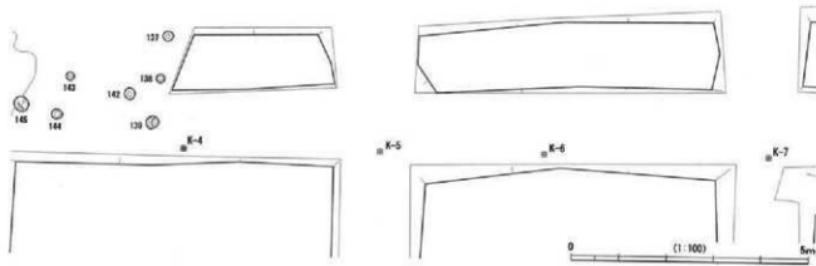
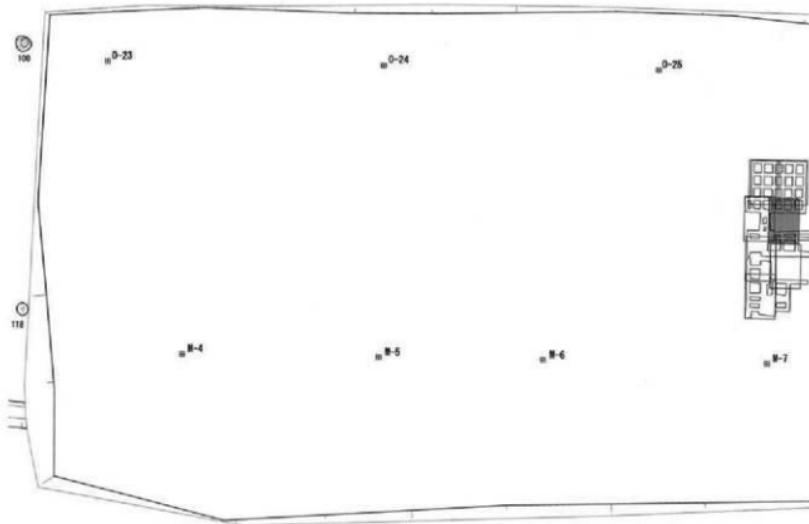
遺構全体図 5



遺構全体図 6

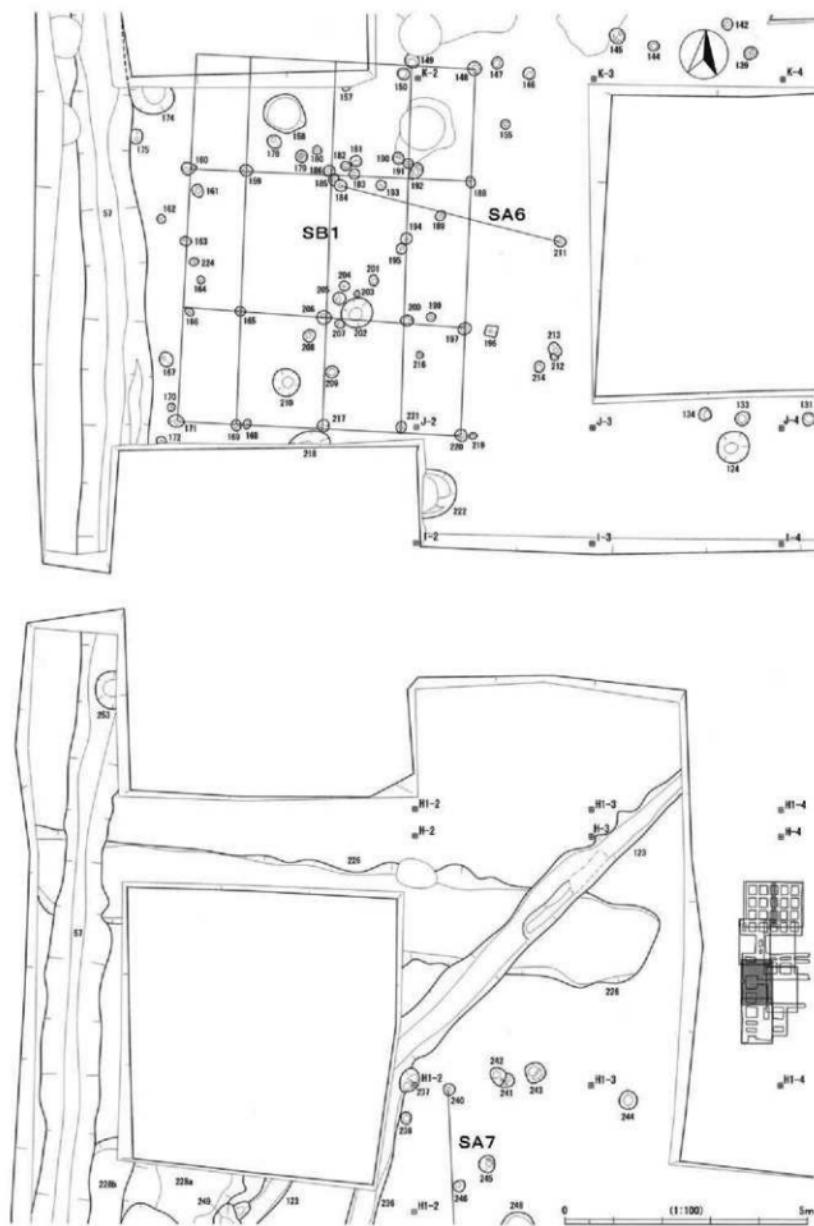


図版 7



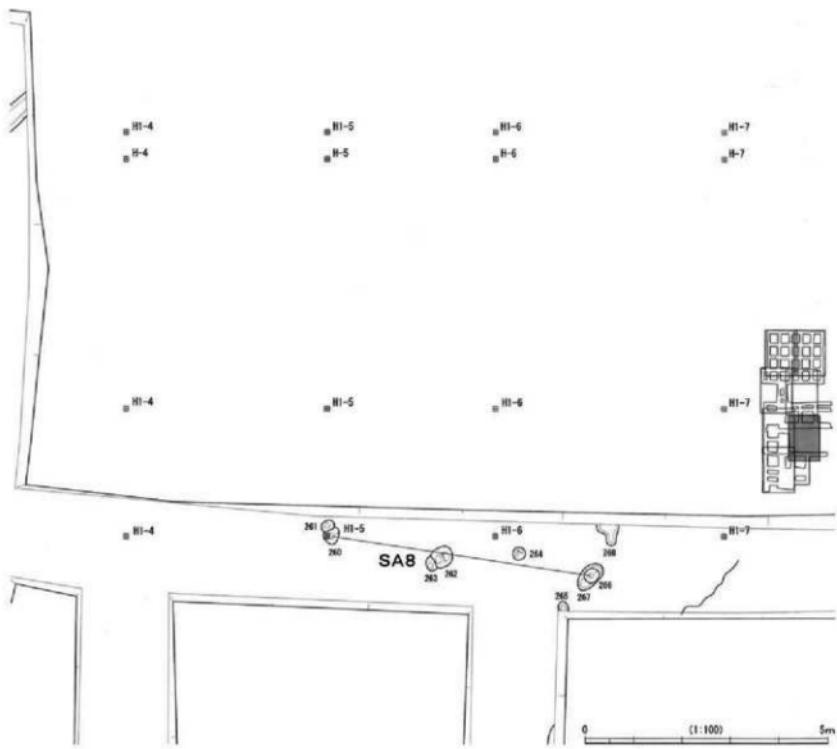
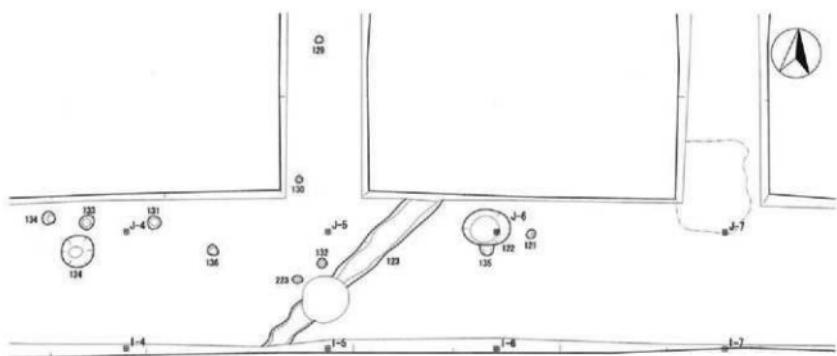
図版 8

遺構全体図 7



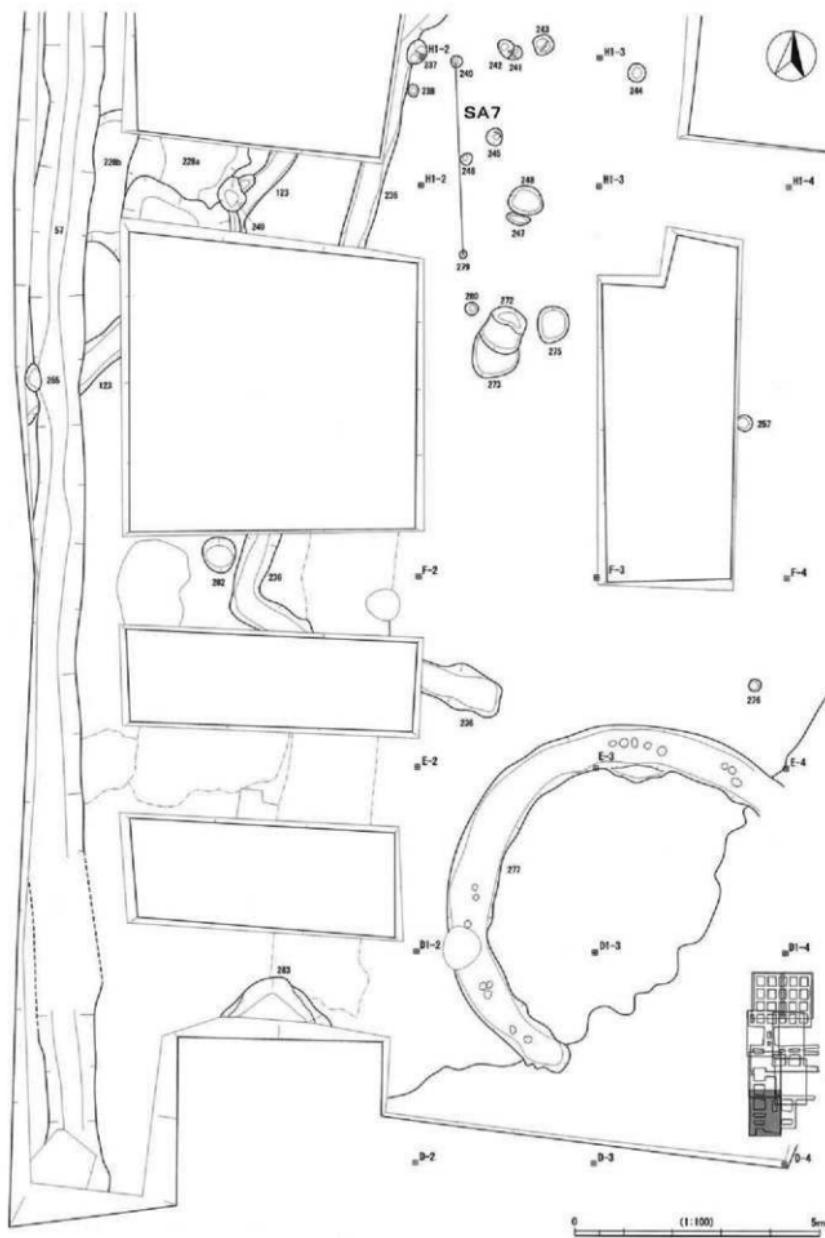
遺構全体図 8

図版 9

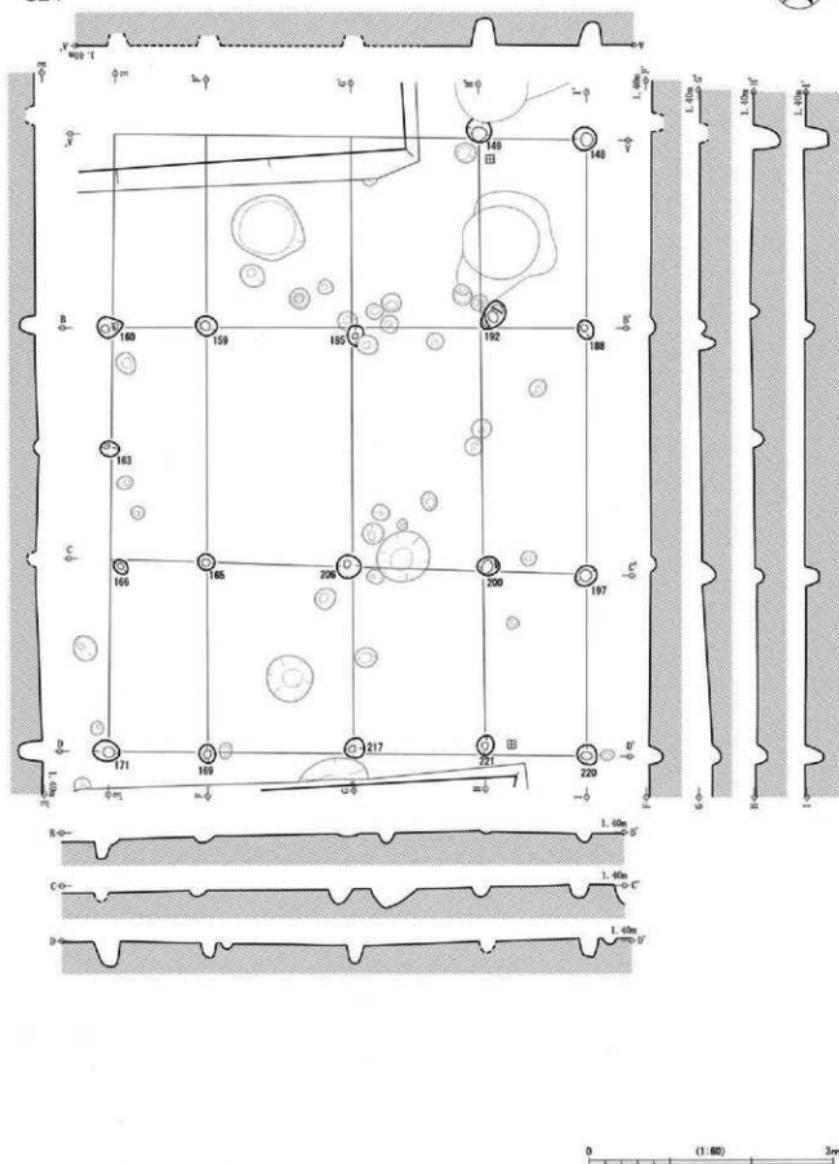


圖版10

遺構全体図 9

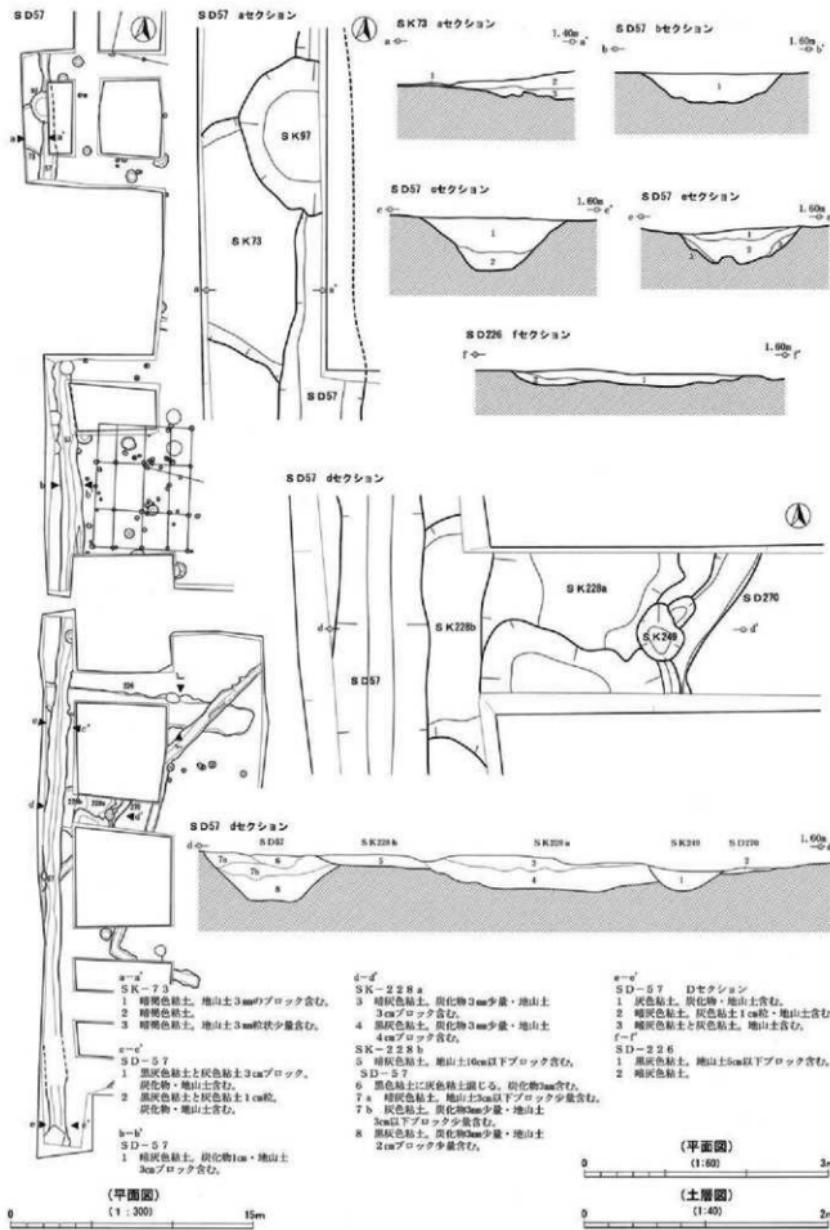


SB1



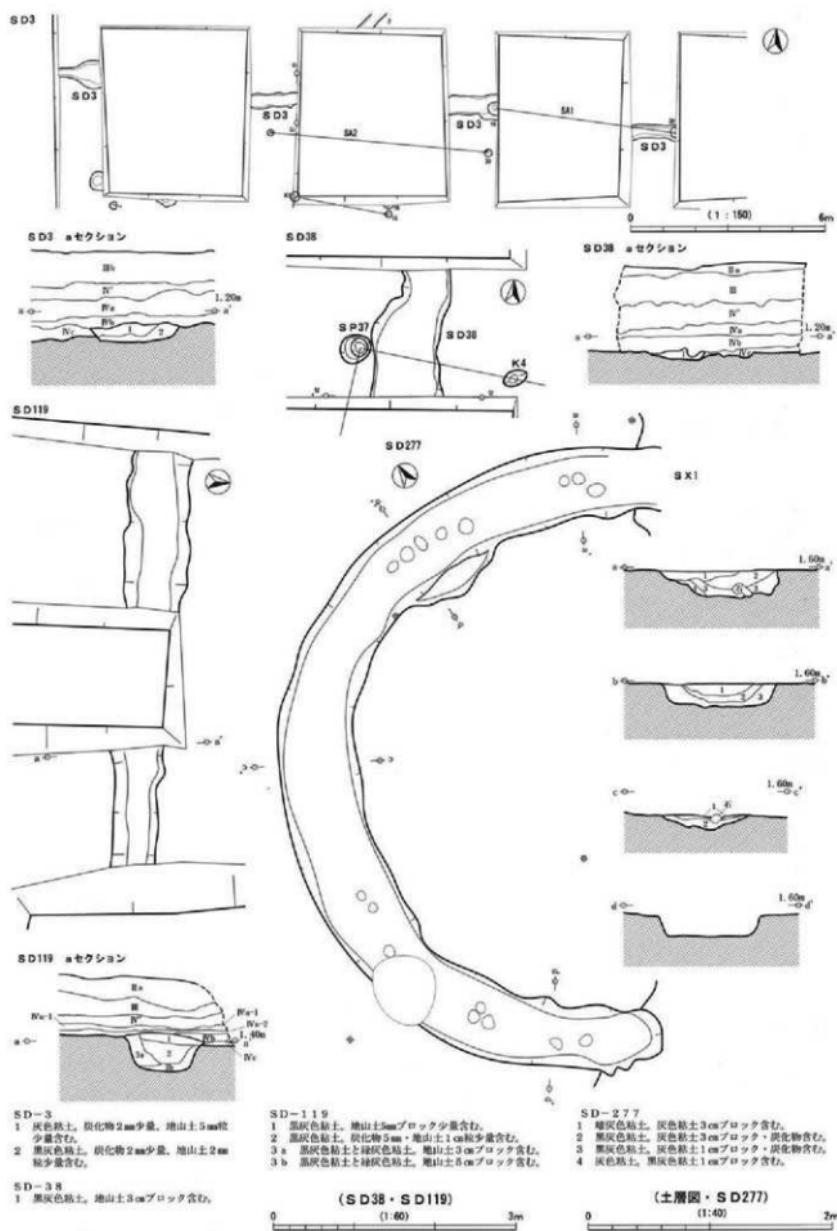
図版12

遺構個別図 2



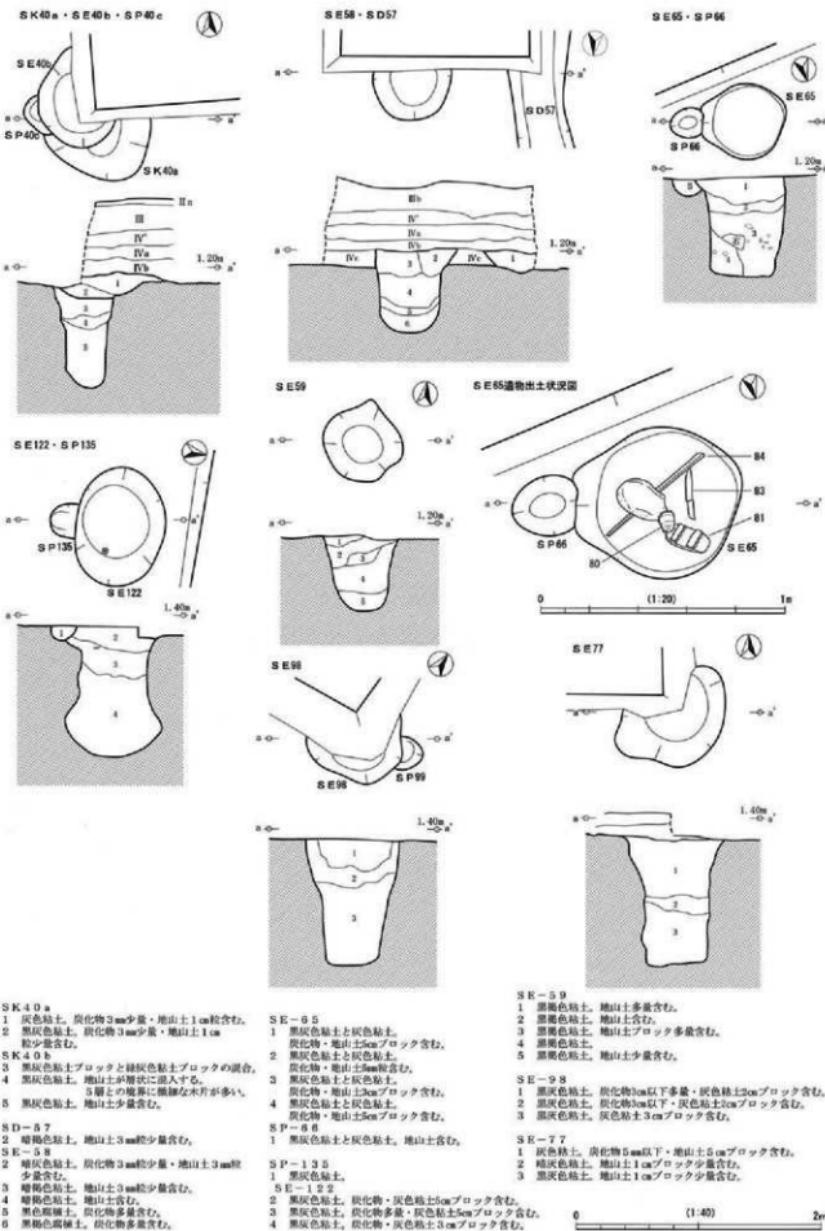
遺構個別図3

図版13



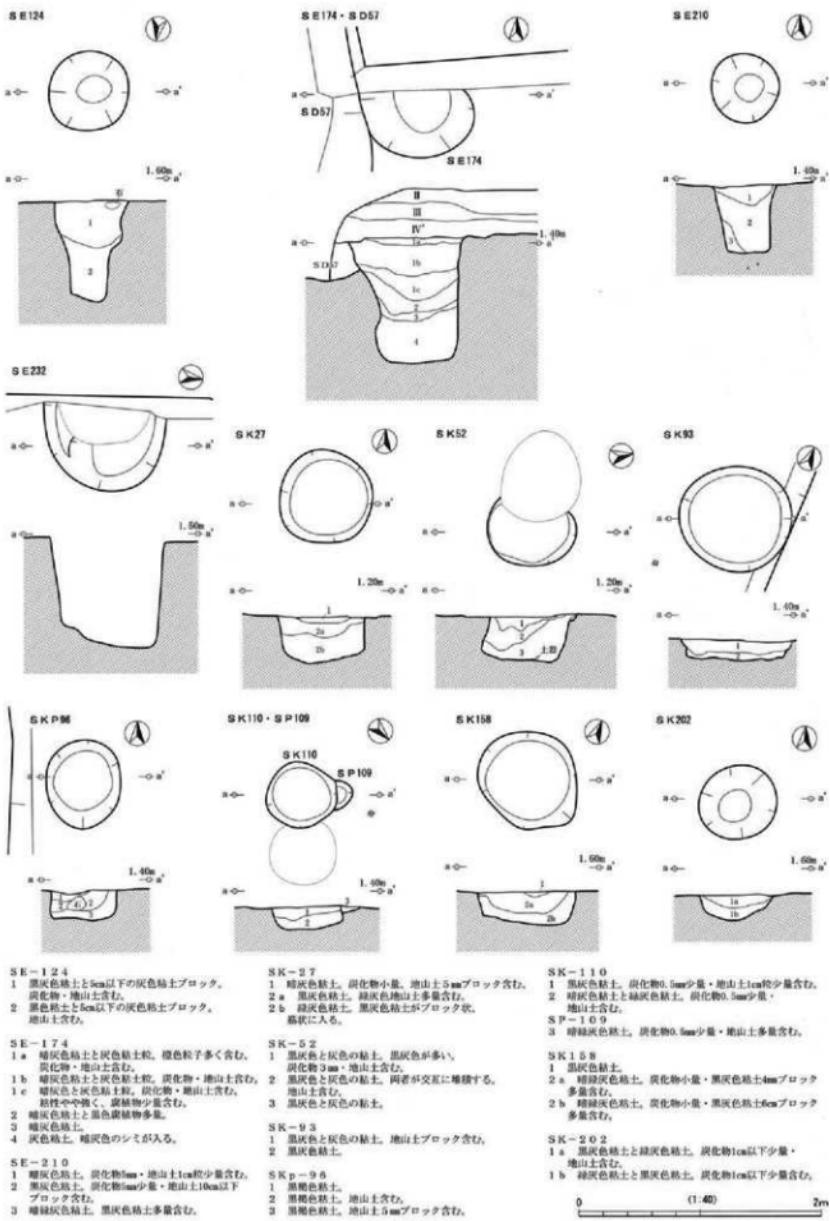
圖版14

遺構個別図 4



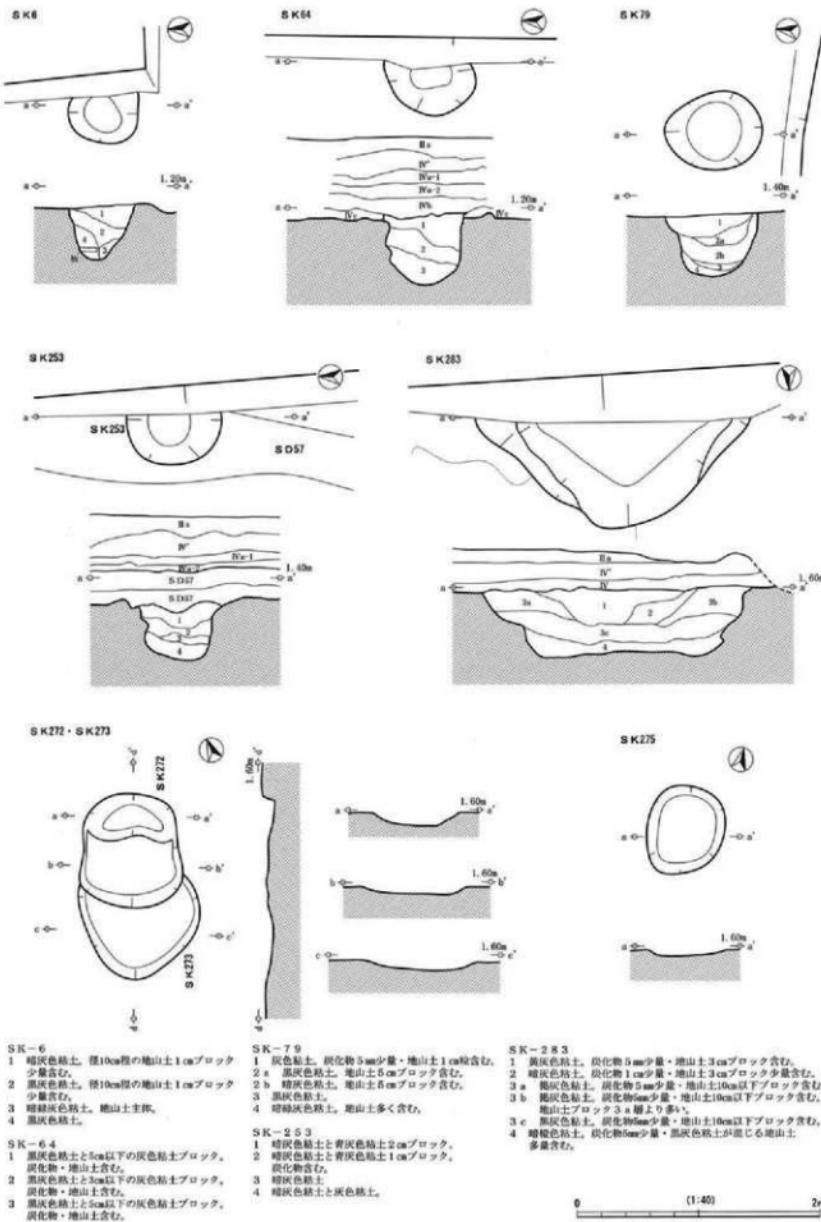
造構個別図 5

図版15

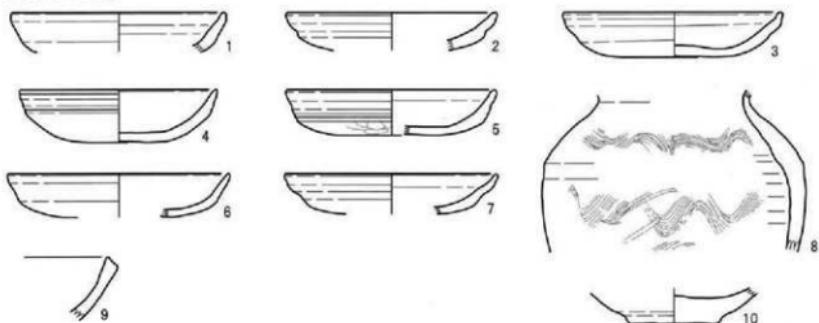


図版16

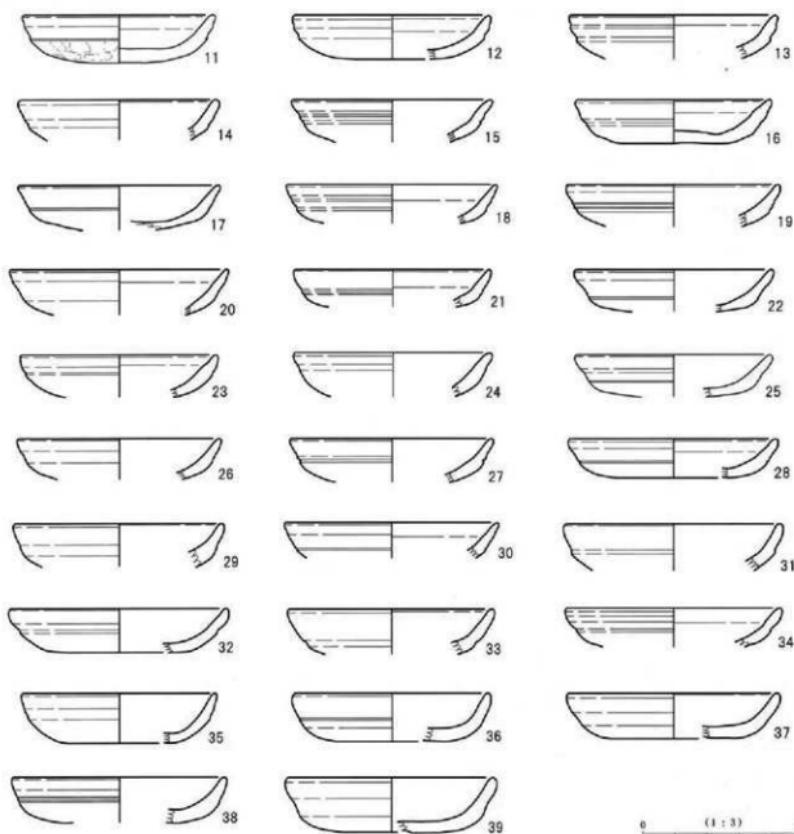
遺構個別図 6



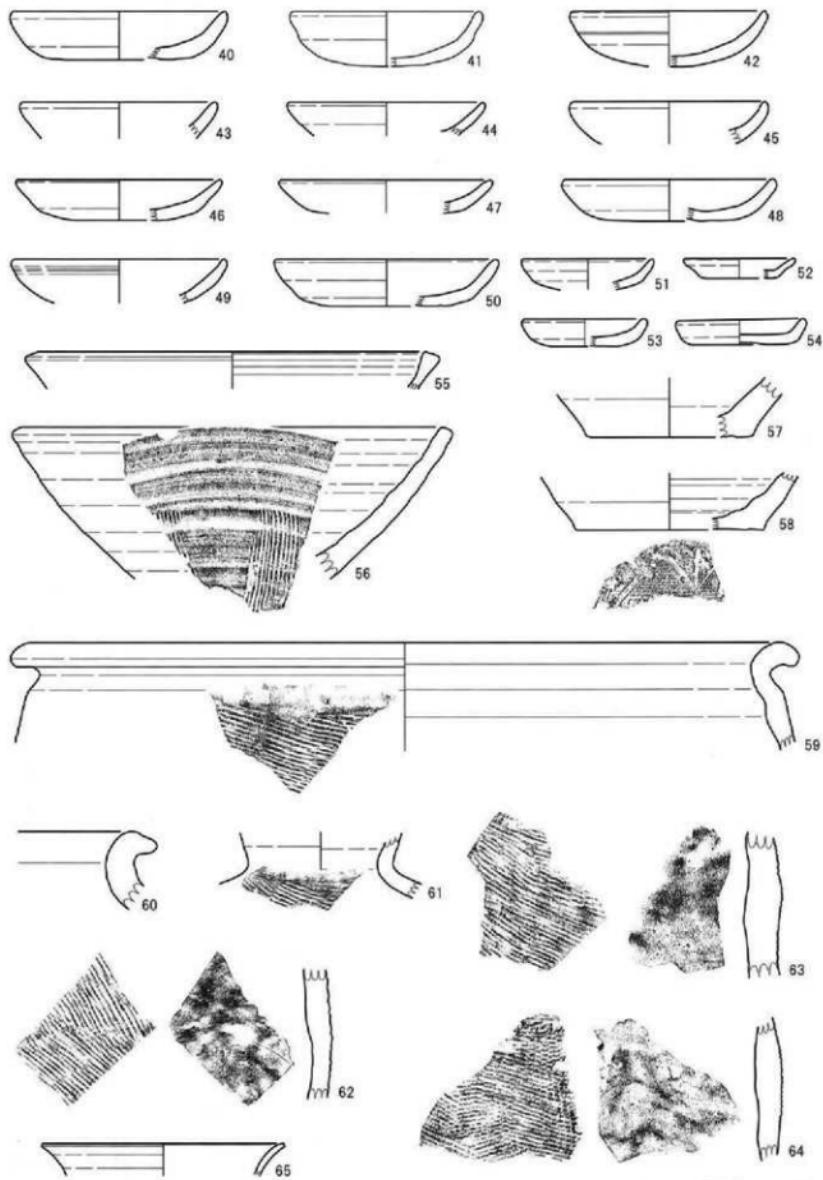
## SD 57 A地区



## SD 57 B地区

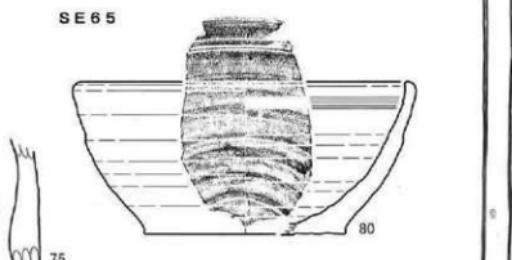
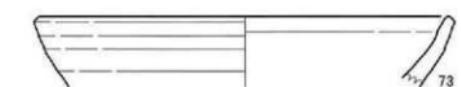
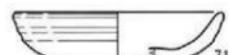
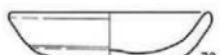
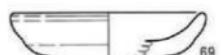


0 (1 : 3) 10cm

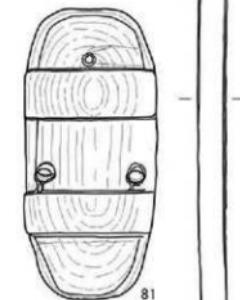
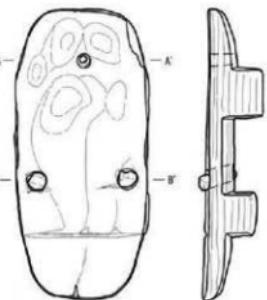
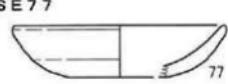
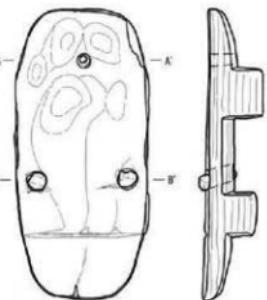
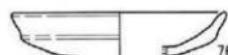


0 (1 : 3) 10cm

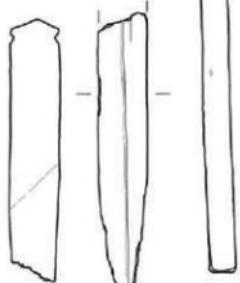
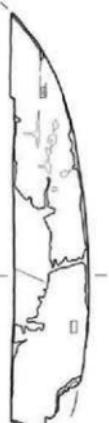
## SD 57 C地区



## SD 277



## SE 77



78

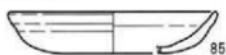
79

80 81 82 83 (1 : 3) 30cm

78 79 81 83 (1 : 4) 30cm

84

SE 122



85

SE 210



88

SD 38



89

SK 79



92

SK 52

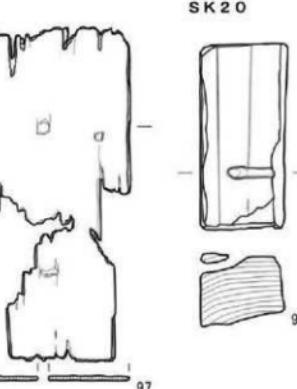


86

SK 64



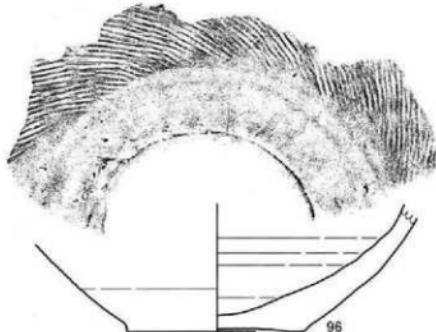
87



SK 20

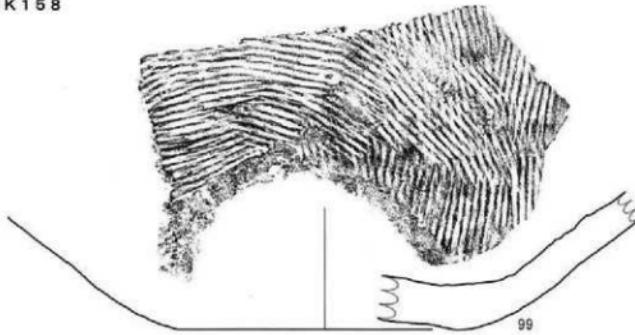
98

SK 96



96

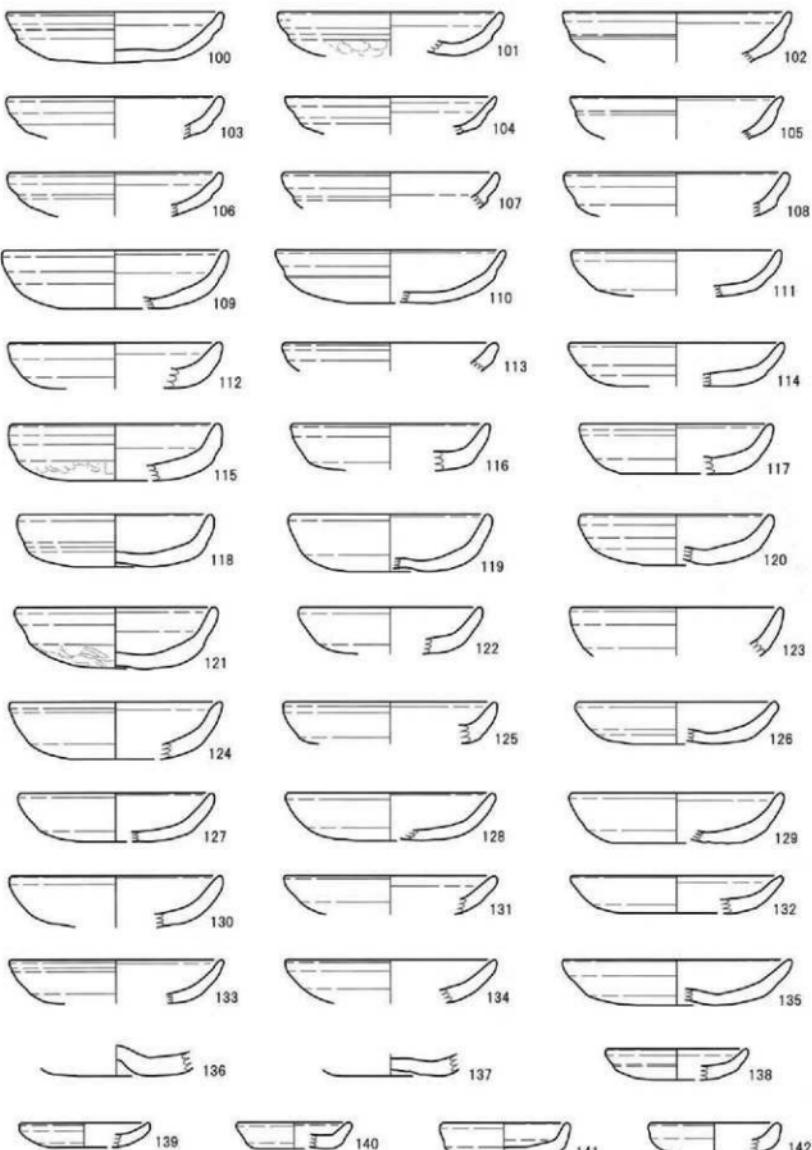
SK 158



99

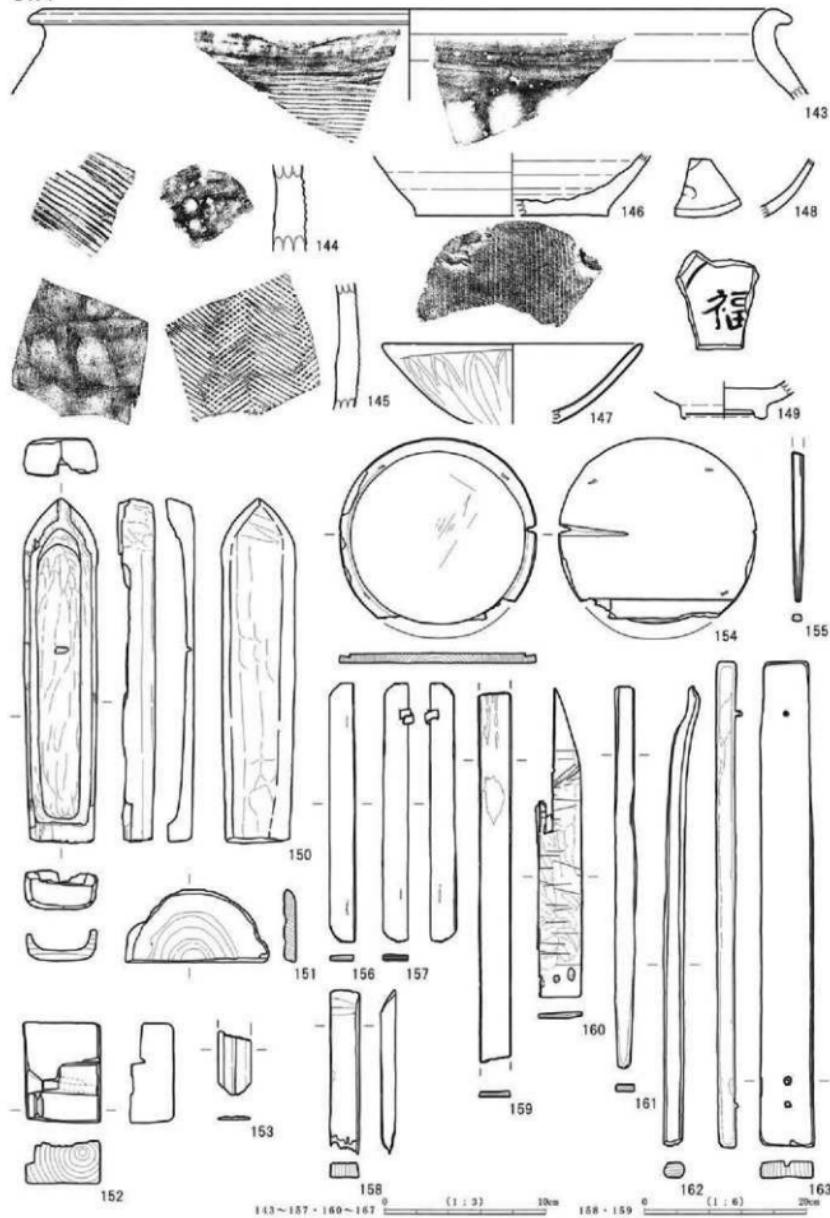
0 (1 : 3) 10cm

S X 1

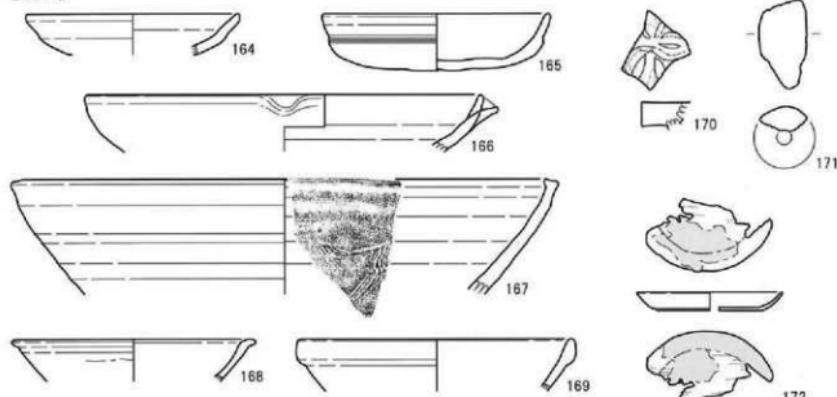


0 (1 : 3) 10cm

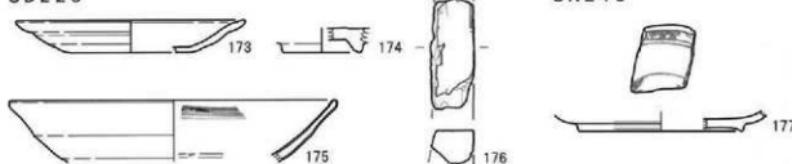
S X 1



SK 7 3



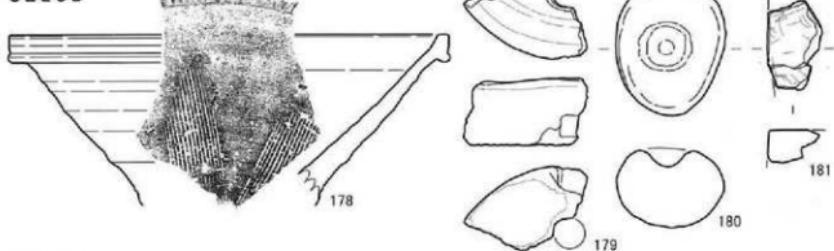
SD 2 2 6



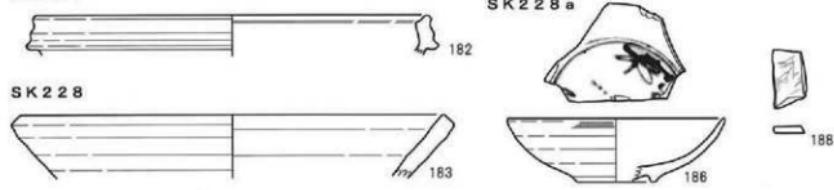
SK 2 4 9



SE 2 8 2



SK 2 3 7

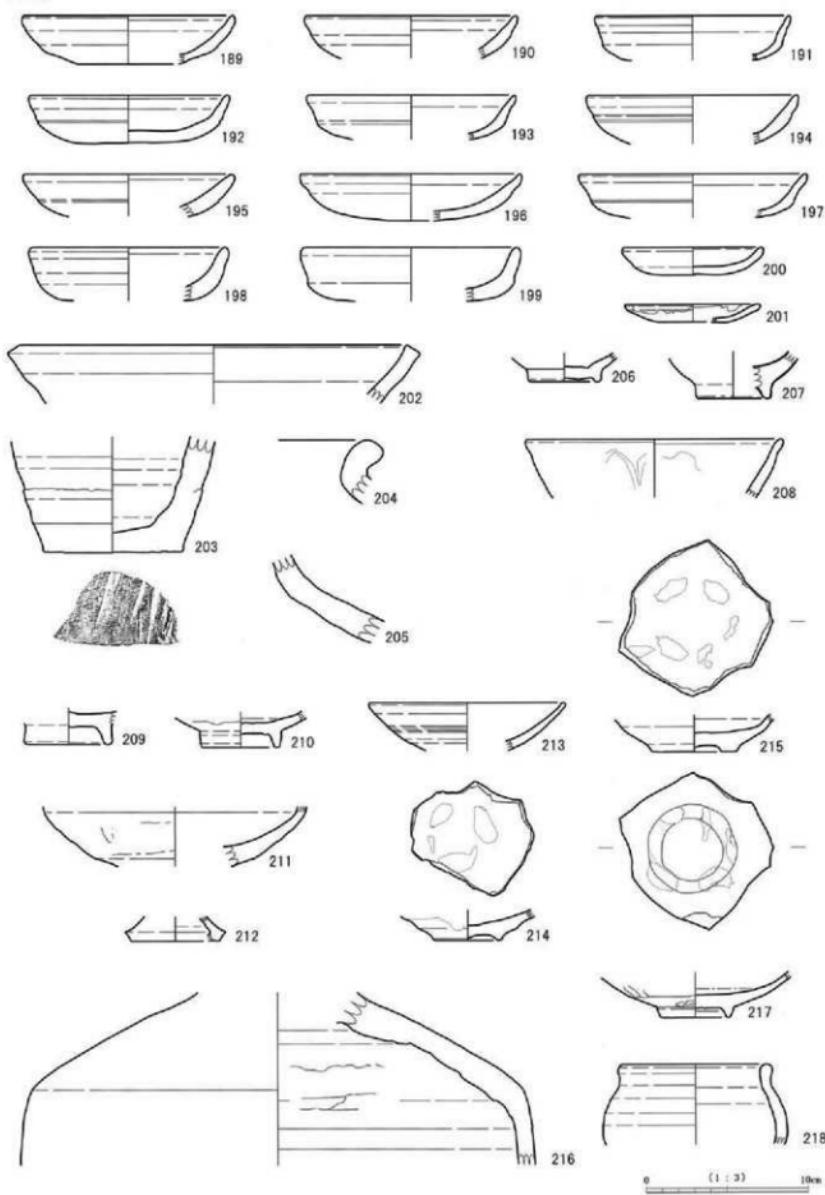


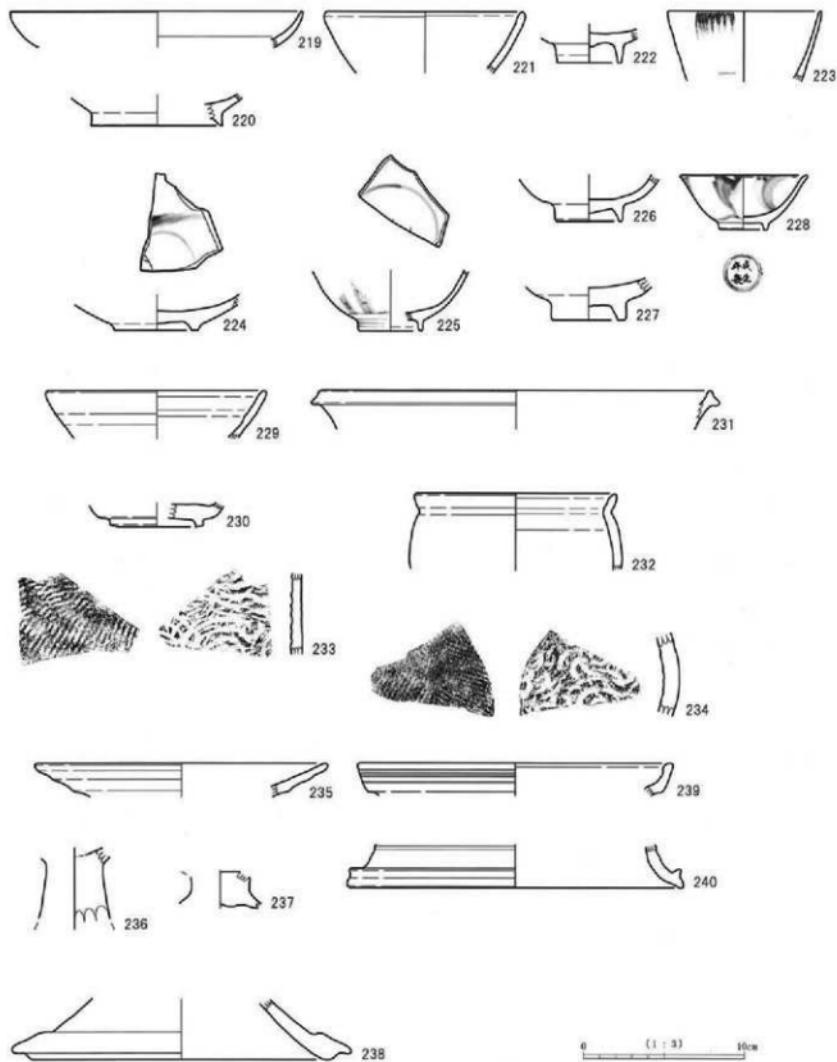
SK 2 2 8

(1 : 3) 10cm (1 : 43) 10cm

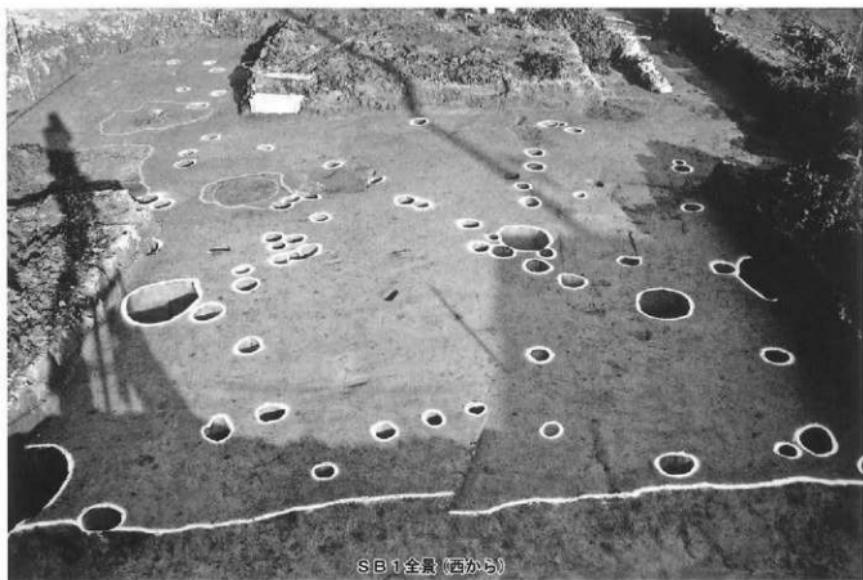
169~174・188 0 169・175~187

包含層











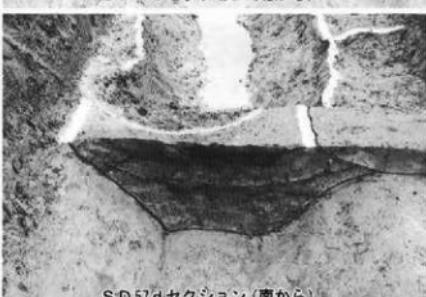
SK73セクション（北から）



SD57bセクション（北から）



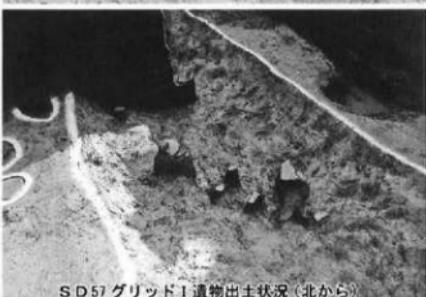
SD57cセクション（北から）



SD57dセクション（南から）



SD57eセクション（北から）



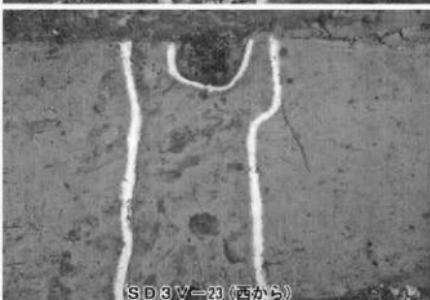
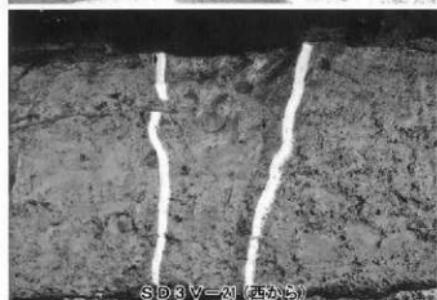
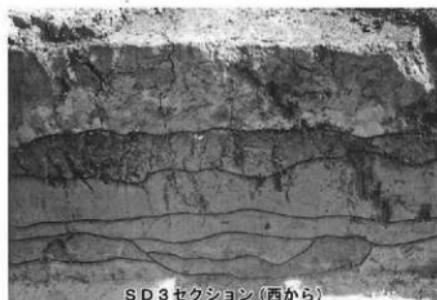
SD57グリッドI遺物出土状況（北から）

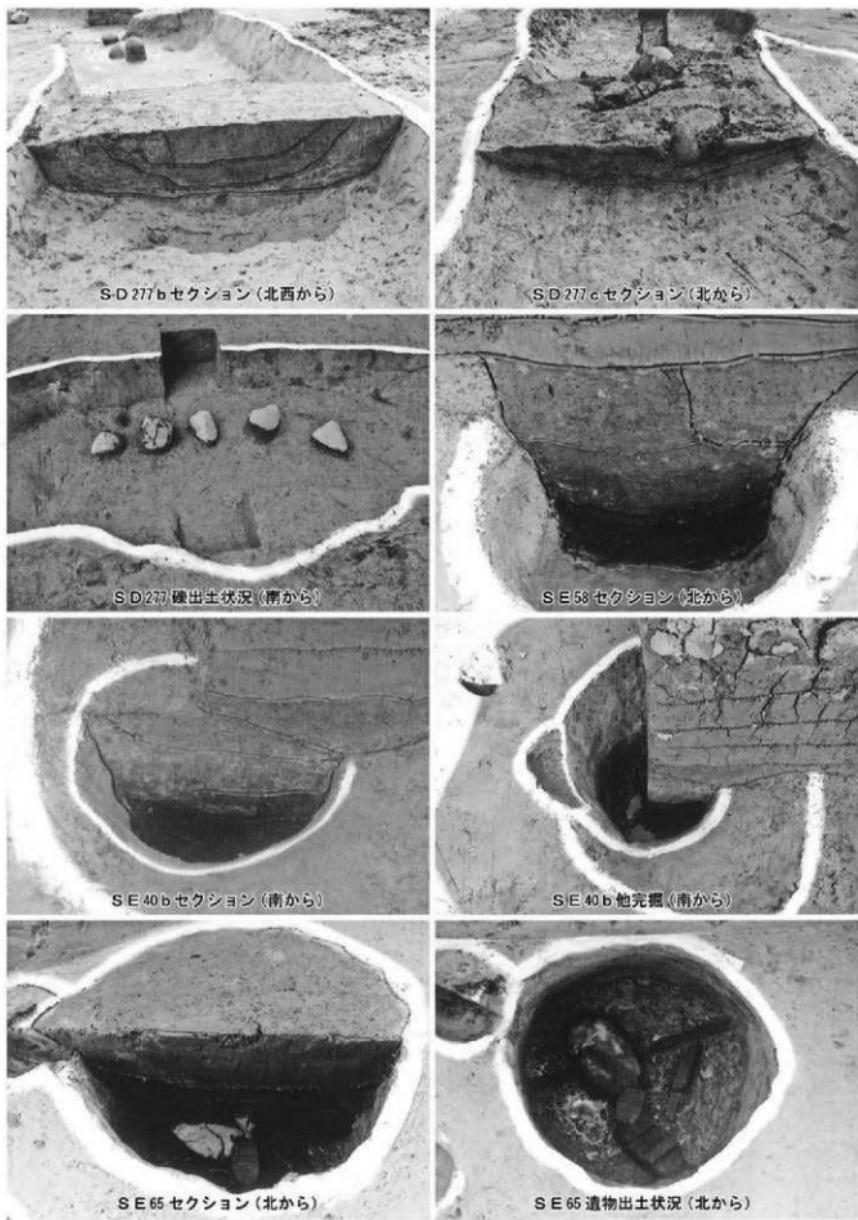


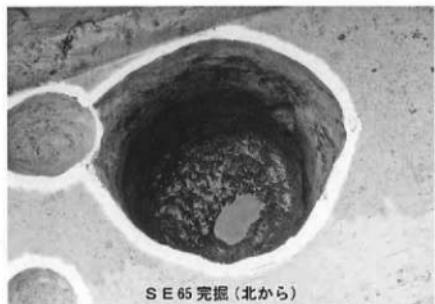
SK228a・bセクション（南西から）



SK228a発掘（西から）



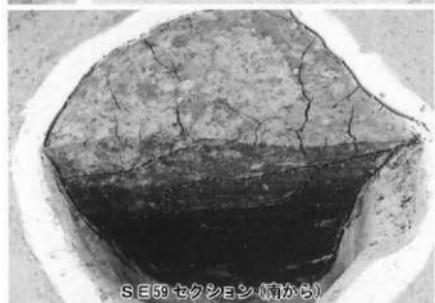




SE 65 完掘（北から）



SE 17 セクション（南から）



SE 59 セクション（西から）



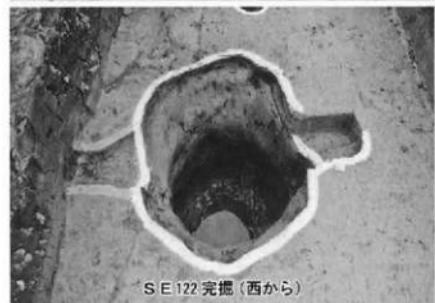
SE 59 完掘（南から）



SE 98 セクション（南から）



SE 174 セクション（南から）



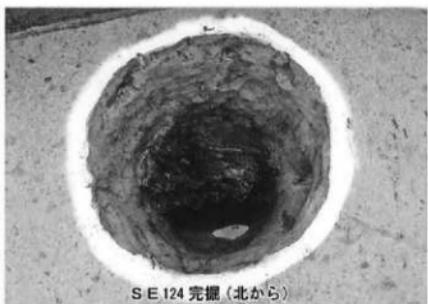
SE 122 完掘（西から）



SE 122 セクション（東から）



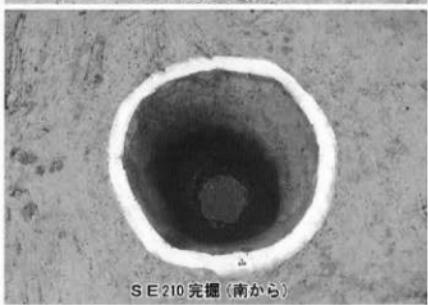
S E 124 セクション（南から）



S E 124 完掘（北から）



S E 210 セクション（南から）



S E 210 完掘（南から）



S E 222 セクション（東から）



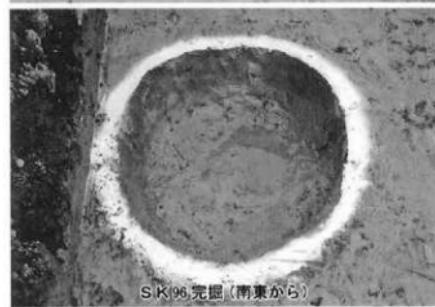
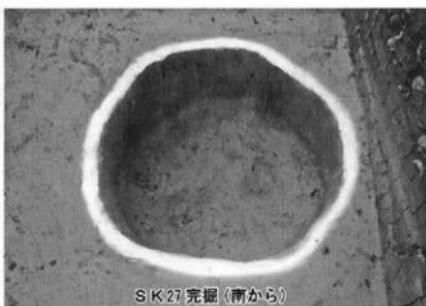
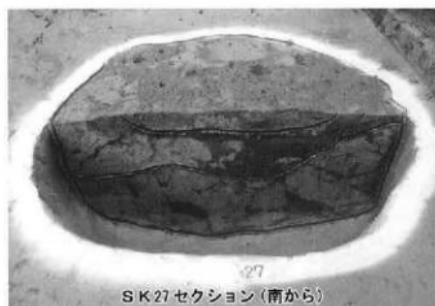
S E 282 セクション（南から）

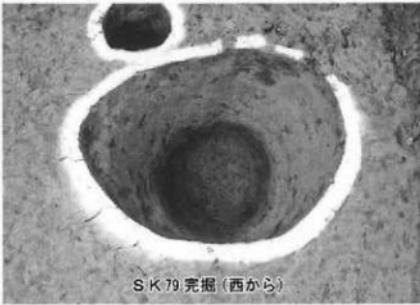
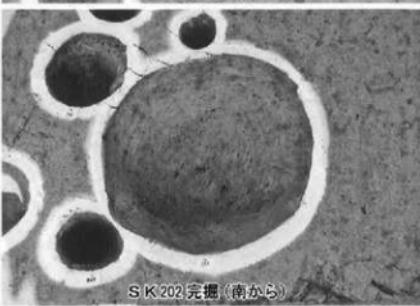
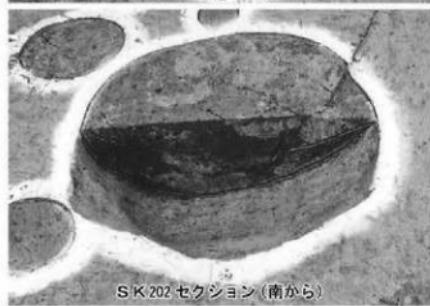


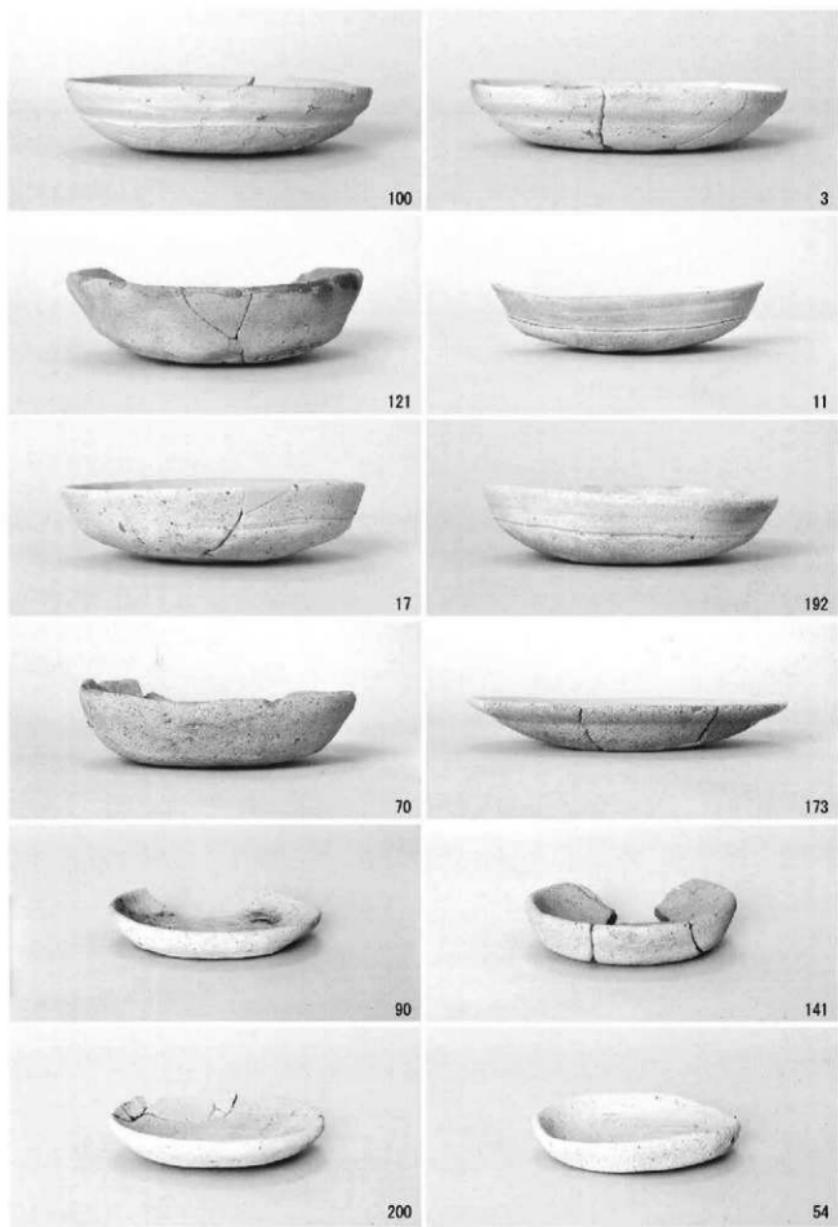
S E 282 完掘（南から）

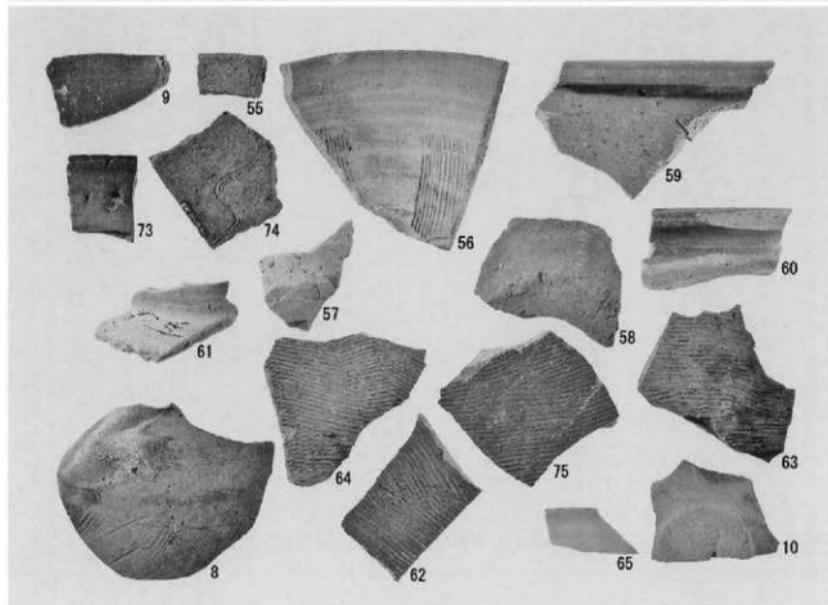
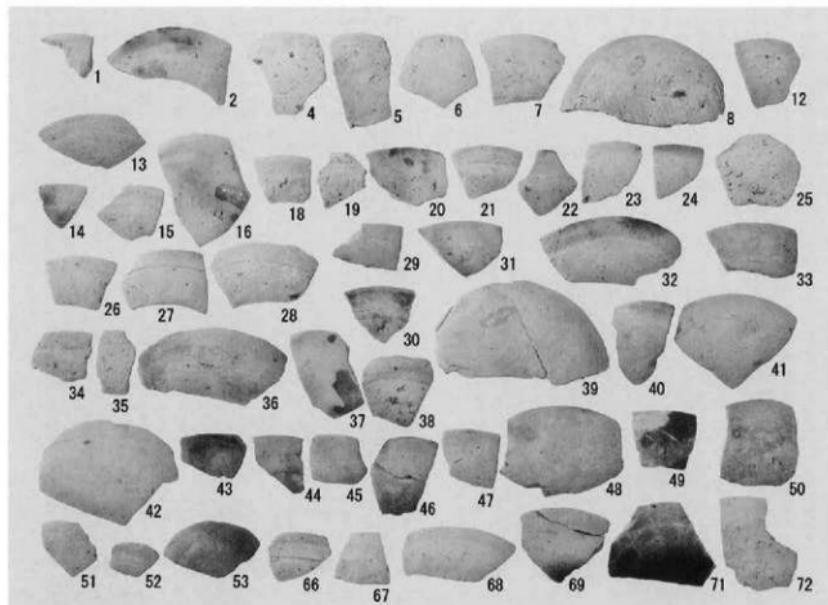


S K 93 セクション（南から）



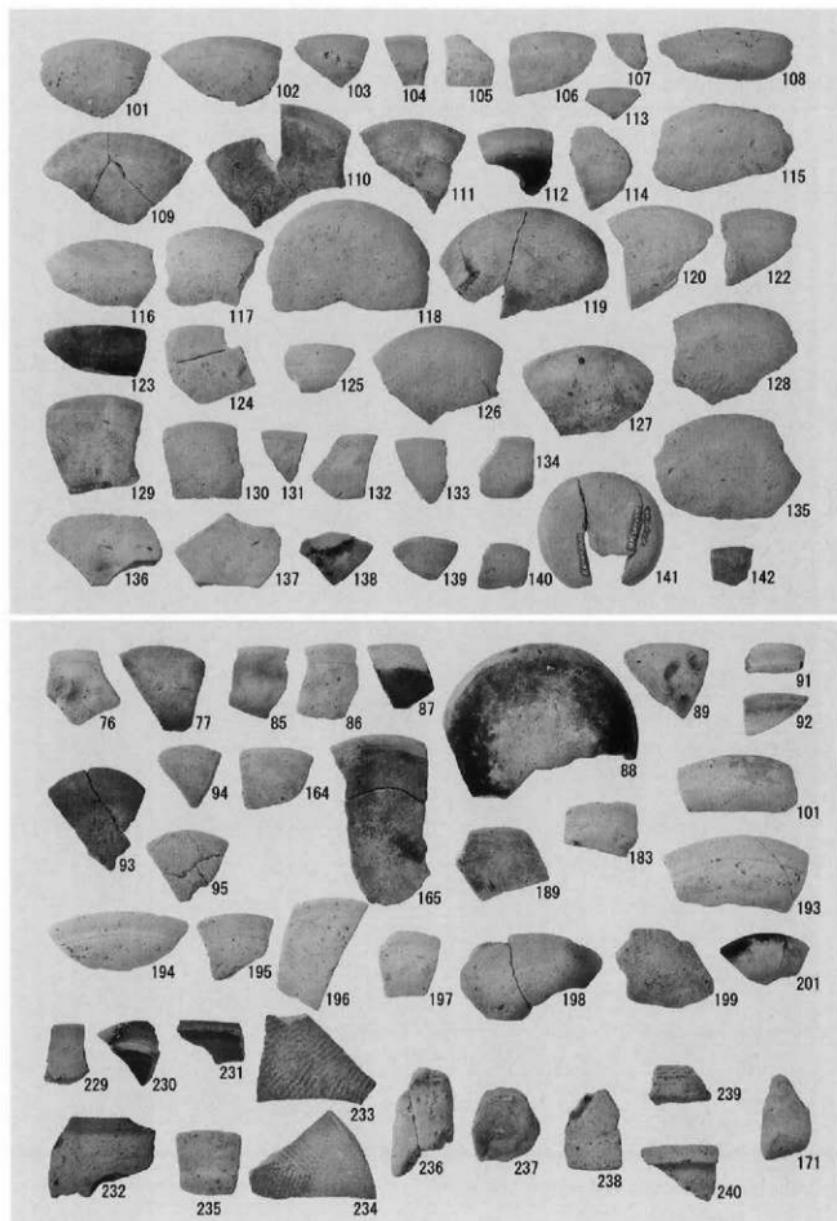


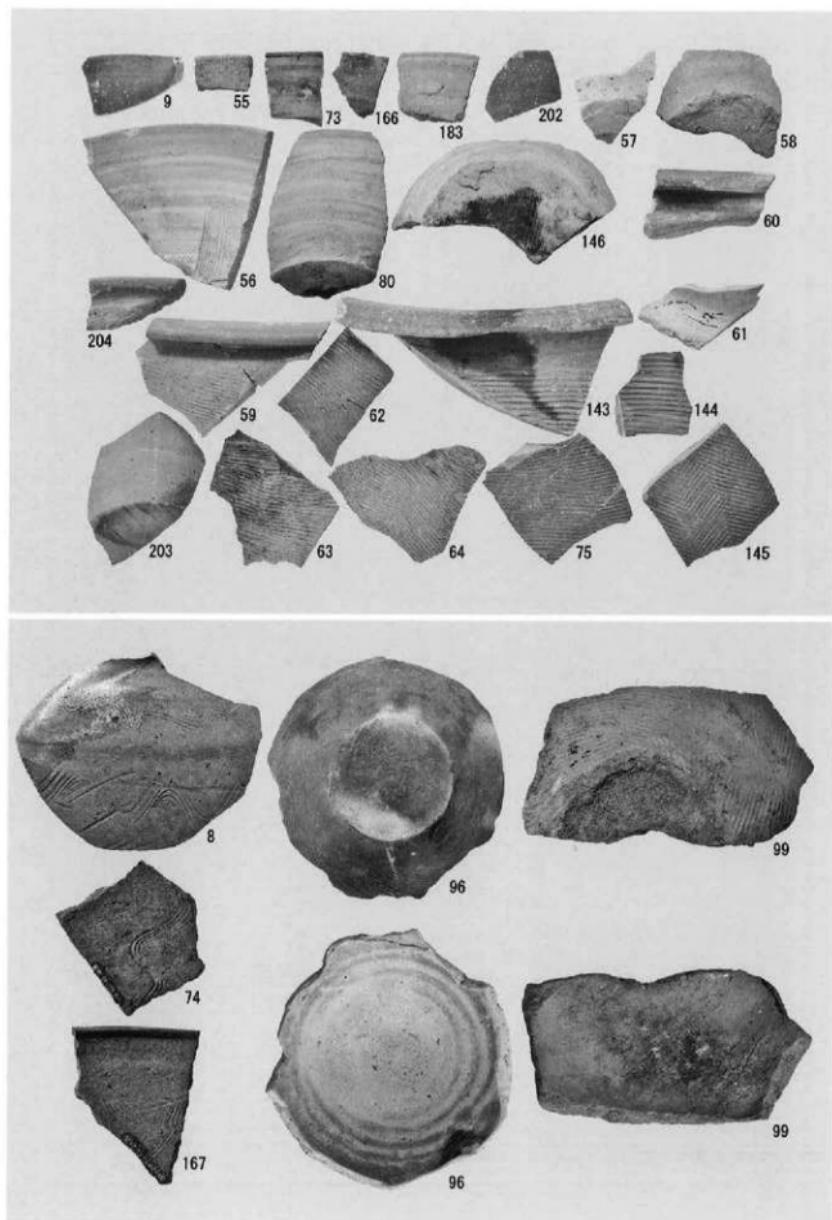


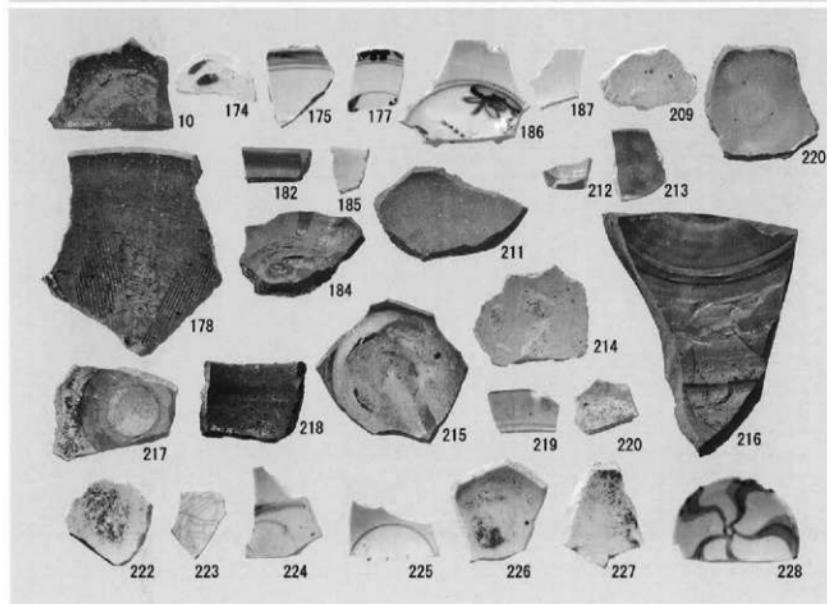
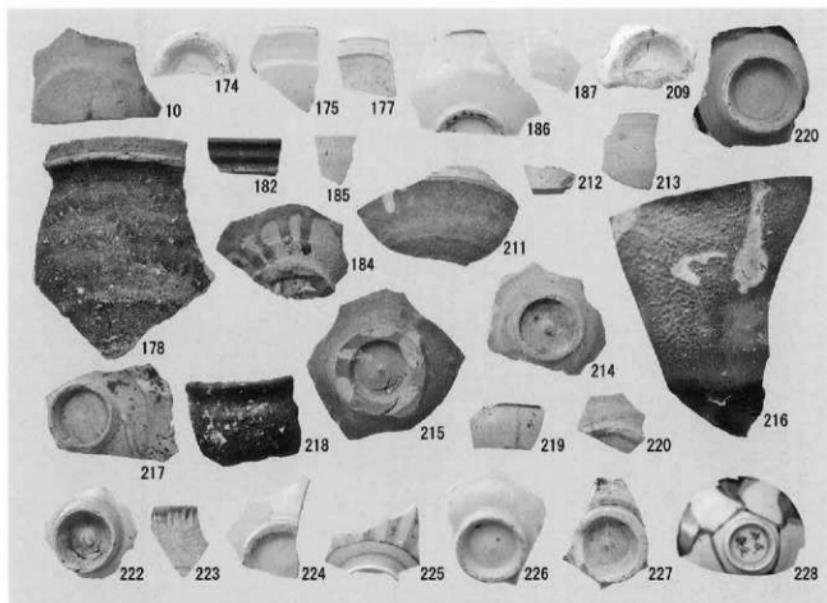


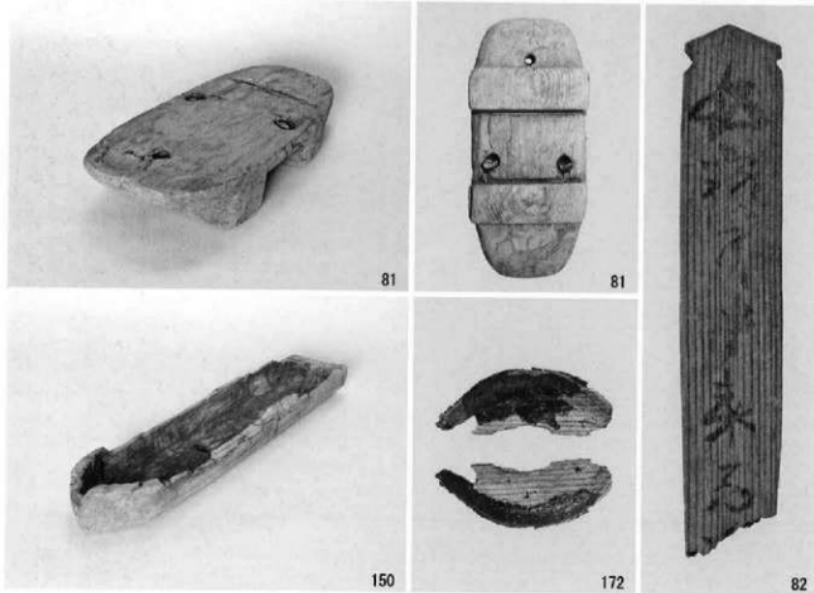
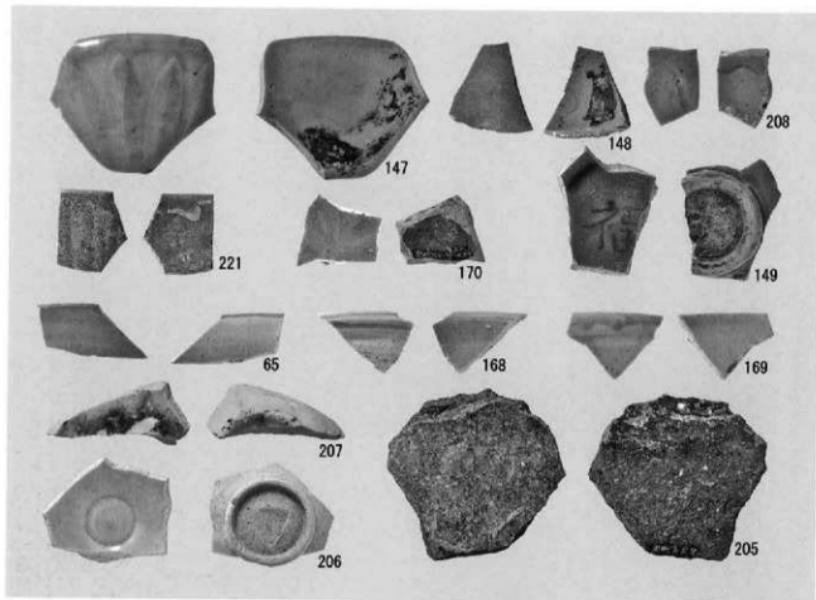
遺物写真3

図版37



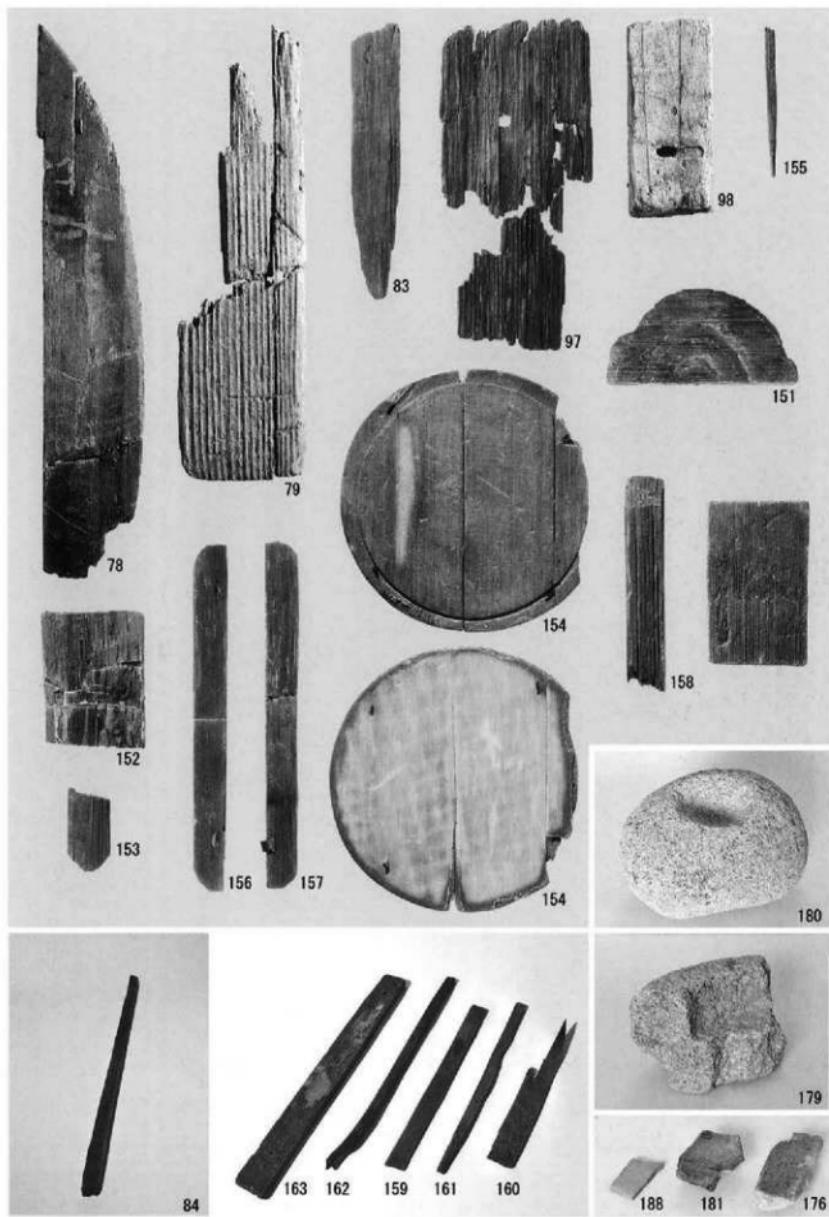


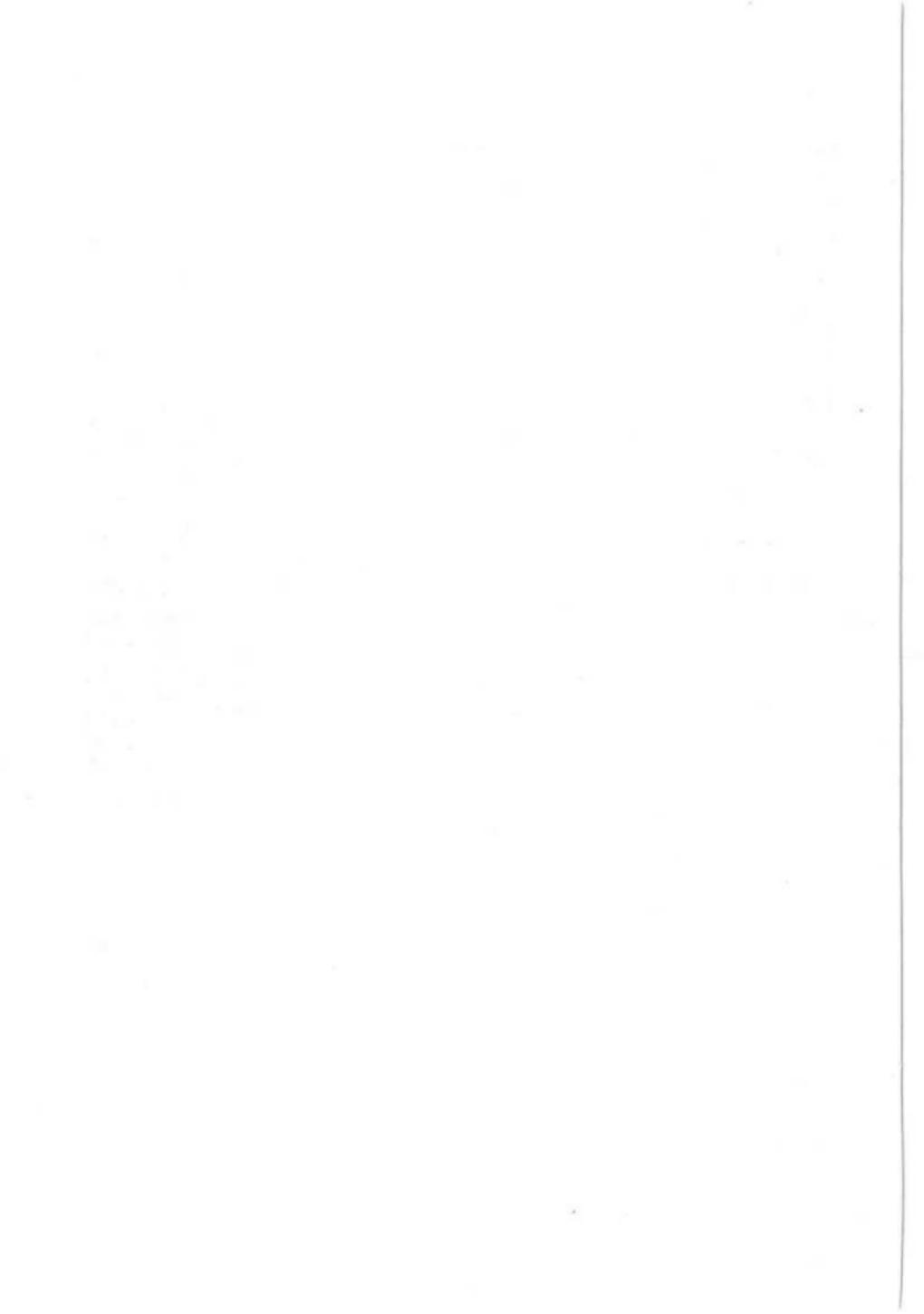




遺物写真 7

図版41





## 報告書抄録

ふりがな	せきまち							
書名	関町							
副書名	新潟県柏崎市関町 関町遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 67 集							
編著者名	中島義人							
編集機関	柏崎市教育委員会教育総務課遺跡考古館							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 Tel 0257-23-5111							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
関町遺跡	新潟県柏崎市	15205	623	37 度 21 分 36 秒	138 度 33 分 14 秒	20091008 ～ 20091127	1,375	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
関町遺跡	集落跡	古墳時代 古代 中世	据立柱建物・槽・溝・井戸・土坑・ 湿地性堆積			土師器・須恵器・中世土器・ 珠洲・青磁・白磁・近世陶 器・木製品・石製品・鐵 治関連遺物・種子・骨片		中世前期の集落 跡が主体。区画溝 や湿地性堆積か ら土器皿・陶磁 器・木製品などが まとまって出土 した。祭祀に関連 する木製品が出 土した。

柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書 第67集

関 町

—新潟県柏崎市・関町遺跡発掘調査報告書—

平成24年3月24日 印刷

平成24年3月30日 発行

発 行 柏崎市教育委員会 新潟県柏崎市中央町5-50  
編 集 柏崎市遺跡考古館 新潟県柏崎市小倉町7-18  
印 刷 (株)小田 新潟県柏崎市安田4153-1